大坪

——甲府市横根町反田大坪遺跡発掘調査報告書——

1976.3

山梨県遺跡調査団

序　　文

甲府市横根町字反田所在の大坪遺跡は、国鉄中央線にまたがって南北に広がっている。面積は広大なもので正確な範囲を把握するのは困難である。

当初集落址が発掘されるものと思っていたものが、調査が進行するに従って遺物の出土状態が、かつて私達の経験したことのない異常とも思われるものであった。それは遺物の粗密が発掘区によって極端に差があり、黒書土器、須恵器、灰釉陶器等がほとんど無いことや、土師器も杯、皿類が主で甕類は無いこと、又土師器の焼成がどれも生焼状態で、黄褐色を呈し、胎土がやわらかいなどの点であった。

遺構は南地区で溝と土師器集積の竪穴があり、北地区では焼土2ケ所のみである。遺物の量は南が多く、北は焼土周辺に若干出土したのみであった。しかし、注意すべきは、十郎橋改良工事中に発見された炉穴状ピットからの大量の生焼成土器群である。工事中であったために記録が得られなかったが、この炉穴こそが遺跡の性格を決定するものとなった。即ちこの横根、川田町あたりの低湿地は奈良時代以前より平安期に至る土器、瓦等の生産地、あるいはそれに類した地域ではないかと考えられる。

速断するのは早計かもしれないが、この地域が古代甲斐国において、土師器生産という貴重な産業を荷負っていた可能性があることを知っておきたい。又 甲府盆地北側山中にある多数の積石塚群との関係は今後の研究課題としても、この地域の開発作業については充分に留意して行なわなければならないだろう。幸にして今回は極めて緊急ではありながら県土木部の協力を得て記録保存の為の調査を実施することができた。

文末ではあるが調査担当者の菊島美夫氏をはじめ調査に参加された方々、及び、甲府市教育委員会の山村氏や地元の方々には心よく調査に協力していただいたことに深甚なる謝意を表します。

昭和51年3月31日

山梨県遺跡調査団

団長　井　出　佐　重

凡　　例

1．この報告書は甲府市横根町反田地内の国道140号線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．この調査は山梨県知事田辺国男を委託者、山梨県遺跡調査団長井出佐重を受託者として昭和50年5月8日より5月31日の間実施された。

3．本書の作成は菊島、末木、山崎の執筆、トレース、写真、編集により、執筆者名をそれぞれ文末に記した。

4．出土遺物、実測図は遺跡調査団事務局県文化課に保管してある。

目　　次

1. はじめに …… 1

(1) 調査の経過 …… 1

(2) 調査組織 …… 1

(3) 地形と歴史的環境 …… 5

2. 大坪遺跡の概要 …… 5

(1) 南地点 …… 6

(2) 北地点 …… 6

3. 南地点土師器集積遺構 …… 7

4. 遺物 …… 13

(1) 南地点・土師器集積遺構 …… 13

(2) 南・北・十郎橋地点 …… 38

5. 考察 …… 56

(1) 土師器集積遺構出土品の分類 …… 56

(2) 〃 法量と形態 …… 59

(3) 〃 整形方法等について …… 62

(4) 〃 編年上に占める位置 …… 63

(5) 大坪遺跡の性格 …… 64

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　大坪遺跡全体図 …… 3・4
第3図　〃　南地点全体図 …… 6
第4図　〃　〃　A—3グリッド …… 7
第5図　〃　〃　A—4・5グリッド …… 8
第6図　〃　北地点全体図 …… 9
第7図　〃　〃　A—3グリッド …… 10
第8図　〃　〃　A—4グリッド …… 11
第9図　土師器集積遺構 …… 12
第10図　〃　出土遺物 …… 14
第11図　〃 …… 15
第12図　〃 …… 16
第13図　〃 …… 17
第14図　〃 …… 18
第15図　〃 …… 19
第16図　〃 …… 20
第17図　〃 …… 21
第18図　〃 …… 22
第19図　〃 …… 23
第20図　〃 …… 24
第21図　〃 …… 25
第22図　〃 …… 26
第23図　〃 …… 27
第24図　南地点出土遺物　(1) …… 39
第25図　〃 …… 40
第26図　〃 …… 41
第27図　〃 …… 42
第28図　〃 …… 43
第29図　北地点出土遺物 …… 44
第30図　〃 …… 45
第31図　十郎橋地点出土品　(1) …… 46
第32図　〃　(2) …… 47
第33図　〃　(3) …… 48
第34図　〃　(4) …… 49

図　版　目　次

図版1　1．南地点全景（南より）…… 1

2．北地点発掘風景 …… 1

図版2　3．南Ａ２グリッド土師器集積遺構 …… 2

4．同上（南ブロック） …… 2

図版3　5．南Ａ２グリッド土師器集積遺構（北ブロック） …… 3

6．南Ａ４グリッド …… 3

図版4　7．土師集積出土遺物 …… 4

8．南Ａ２グリッド …… 4

図版5　9．南Ａ５グリッド …… 5

10．北Ａグリッド …… 5

図版6 …… 6

図版7 …… 7

図版8 …… 8

図版9　Ａ２ 土師器集積遺構出土遺物 (1) …… 9

図版10　Ａ２ 土師器集積遺構出土遺物 (2) …… 10

図版11　Ａ２ 土師器集積遺構出土遺物 …… 11

図版12　Ａ２ 土師器集積遺構出土遺物 …… 12

大坪遺跡発掘調査報告書

1. はじめに

(1) 調査の経過

昭和50年3月初め、中央線沿いに新設されている国道140号線改良工事現場に於て山本寿々雄、菊島美夫（日本考古学協会員）の両氏は多量の平安時代土師土器が出土しているのを発見した。翌日両氏は甲府市及び県教育委員会にこれを連絡し、県文化課で現地調査を行なった結果、平安時代の土師式土器の生産地もしくはそれに等しい様な重要な遺跡であり、特殊な遺構が発見される可能性があるとして、県土木部道路建設課とこの遺跡の発掘調査の打合せを行なった。

遺跡発見時点では、すでに側溝の工事が着手され、49年度事業で工事が続行中であるため 早急な処置が望まれていた。このため 菊島ら数名が後に大坪南A2グリッドにあたる遺物集積地区を3月22日から24日の3日間調査し、土師器集積遺構中から復元可能土器約20個と破片百数十点を得た。この他にも遺物集積地が想定されるとして、本調査を実施することとした。

昭和50年5月7日付で山梨県知事 田辺国男を委託者、山梨県遺跡調査団長井出佐重を受託者として、昭和56年5月8日より5月30日の間に道路敷内の中央線南北地区の本調査を実施するはこびとなった。

中央線南は10m×40mのグリッドを設定してこれを全掘し、北側は40m×20mのグリッドを設置し、この中をA.Bのトレンチを設定して調査を実施した。この他に調査中発見された十郎橋（国道140号線）改良工事の土器集積地点がある。この十郎橋地点は重要な遺構にもかかわらず、工事中で調査が不可能の為、遺物採集のみに終っている。

この大坪遺跡の範囲は広く面積にすれば約10万m^2以上になるであろうし、集落址及び農耕地跡まで含めれば恐らくこの付近一帯ということになるであろう。

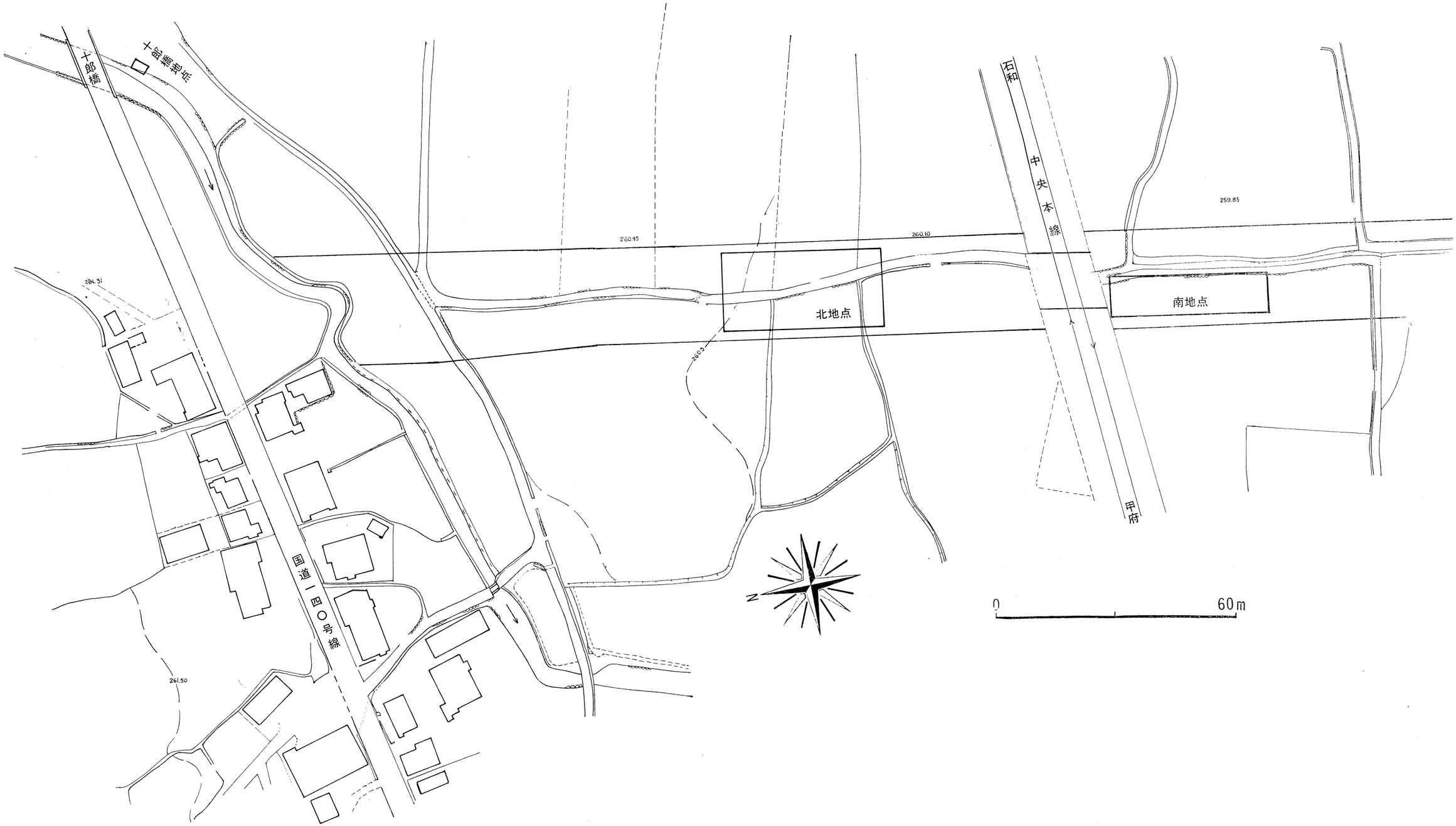
今回の調査では平安時代のものが主であったが、近辺からは古墳時代の遺物も発見され、古墳群も存在するところから古墳時代（6世紀中頃）から人々が居住していたことが判明している。今後の工事に於ても調査は欠かせないものであろう。（末木）

(2) 調査組織

- 調査団長　井出佐重　山梨県遺跡調査団長
- 調査担当者　菊島美夫　日本考古学協会員　山梨県遺跡調査団幹事
- 調査員　増田泰重・山崎金夫・伊藤恒彦・末木　健
- 調査補助員　山路恭之助・加藤武美（日本大学）・井川達雄(明治大学)・佐野勝広(国士館大学)
  保坂康夫（広島大学）・北村恵利（御茶水女子大学）
  磯部厚・大平宣志・中沢千恵子・高島晋・三原富士夫・青木直久・袴田均・長田肇・平井こづ枝・浅川和子・宮沢秀明・天野正貴・数野雅彦・志村恵子・三浦一美・山内勉・榎本博・石黒雅春・本間千波・出月洋文・岡崎裕介・栗山保・須玉稔・小沢俊之・植草秀雄・近藤禎之・本間暁美・磯部ゆき江（山梨大学）

大坪遺跡所在地
甲府市横根町地内
護国神社風致地区
168.8ha
愛宕山風致地区
107.5ha
酒析風致地区
7.4ha
石和町
石和都市
計画区域
玉諸
白井河原

第1図　遺跡位置図


十郎橋
十郎橋起点
石和
中央本線
北地点
南地点
甲府
国道一四〇号線
260.45
260.10
259.85
261.31
261.50
N
0
60m

第2図　大坪遺跡全体図

（3） 地形と歴史的環境

甲府盆地北側に並ぶ山塊が 最も盆地に突き出している様な所が、石和駅北側の大蔵経寺山（標高715.5m）とそれに連なる山々である。甲府北側の愛宕山（427.9）と大蔵経寺山の間には善光寺の扇状地を形成した高倉川、大円川があり、その東には大山沢川が横根町に流れる。善光寺と横根町の間に中央線酒折駅があって、ヤマトタケルノミコトが東征の帰途立ちよって、火たきの老人と歌の問答をかわしたという伝説のある酒折宮（さかおりのみや）がある。この酒折から国道140号線（青梅街道）と旧国道20号線（現県道甲府青梅線）とに山崎三叉路で別れ、青梅街道は山沿いに北東に走る。

大坪遺跡は大蔵経寺山の西麓を流れる大山沢川が横根町に流れ込んで十郎川となった地域で、中央線と旧国道20号、現140号線の間に位置する。標高260m位で、石和、玉諸、甲府にかけてほとんど平で、湿気が多く粘土質の土地である。こうした平坦な地域ではあっても、かつてはこの地域を流れる平等川や 濁川、笛吹川、荒川が蛇行して、自然堤防止に数多くの遺跡を残している。その年代は水田農耕が始まった時代、恐らく弥生時代後半位から 古墳時代前期以降であろうと思われる。甲府市里吉町近くの東小学校々庭からは弥生時代後期の壺及び古墳時代五領式土器、鬼高式土器や奈良、平安時代に至る遺物が発見されており、甲府市伊勢町や塚坪町からの 古墳時代から平安時代に至る遺跡がある。山梨市までいけば 有名な日下部遺跡などもあり、甲府盆地中央部の 低湿地に向けて弥生時代後期から平安時代にかけて急激な開墾がなされてきたことが分る。

最近になって分って来たことであるが 平安時代の土器胎土が、全県下、特に国中地方のものは類似しており、生産地と消費地という関係が想定されるまでになって来た。その生産地が 盆地内であり、特に今回の横根、大坪、川田町付近の良質な粘土を使用して製作されたのではないかと推論されるに至った。何故この地域に着目したかと言えば、昭和23年頃中島正行氏が瓦窯址ではないかとして川田町の遺跡について発表している（中島正行・郷土研究6の8 S23年）。この報文では詳細について不明であるが布目瓦等が多量に出土していることは、やはり生産地であることを推定させるし、国分寺以前の寺と伝えられる寺本廃寺まで約3K、春日居町国府まで約3K、御坂町国衛まで3K、一宮町国分（国分寺、尼寺）まで約5Kの範囲であり、奈良時代前後の甲斐国の政治、経済的中心地に近くあることや、横根、桜井、善先寺、等の山裾に積石塚古墳が群積して存在する等も考えあわせれば当時の重要な地域として認識せざるを得ない。なお付言するなら、戦前よりこの付近には瓦屋が多くあり、地域の粘土で良質の屋根瓦を多量に生産しており、又、調査中に発掘した粘土で土器を製作したところ、他の粘土を混入しなくても、そのまま焼成される良質な土を得ることができた。（末木）

2. 大坪遺跡の概要（第2図）

国道140号線改良工事は140号線と旧20号線を巾20m、長さ約500m で結ぶ新道路建設で、将来甲府バイパス（現20号線）と甲府北バイパスを結ぶ路線の一部である。この中間に国鉄中央線があり、道路は高架で通過するので、便宜上中央線より南を大坪南、北側を大坪北地点とした。なお国道140号線十郎橋南側の土器集積地点を十郎橋地点とし、今回はこの3カ所の調査を行なった。

（1） 南地点（第3．4．5図）

甲府市横根町反田が正確な地名であるが、範囲が広く地域的にも分りやすい点から大坪遺跡としたが、このあたりは標高260m前後でほとんど平坦であり、地目はブド園である。畑の中には土師器片が細片となって散布しており、東西 200～300mにも広がる。南地点の道路中央には旧農道及び水路があって、この全面調査を行うには土量の関係上困難であった為に、中央西側、3月の時点で一括遺物が出土した地域を中心に40m×10mで4mグリッドを設定した。

土層は表土20m、第Ⅱ層は粘性の強い黒褐色土で粒子がこまかく、Ⅲ層はⅡ層より酸化鉄、砂粒子を含んでⅡより粘性が小なくザラザラした暗褐色土である。Ⅱ層とⅢ層の間に灰白色砂層が薄く入り込んでおり、南にゆくにしたがって厚くなる様である。Ⅳ層は黒褐色粘土層で粒子もこまかく粘性も強い。この下は黒褐色粘土層で砂質の強いものになってくる。こうした土層が標準的なものではあるが、南北では相当異なったものとなっており、工事によって表土が削られている所もある。

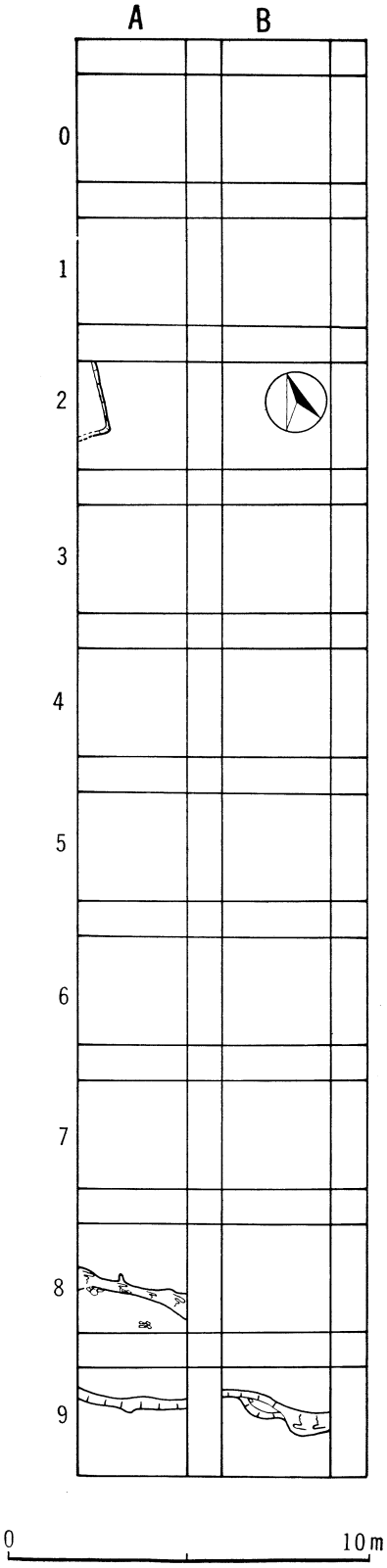
遺構はA2グリッドより土師器集積遺構が、A8．A9．B9グリッドにかけて溝が発見されている。B8グリッドは攪乱によって壊されている。これが南地点の遺構の総てであるが、遺物はいづれのグリッドからも出土しており、Ⅱ層とⅢ層の中間に雑然と出土している。

遺物の出土状態についてはA3．4．5グリッドの微細図を参照していただければ了解していただけると思うが、一括遺物として把握されるものであろう。時期的にも問題は無い様である。

溝は第Ⅱ層を切り込んで遺物も若干ではあるが出土している。この性格については不明であるが、V字形に掘り込まれ底部は水が湧いてきたために確認されていない。遺物は土師器杯一括が4～5個、緑釉陶器杯破片1個が出土している。

（2） 北地点（第6．7．8図）

中央線北側20m×40mの範囲を調査した。ここも中央に旧農道が走り、この両側をA．Bトレンチ（グリッド併用）を設定したが南地点よりは全般的に湿気が小なく調査もやや容易であった。



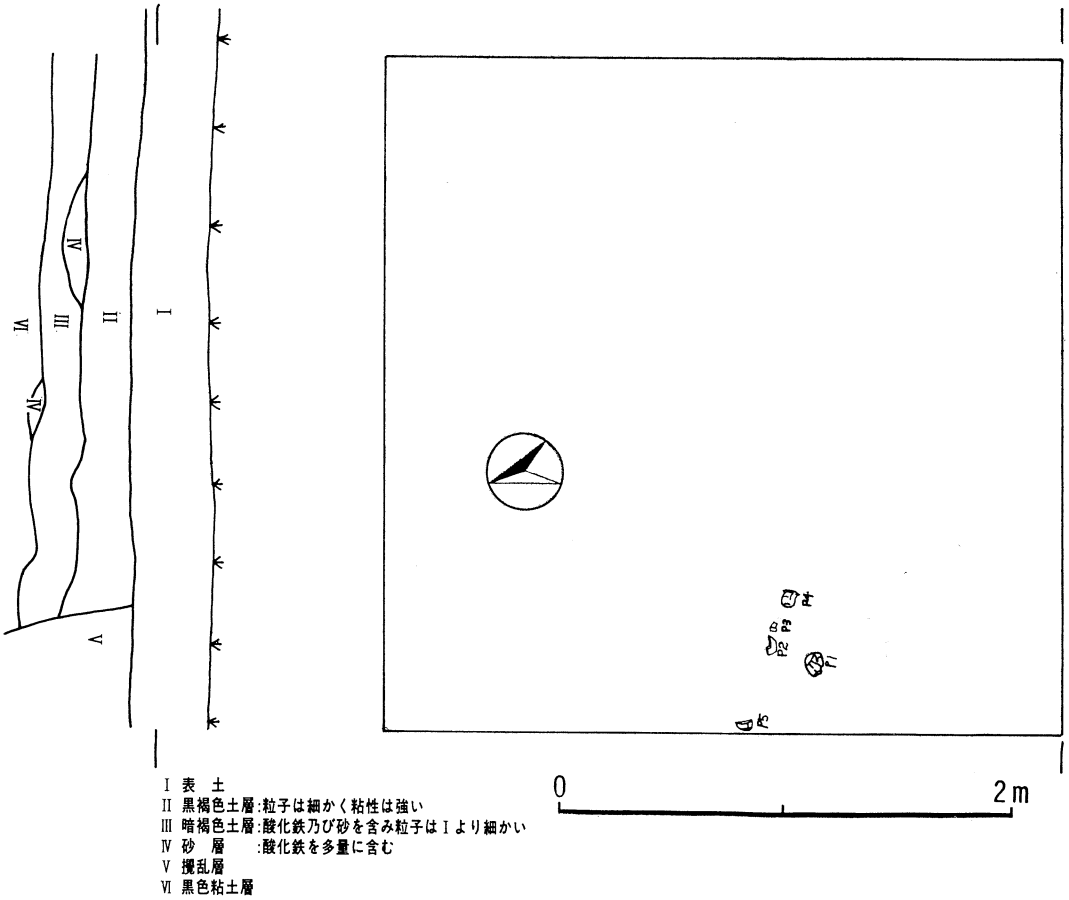
第3図　大坪遺跡南地点全体図

土層は表土が茶褐色土で粒子はやや荒く若干の酸化鉄を含む、Ⅱ層は黒褐色土で粒子はやや荒く褐色ブロック、酸化鉄を含む、Ⅲ層は黒色粘土が多く粘性も強い。Ⅳ層は黒色粘土層で粒子もこまかく粘性も強い。遺構は明確ではないがＡ３Ａ４グリッドに焼土ブロックがあり、Ａ４グリッドの焼土周辺には一括遺物が５～７個出土している。焼土の範囲は60cm×60cmで、焼土ブロックが30cm×60cmの不整形に広がっている。遺物のあり方等から考えると遺構を伴うことが充分考えられるが、土層図からは明確な結論を得られない。Ａ３グリッドは１ｍ×１ｍのほぼ円形に焼土があり断面はレンズ状になっているが遺物を伴なわず不明な点が多い。（末木）

3. 南地点土師器集積遺構（第９図）

該遺構は第４層（褐色有機質粘土層）を掘り込み作られており、一部は下層の第５層（黒褐色粘土層）まで達している所も見られ、深さ約30cmを計る。西側を破壊されているので全貌は確認できないがあたかも竪穴住居址の如き形態を呈する。遺構南壁の略中央あたりに厚さ10cm～15cmで第４層がカマボコ状に残存している。底は褐色有機質粘土（一部に黒褐色粘土）の単一層であり、この時代の住居址床面に通有的に見られるローム＋黒色土を踏みしめた様なものでなく、水分を多量に含み極めて軟弱のものである。焼土等は見られなかった。

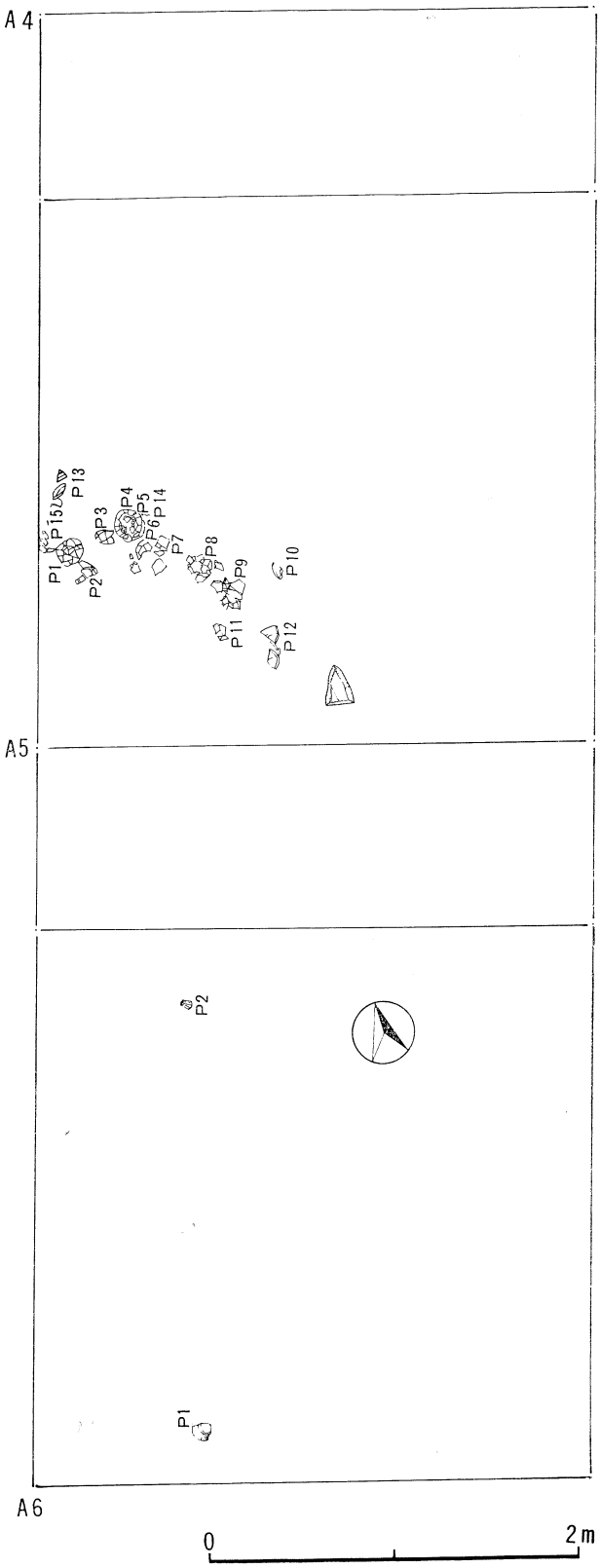
遺物は遺構北部に長さ0.9m、巾0.3m、厚さ0.3mの範囲（北部ブロック）と、南壁の中央部にカ



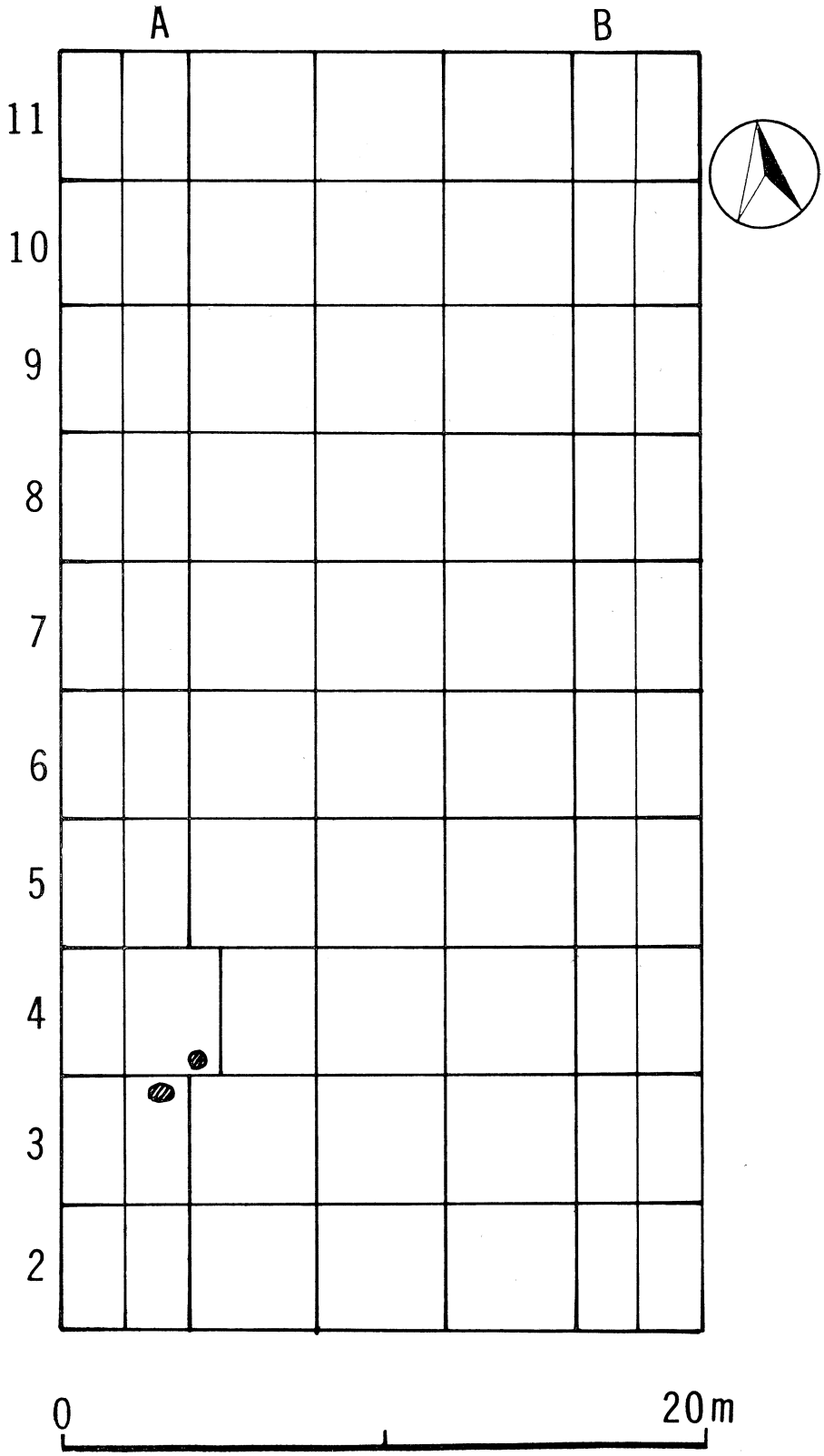
第４図　大坪南地点Ａ３グリッド

マボコ状に残存する褐色有機質粘土層上に長さ0.6m、巾0.3m、厚さ0.2mの範囲（南部ブロック）の2ブロックを中心として、遺構内より出土しており、遺構外の出土例は僅かであった。

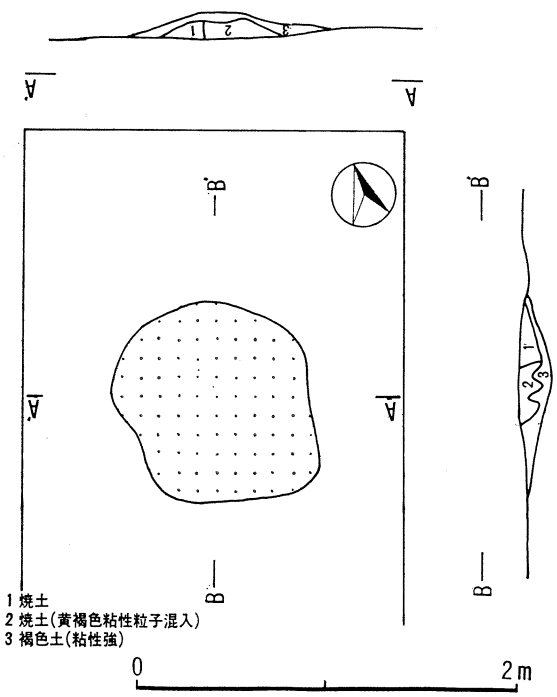
北部ブロックの出土状況は、遺物が乱雑に投げ捨てられた如くであり、遺物に亀裂の入ったものや器壁の剝落したものが多く目につき、復元できるものは小なかった。一方、南部ブロックは、図版9の様に遺物が積み重ねられたものを、何列かに並べた如くの状況を呈し、亀裂の入ったものや、器壁の剝落したものは小なく、出土品のほとんどが、復元可能なものであった。　（山崎）



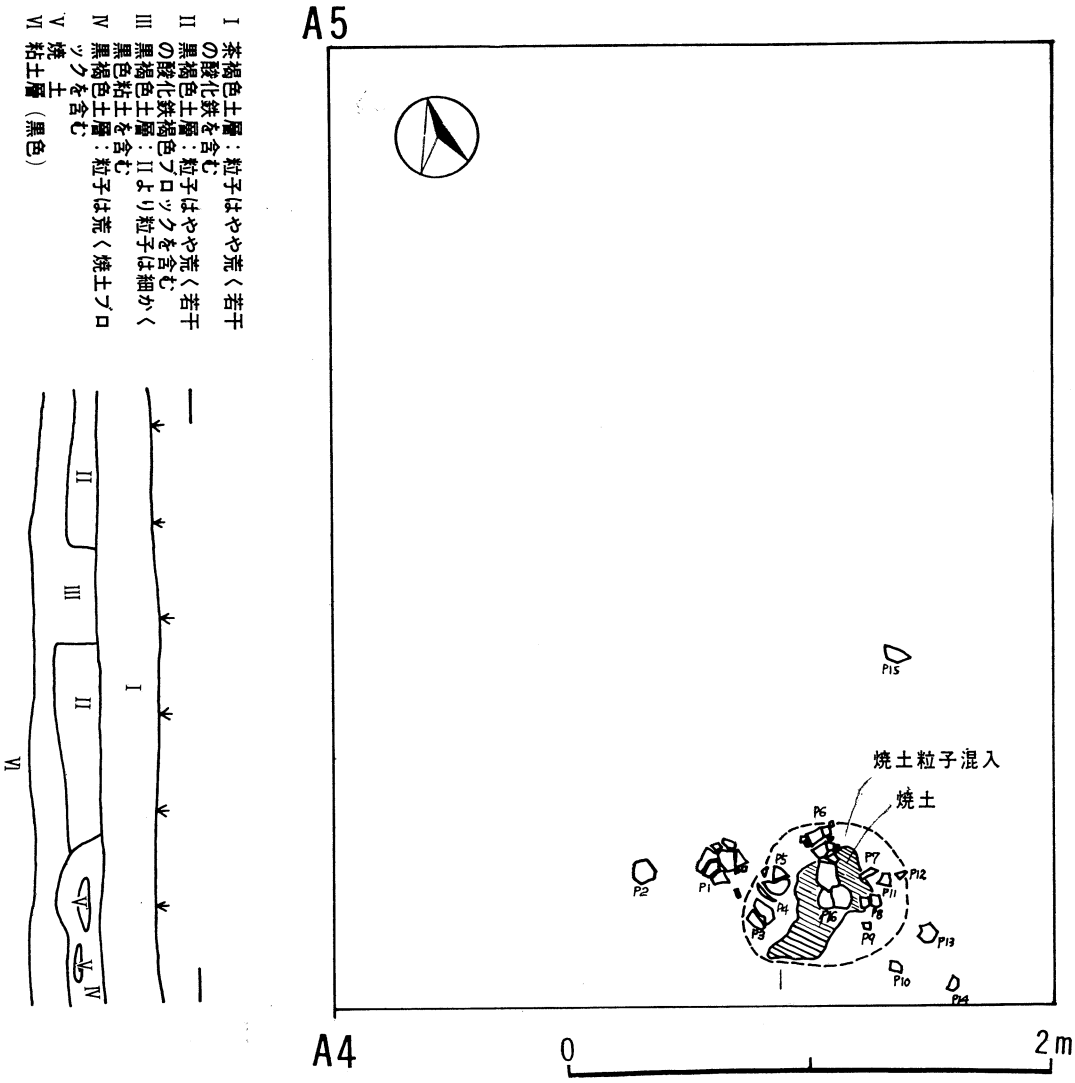
第5図　大坪南地点A4．5グリッド



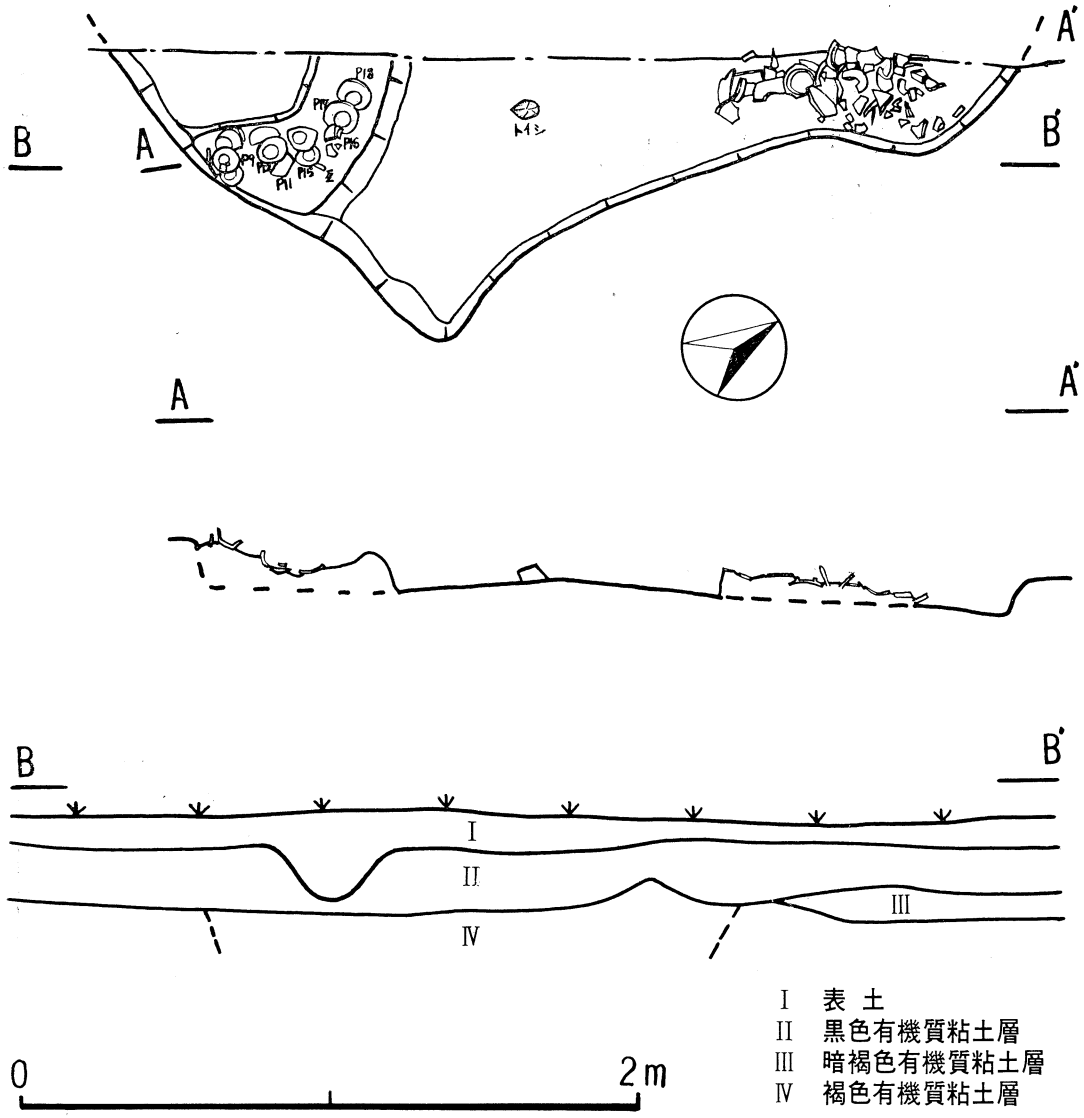
第6図　大坪北地点全体図



第7図　大坪北地点Ａ３グリッド



第8図　大坪北地点Aグリッド


A
A'
B
B'
I
II
III
IV
0
2m
I 表 土
II 黒色有機質粘土層
III 暗褐色有機質粘土層
IV 褐色有機質粘土層

第9図　土師器集積遺構

4. 遺　　物

（1） 土師器集積遺構

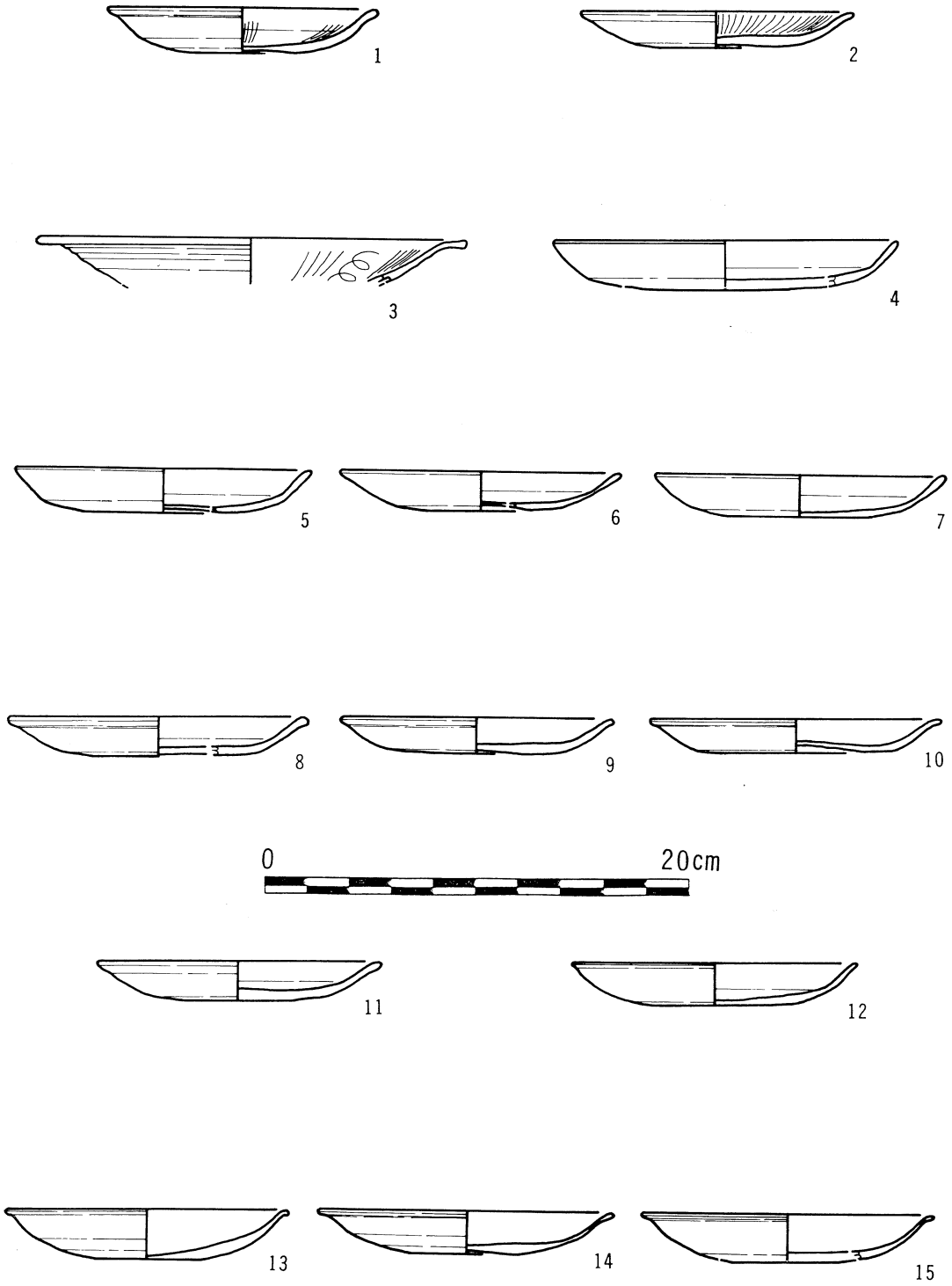
該遺構出土の遺物は、前述のとおり、南•北ブロックを中心に出土しているが、両ブロック出土品の様相は異なっている。北部ブロックからは土師器では皿形土器、杯形土器、甕形土器、鉢形土器、片口形土器、黒色土器（皿、杯形土器）、この外に須恵器や瓦などが出土しているが、圧到的に土師器が多い。土師器の中でも、出土総数の半数以上を皿形土器が占め、次に黒色土器が多く、杯形土器は以外と小量であった。

一方、南部ブロックよりは、土師器と瓦のみが出土して、その99％は土師器類であった。土師器の器形は杯形土器、皿形土器、小型甕形土器が見られるが、後2者は 各1点づつで、残りは総て杯形土器で占められている。

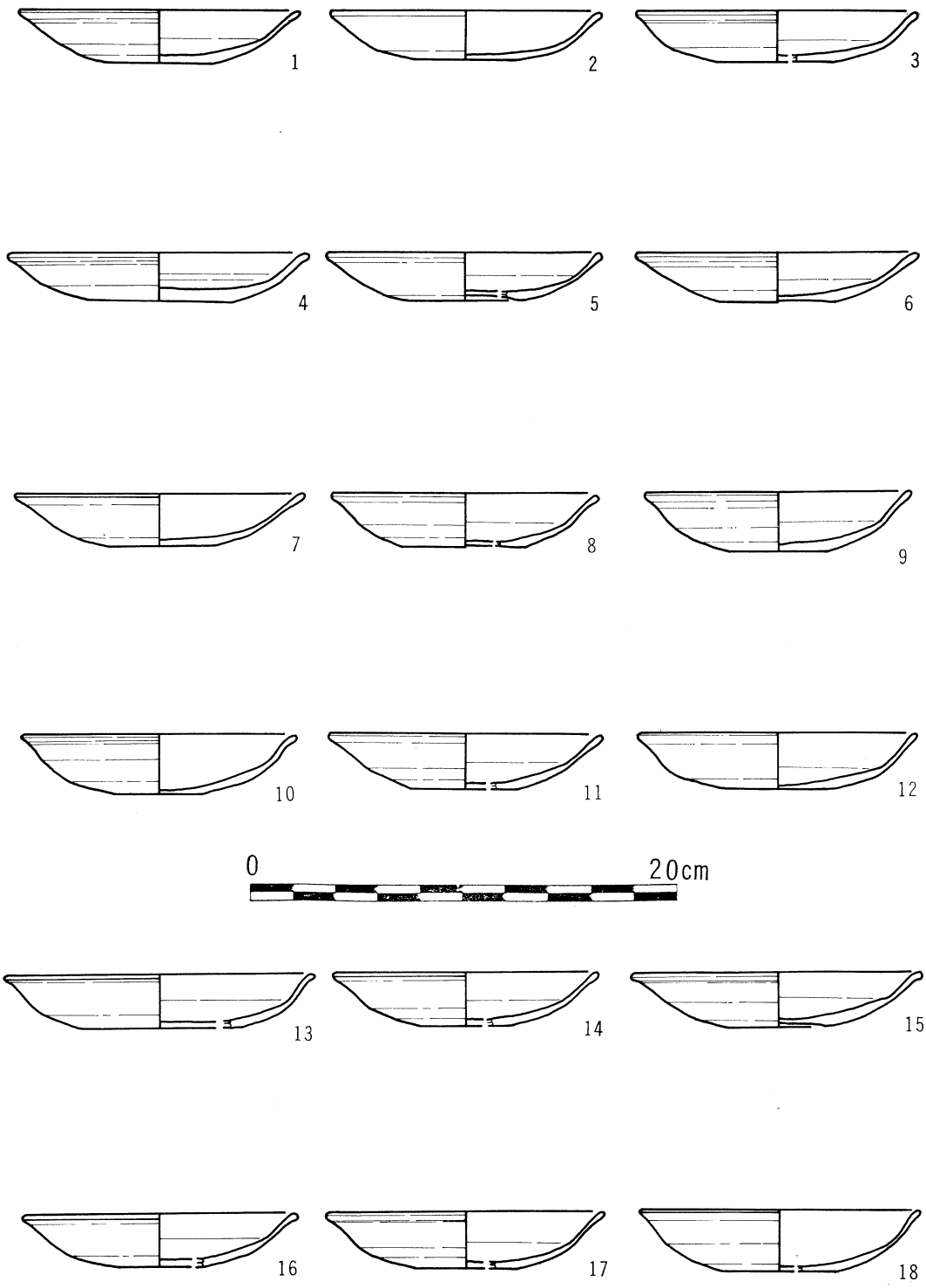
南部ブロックは 北部ブロックに比べ、集積状況の違いの外にも皿形土器が極端に少なく、黒色土器に至っては 全く皆無という様に出土遺物に於いても様相を異にして検出された訳である。この違いが何由生じたかは明確にしがたい。

この外、同遺構からは砥石が一点検出されているが、鉄器類は全く検出されていない。

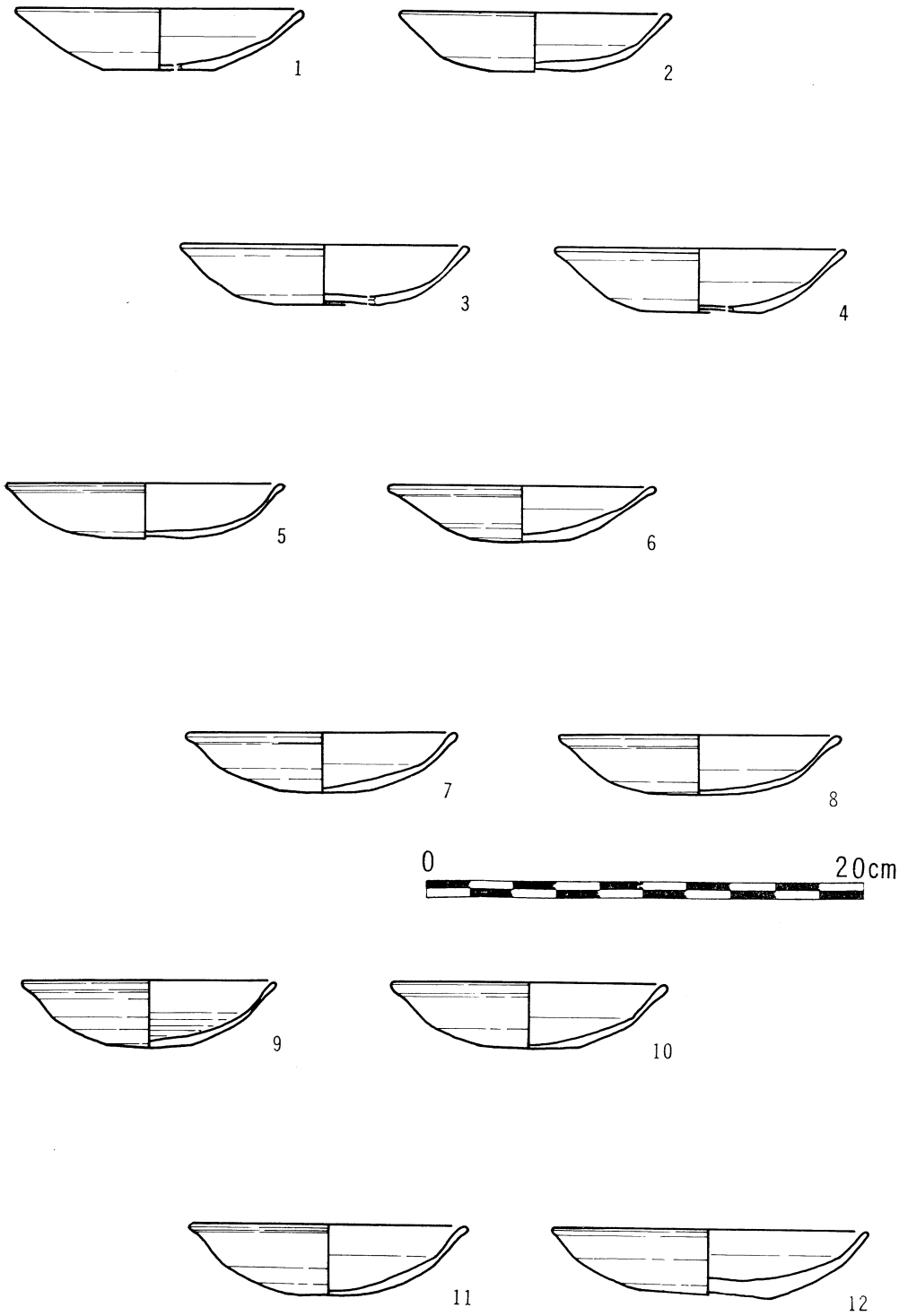
更に、出土状況と言う訳ではないが、北・南両ブロックおよび遺構内より出土した遺物は もちろん、外のグリッドより出土した遺物からも、全く「墨書」の遺存例が認められなかった点、該遺構の性格を暗示するものと考えられる。　（菊島）



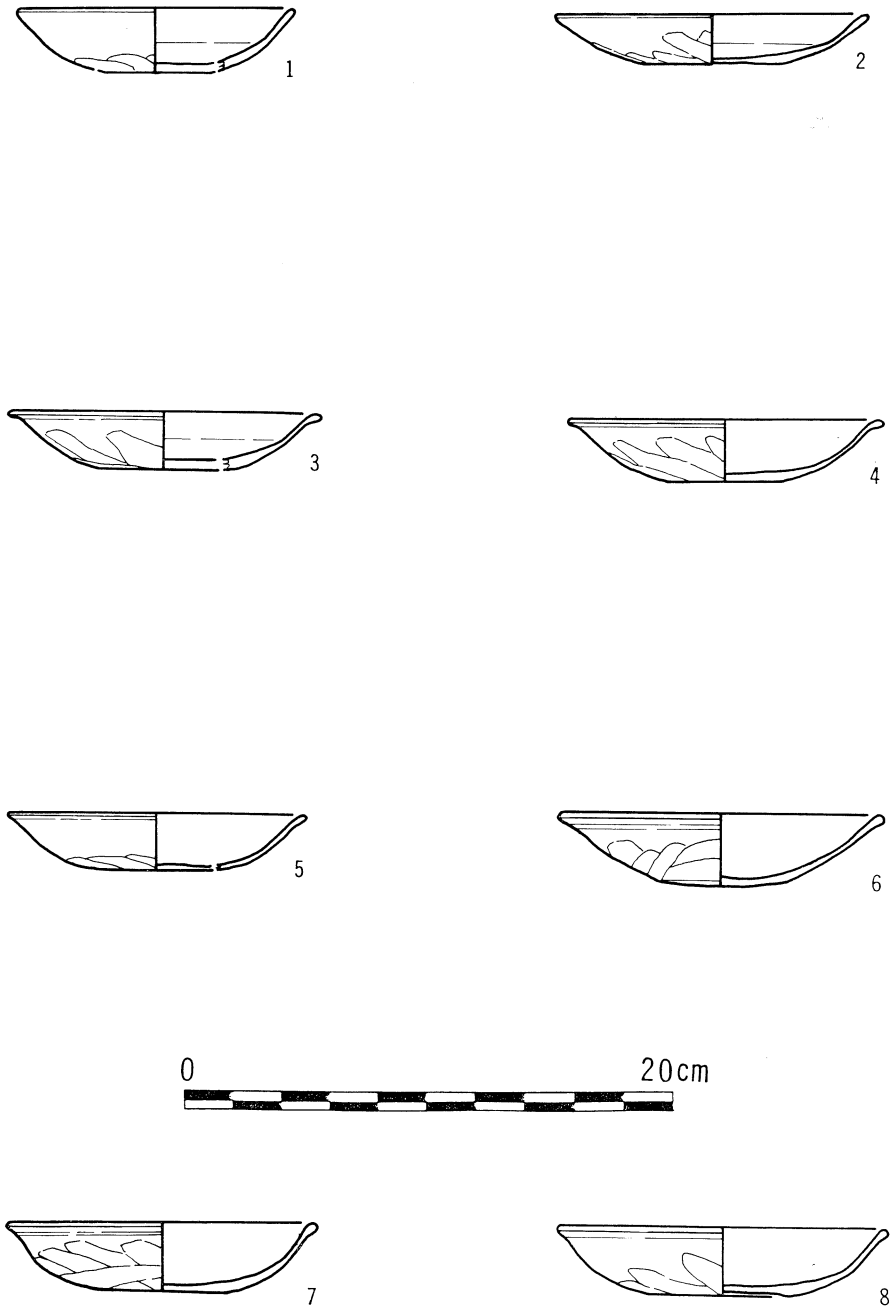
第10図　土師器集積遺構



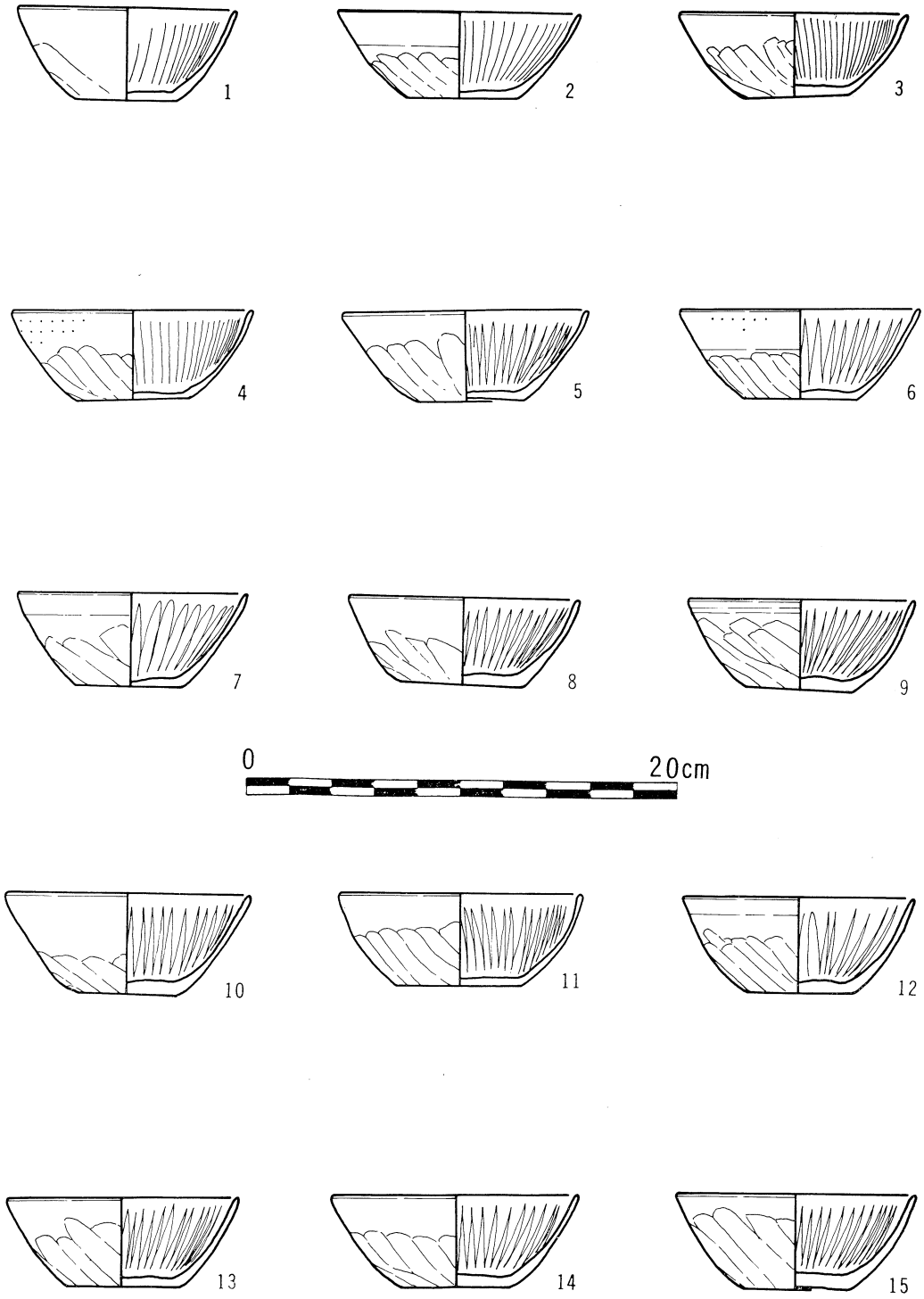
第11図　土師器集積遺構



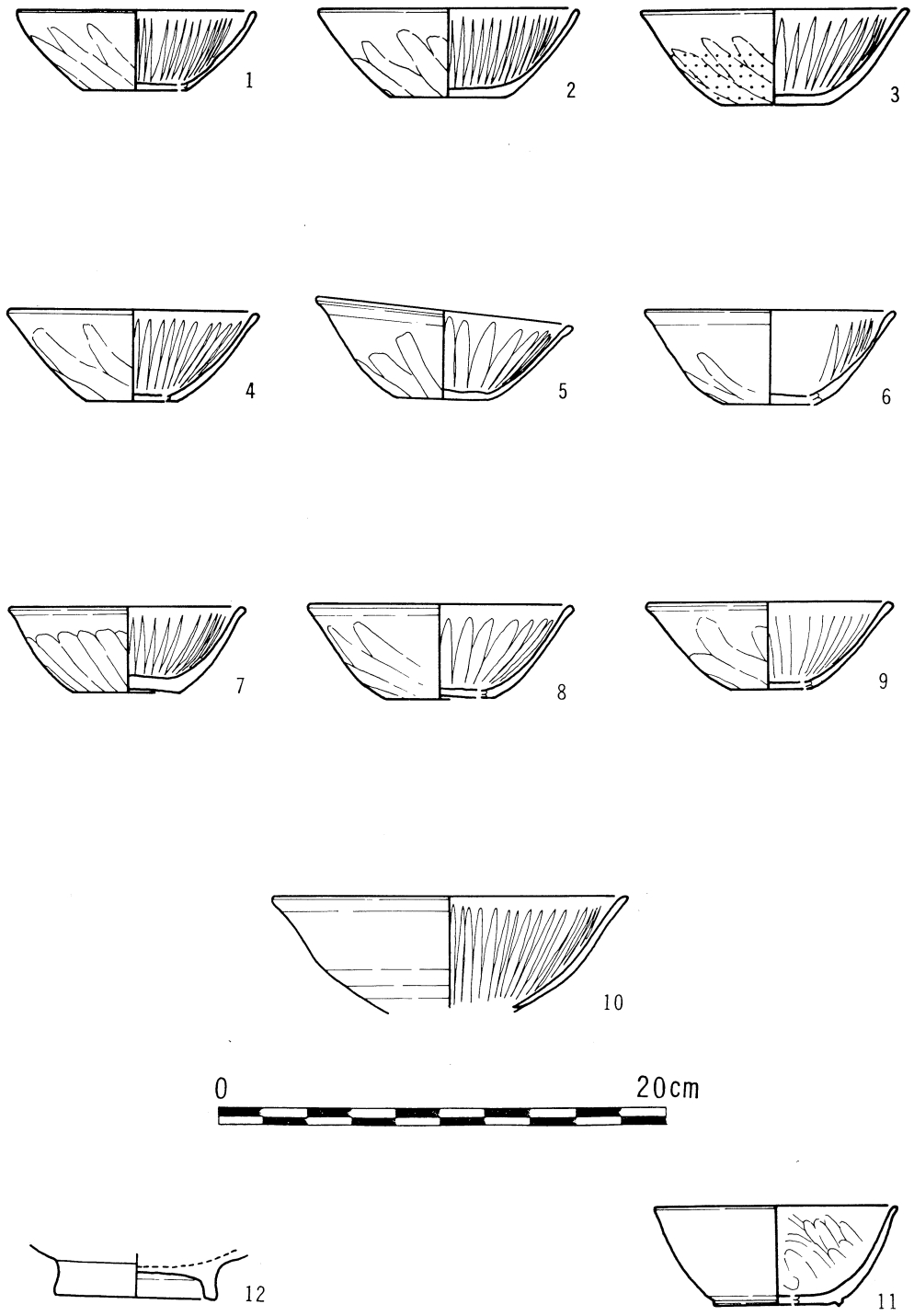
第12図　土師器集積遺構



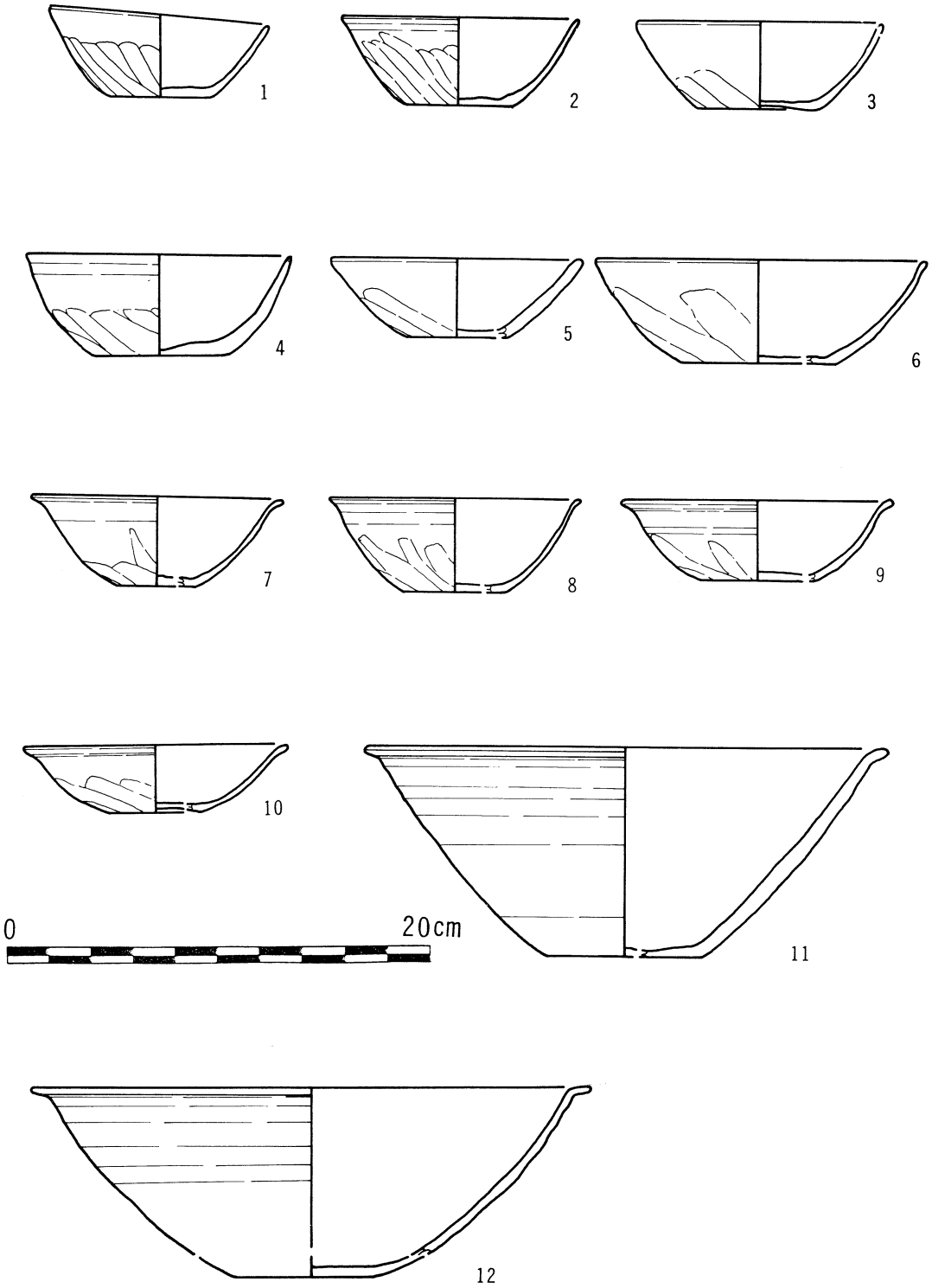
第13図　土師器集積遺構



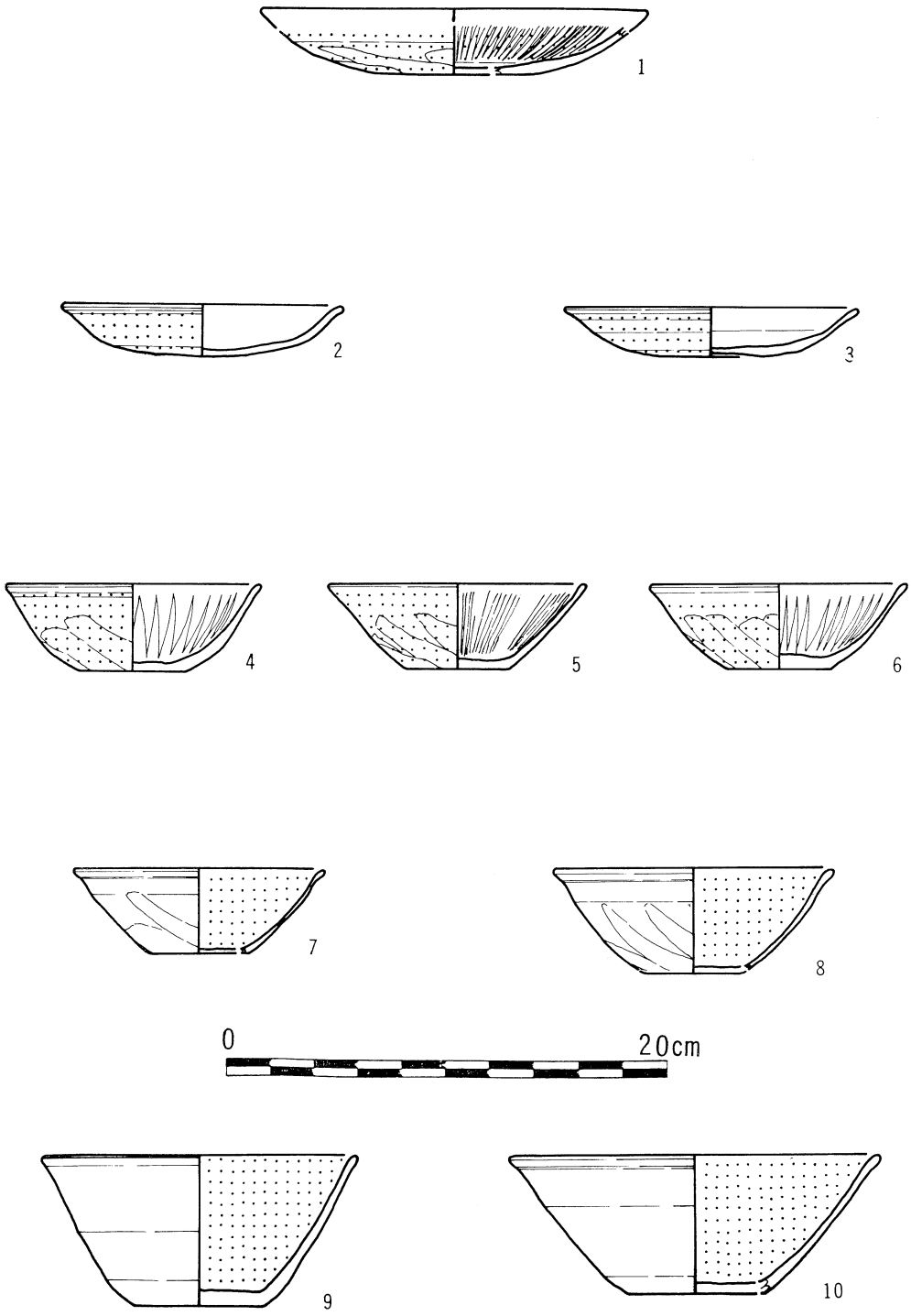
第14図　土師器集積遺構



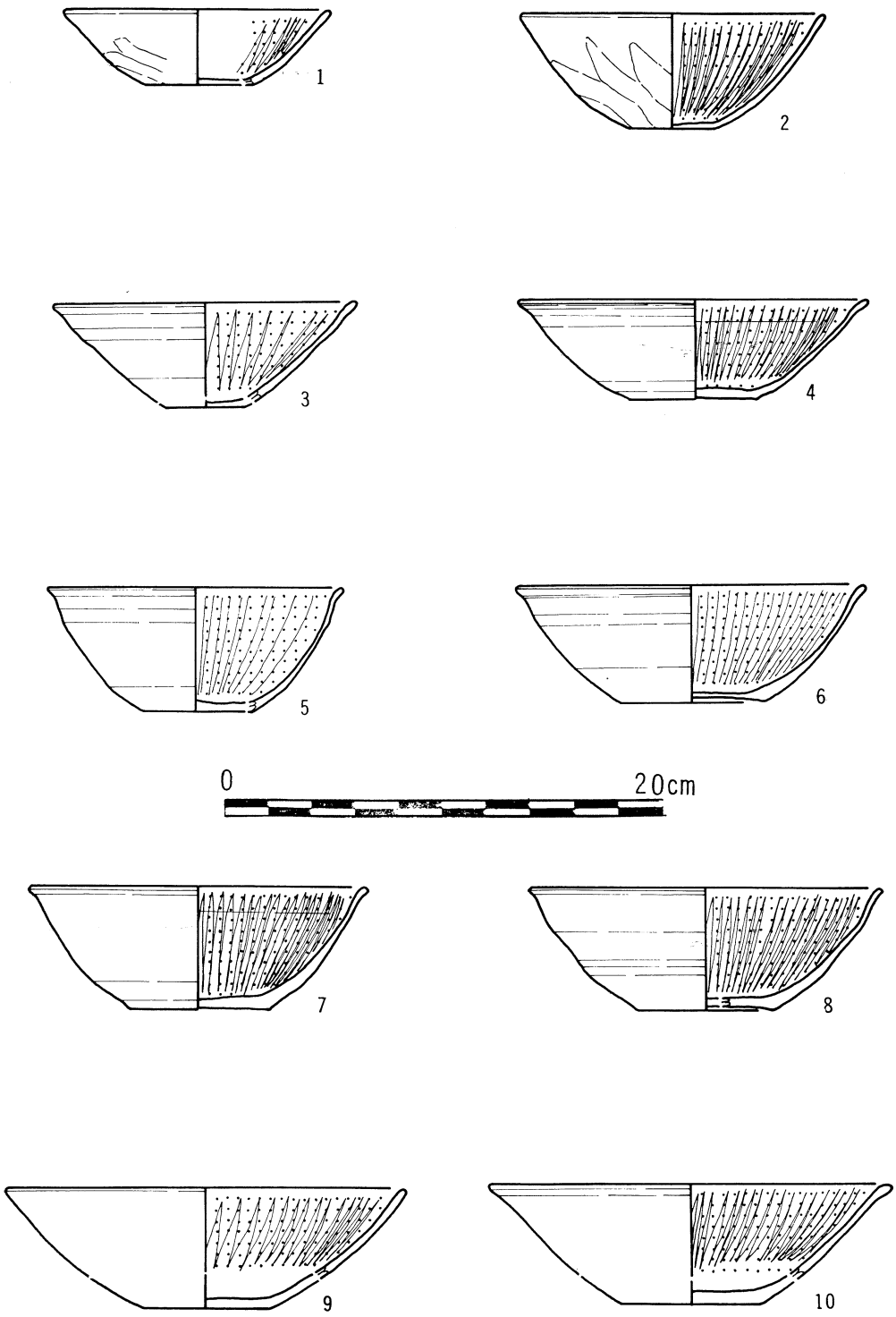
第15図　土師器集積遺構



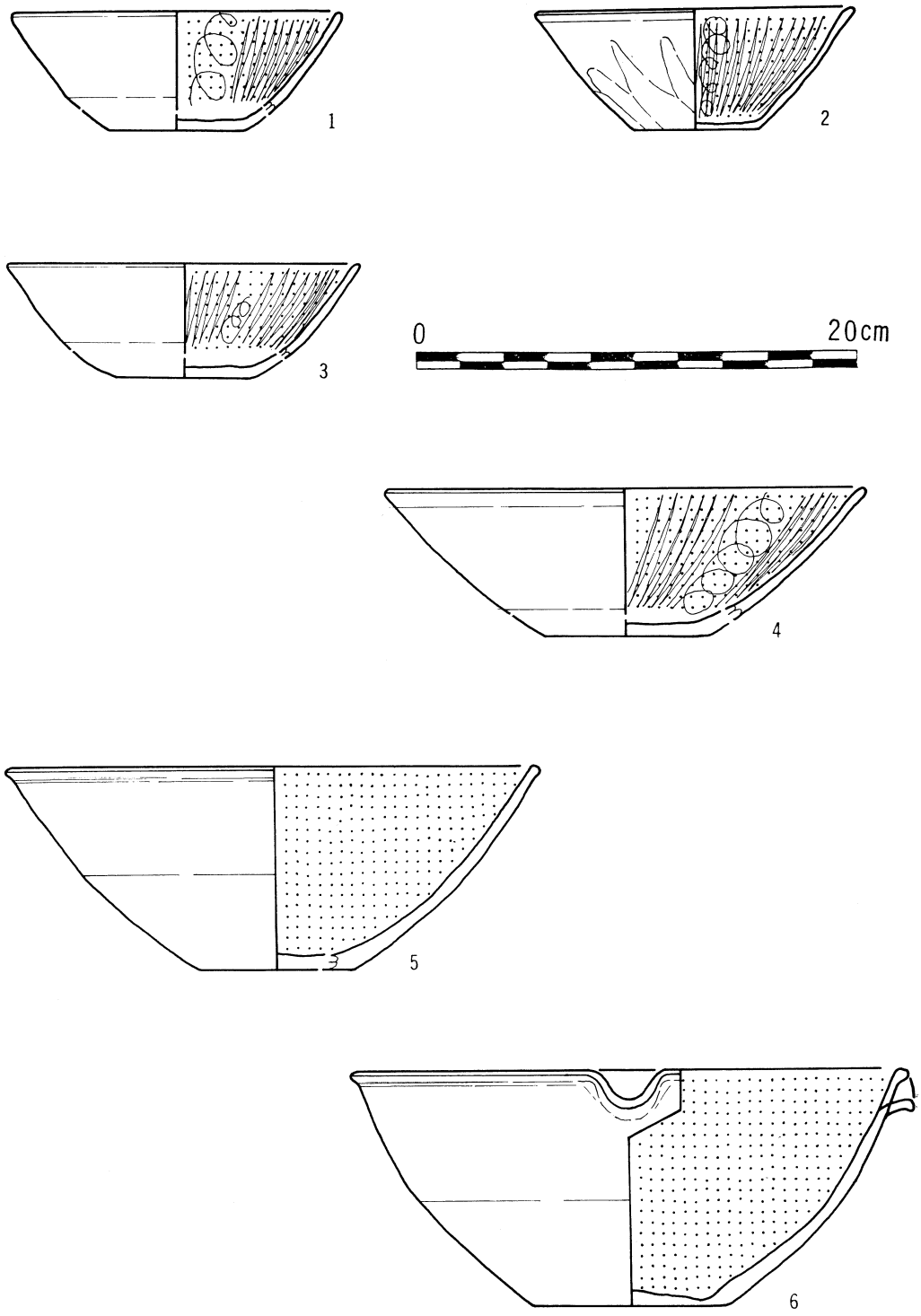
第16図　土師器集積遺構



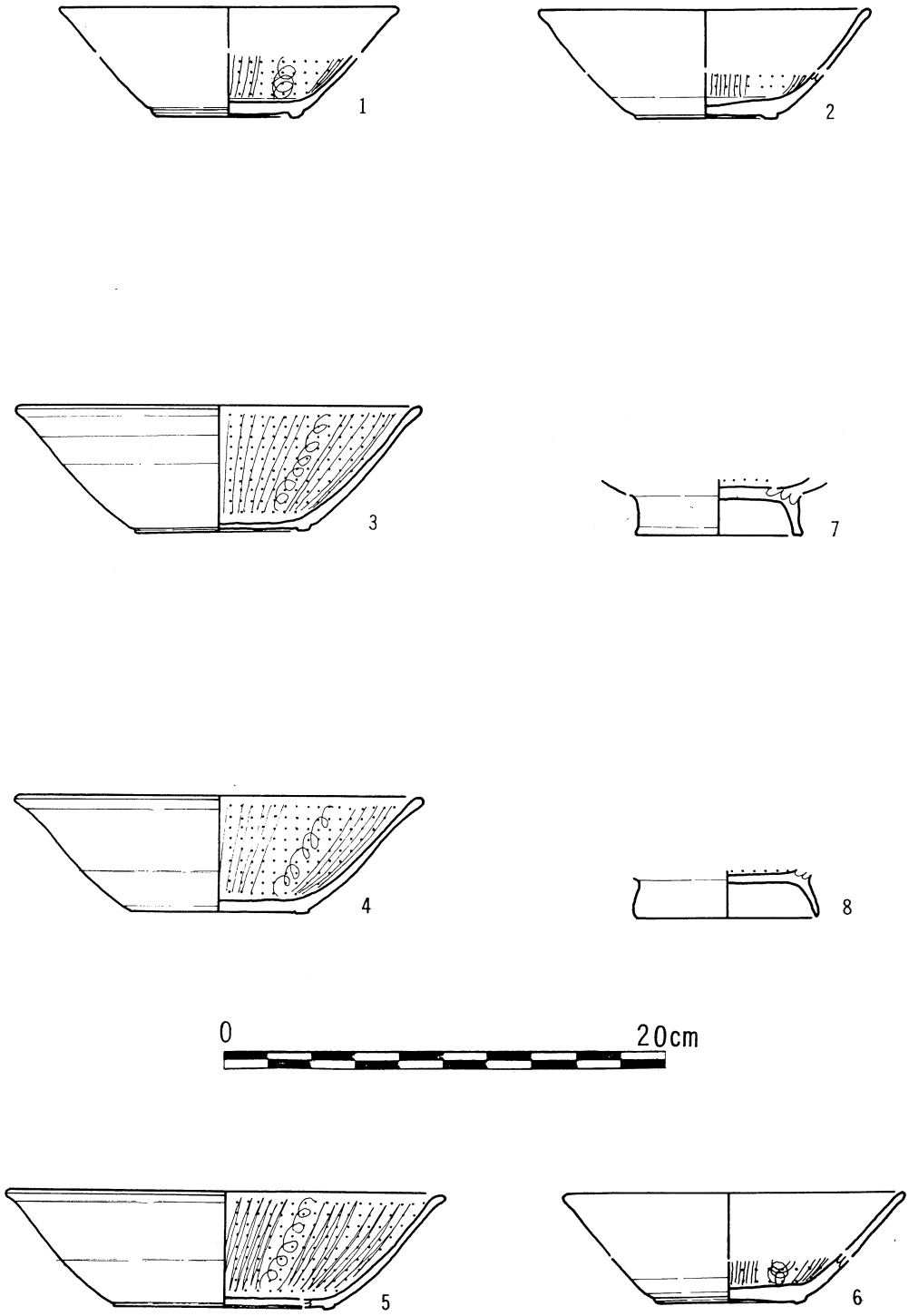
第17図　土師器集積遺構



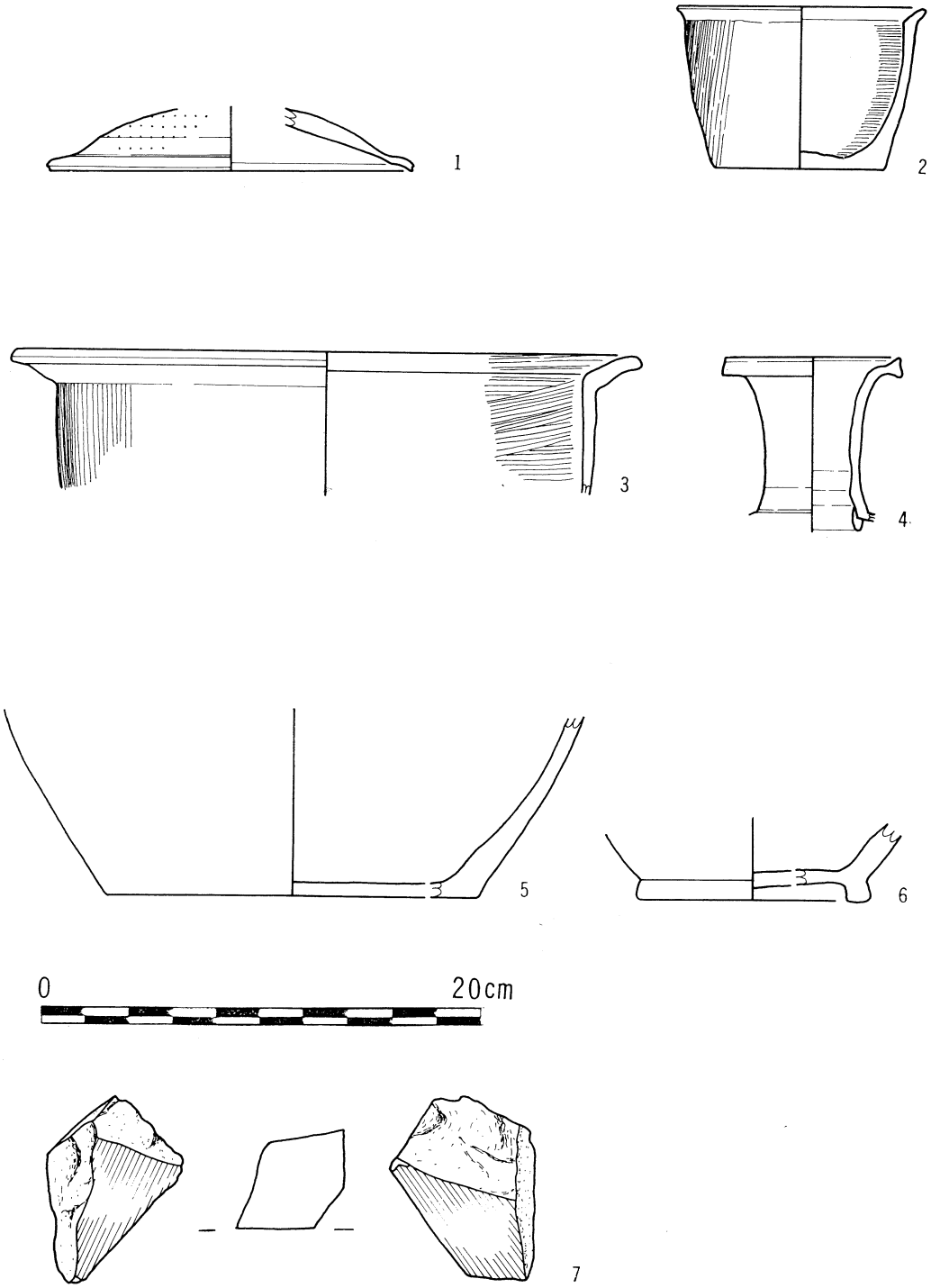
第18図　土師器集積遺構



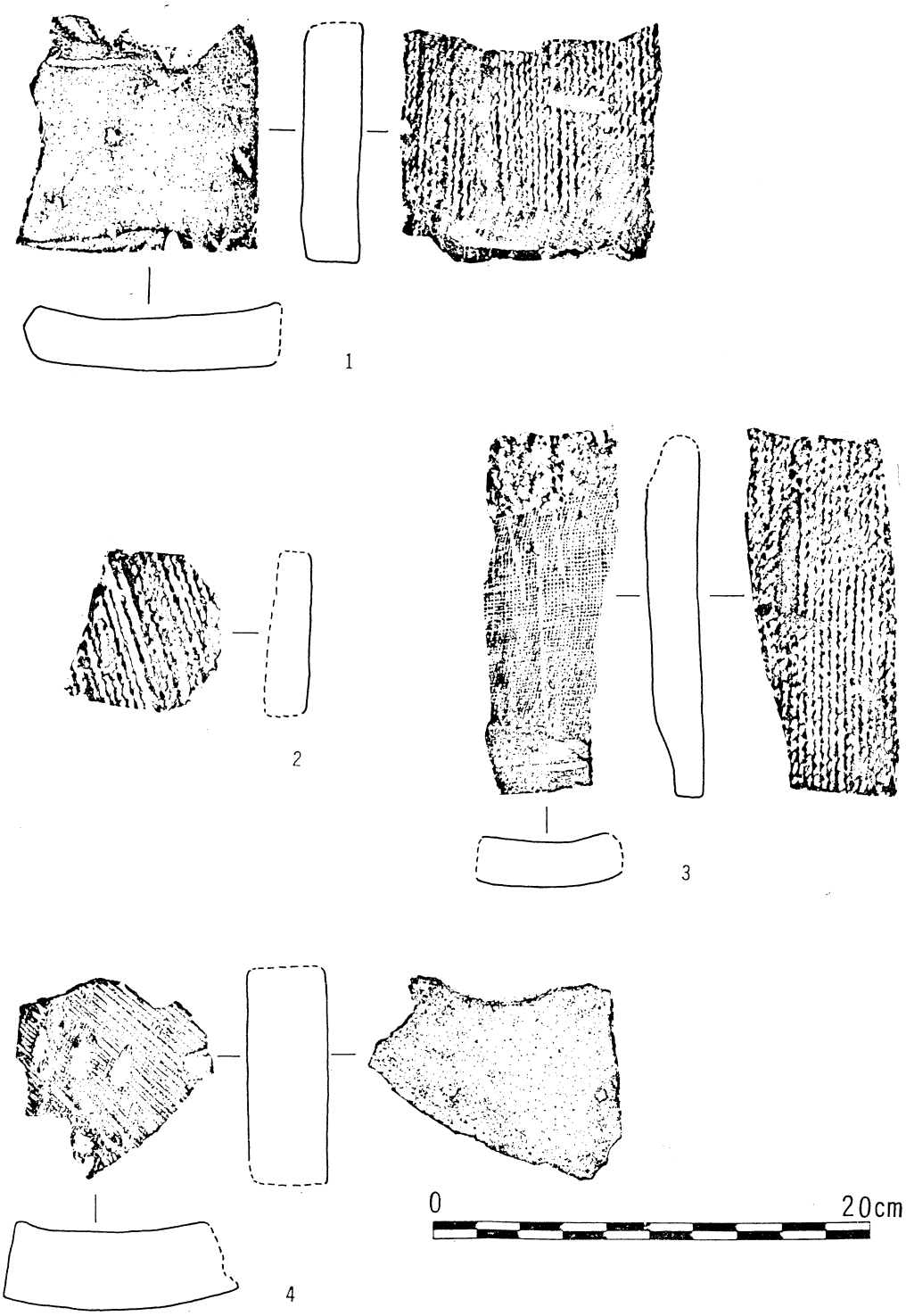
第19図　土師器集積遺構



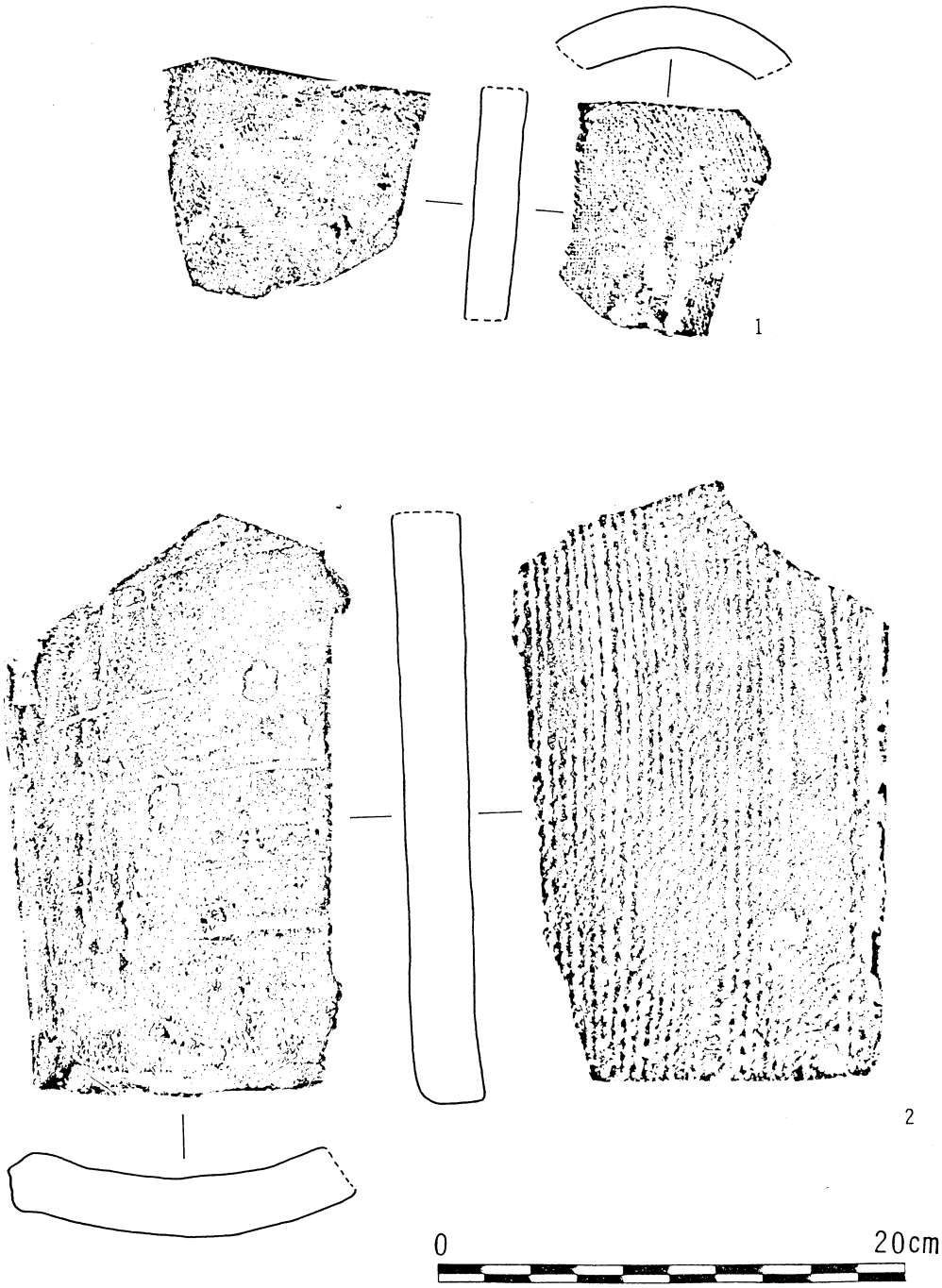
第20図　土師器集積遺構



第21図　土師器集積遺構



第22図　土師器集積遺構



第23図　土師器集積遺構

表 1　大坪遺跡　南地区（土師器集積遺構）

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	口縁	胴
第10図 1	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積	土師器	皿	128	21.5	46	玉縁　外反	㊥放射状篦磨が一文字様に入る
2	〃	〃	〃	〃	130	17	52	〃	放射状篦磨
3	〃	〃	〃	〃	204			平　唇	放射状篦磨の間にら線状篦磨が入る
4	〃	〃	〃	〃	164	(24)		尖　唇	→ 篦磨
5	〃	〃	〃	〃	140	21	60	〃	
6	〃	〃	〃	〃	134	19	46	玉縁　外反	→ 篦磨
7	〃	〃	〃	〃	138	20	70	〃	
8	〃	〃	〃	〃	142	19	62	〃	→ 篦磨
9	〃	〃	〃	〃	130	17	40	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	138	16	60	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	134	19	48	〃	〃
12	〃	〃	〃	〃	136	20	51	〃	〃
13	〃	〃	〃	〃	134	24	50	〃	〃
14	〃	〃	〃	〃	140	20	50	〃	
15	〃	〃	〃	〃	138			〃	→ 篦磨
第11図 1	〃	〃	〃	〃	132	25	50	〃	
2	〃	〃	〃	〃	128	23	44	〃	→ 篦磨
3	〃	〃	〃	〃	134	24	52	〃	
4	〃	〃	〃	〃	141.5	23	64	〃	→ 篦磨
5	〃	〃	〃	〃	130	23	52	〃	
6	〃	〃	〃	〃	134	23	52	〃	→ 篦磨
7	〃	〃	〃	〃	136	25	48	〃	
8	〃	〃	〃	〃	126	25	58	〃	→ 篦磨
9	〃	〃	〃	〃	126	28	46	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	130	28	42	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	130	26	50	〃	〃
12	〃	〃	〃	〃	132	27	50	〃	
13	〃	〃	〃	〃	146	25	74	〃	→ 篦磨
14	〃	〃	〃	〃	126	25	44	〃	
15	〃	〃	〃	〃	138	26	44	〃	
16	〃	〃	〃	〃	130	25	38	〃	
17	〃	〃	〃	〃	132	27	46	〃	→ 篦磨
18	〃	〃	〃	〃	132	28	54	〃	
第12図 1	〃	〃	〃	〃	134	28	52	〃	

方法 部	底	部	胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考
㊥ロクロ横ナデ→篦削	㊦放射状篦磨が十文字様になる	㊥回転篦削	赤色スコリア＋石英	堅固	灰褐色	褐色	片
〃	放射状篦磨	〃	〃 〃	やや軟弱	褐色	〃	〃
ロクロ横ナデ			〃 〃	堅固	赤褐色	〃	〃
ロクロ横ナデ→篦削			〃 〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		回転褐前	〃 〃	〃	黒褐色	黒褐色	㊥黒色土器か 〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	褐色	灰褐色	〃
〃		〃	〃 〃	やや軟弱	灰褐色	褐色	〃
〃		〃	〃	堅固	褐色	灰褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	〃	暗褐色	〃
〃	〃	〃	〃 〃	やや軟弱	〃	褐色	〃
〃	〃	〃	〃 〃	堅固	〃	灰褐色	〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	暗褐色	〃	〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	褐色	〃	半完
〃	〃	〃	〃 〃	やや軟弱	〃	褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	堅固	灰褐色	灰褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	暗褐色	黒褐色	㊥黒色土器か 〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	褐色	褐色	片
〃		〃	〃 〃	〃	〃	灰褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	〃	褐色	完
〃		〃	〃 〃	〃	灰褐色	黒褐色	㊥黒色土器か 片
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	〃	暗褐色	半完
〃	〃		〃 〃	〃	〃	褐色	片
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	褐色	〃	外の一部に黒色部分有 〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	灰褐色	〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	暗褐色	〃	〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	〃	灰褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	灰褐色	〃	〃
〃		〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃
〃		〃	〃 〃	〃	褐色	褐色	〃
〃			〃 〃	〃	〃	〃	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃

表 2

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	口縁	胴
第12図 2	北部ブロック	ブブロック状に乱雑に堆積	土師器	皿	126	27	40	玉縁外反	㊥→篦磨
3	〃	〃	〃	〃	134	28	48	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	134	29	56	〃	
5	〃	〃	〃	〃	130	26	38	〃	
6	〃	〃	〃	〃	124	26	46	〃	
7	〃	〃	〃	〃	126	27	42	〃	→篦磨
8	〃	〃	〃	〃	130	28	48	〃	
9	〃	〃	〃	〃	118	31	38	〃	→篦磨
10	〃	〃	〃	〃	128	30	46	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	128	33	36	〃	
12	南部ブロック	積み重ねられた杯形土器最上部より出土	〃	〃	146	30	60	〃	
第13図 1	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積	〃	〃	116			〃	→篦磨
2	〃	〃	〃	〃	128	21	56	〃	
3	〃	〃	〃	〃	130	24	56	〃	
4	〃	〃	〃	〃	130	26	44	〃	
5	〃	〃	〃	〃	128			〃	
6	〃	〃	〃	〃	134	30	52	〃	
7	〃	〃	〃	〃	128	28	52	〃	→篦磨？
8	〃	〃	〃	〃	136	28	60	〃	
第14図 1	南部ブロック	積み重ねられたブロック状で出土	〃	杯	102	43	46	尖唇	放射状篦磨
2	〃	〃	〃	〃	113	40	52	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	107	39	48	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	113	42	52	〃	〃
5	〃		〃	〃	115	41.5	48	〃	花弁状篦磨
6	〃		〃	〃	112	42.5	52	〃	〃
7	〃		〃	〃	108	44	49	〃	〃
8	〃		〃	〃	108	40.5	57	〃	〃
9	〃		〃	〃	106	42	48	〃	〃
10	〃		〃	〃	114	46.5	44	〃	〃
11	〃		〃	〃	114	43	56	〃	〃
12	〃		〃	〃	108	45	48	〃	〃
13	〃		〃	〃	108	41	52	尖唇	〃
14	〃		〃	〃	115	43	48	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃	111	44	49	〃	〃

方法 部	底部		胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考
㊥ロクロ横ナデ→篦削	㊦	㊥回転篦削	赤色スコリア石英	やや軟弱	灰褐色	褐色	片
〃		〃	〃 〃	堅固	〃	灰褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	褐色	〃	〃
〃		〃	〃 〃	〃	〃	〃	外一部に黒色 〃
〃		〃	〃 〃	〃	〃	暗褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
〃		〃	〃 〃	〃	灰褐色	褐色	〃
〃	→篦磨	〃	〃 〃	〃	〃	灰褐色	〃
〃	〃	〃	〃 〃	〃	褐色	褐色	半完
〃		〃	〃 〃	〃	〃	灰褐色	片
〃		糸切後周囲に1～1.5cm篦削	〃 〃	〃	〃	褐色	〃
ロクロ横ナデ↘篦削			〃 〃	〃	〃	〃	〃
〃		糸切後周囲1～1.5cmを篦削	〃 〃	〃	〃	灰褐色	〃
〃		篦	〃 〃	〃	灰褐色	〃	〃
〃		全面篦削調整	〃	〃	〃	〃	〃
〃			〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		全面篦削調整	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
〃		〃	〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		糸切後[illegible]を篦削	〃	〃	〃	〃	〃
ロクロ横ナデ↘篦削		糸切後周囲1～1.5cm篦削	〃	〃	〃	〃	〃
〃		〃	〃	〃	〃	〃	完
〃		〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	半完
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃		〃	〃	〃	〃	〃	完
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃		〃	〃	〃	褐色	褐色	〃
〃		〃		〃	〃	〃	〃
〃	篦削(同心円状)	糸切後全面篦削	〃	〃	〃	〃	〃
〃		糸切後周囲1～1.5cm篦削	〃	〃	〃	〃	〃
〃		〃	〃	〃	〃	〃	片
〃		糸切後全面篦削		〃	〃	〃	〃
〃		糸切後周囲1～1.5cmを篦削	〃	〃	〃	〃	完
〃		〃	〃	〃	〃	〃	片
〃		〃	〃	〃	〃	〃	半完

表 3

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	整形 口縁	整形 胴
第15図1	掘削溝内	表採	土師器	杯	108	36	48	尖唇	㋓花弁状篦磨
2	〃	〃	〃	〃	118	40	52	〃(玉縁に近い)	〃
3	〃	〃	〃	〃	120	43	49	〃(〃)	〃
4	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積した出土	〃	〃	114	41	42	玉縁外反	〃
5	〃		〃	〃	116	40	40	〃	〃
6	〃		〃	〃	112	42	40	〃	〃
7	〃		〃	〃	107	39.5	46	〃	〃
8	〃		〃	〃	120	43	48	〃	〃
9	〃		〃	〃	112	39	36	〃	放射状篦磨
10	〃		〃	〃	160			〃	花弁状篦磨
11	〃		〃	〃	108	44	58	尖唇外反	ダ円状篦磨
12	〃		〃	〃			72		
第16図1	南部ブロック	積み重ねられたブロック状で出土	〃	〃	104	39	46	尖唇	
2	〃	〃	〃	〃	113	42	49	〃	
3	〃	〃	〃	〃	118	41	56	〃	
4	〃	〃	〃	〃	126	48	62	〃	
5	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積した出土	〃	〃	120	37	48	丸唇	
6	〃	〃	〃	〃	160	50	76	玉縁外反	
7	〃	〃	〃	〃	120	42	36	〃	
8	〃	〃	〃	〃	120	46	48	〃	
9	〃	〃	〃	〃	130	39	54	〃	
10	〃	〃	〃	〃	126	32	40	〃	
11	〃	〃	〃	鉢	250	100	74	丸唇外反	
12	〃	〃	〃	〃	268			〃	
第17図1	〃	〃	〃	皿			70		花弁状篦磨
2	〃	〃	〃	〃	128	23	40	玉縁外反	→ 篦磨
3	〃	〃	〃	〃	134	22	46	〃	〃
4	〃	〃	〃	杯	116	40	46	〃	花弁状篦磨
5	〃	〃	〃	〃	118	39	46	〃	放射状篦磨が三方に入る
6	〃	〃	〃	〃	118	38.5	46	〃	花弁状篦磨
7	〃	〃	〃	〃	114	39	44	〃	
8	〃	〃	〃	〃	128			〃	
9	〃	〃	〃	〃	114	69	56	〃	
10	〃	〃	〃	〃	170	(64)	(60)	〃	

方法 部	底部		胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考	
㊥ロクロ横ナデ↘ 篦削	㊦	㊥ 篦	赤色スコリア 石英	堅固	褐色	灰褐色		片
〃	同心円状篦磨	全面篦削	〃	〃	〃	〃		〃
〃		〃	〃	〃	〃	褐色		〃
〃		篦	〃	〃	〃	〃		〃
〃		全面篦削	〃	〃	〃	〃		半完
〃		篦	〃	〃	〃	〃		片
〃		全面篦削	〃	〃	〃	暗褐色		半完
〃		篦	〃	〃	〃	褐色		片
〃		〃	〃	〃	暗褐色	〃		〃
〃			〃	〃	褐色	褐色		〃
ロクロ横ナデ→ 篦磨	円心状篦磨	削出高台 篦削→円心状篦磨	〃(密度良)	〃	〃	〃		〃
			〃	〃		〃		環
ロクロ横ナデ↘ 篦削		全面篦削	〃	やや軟弱	〃	〃		半完
〃		糸切後周囲1～1.5cmを篦削	〃	〃	〃	〃		片
〃		〃	〃	〃	〃	〃		〃
〃		全面篦削	〃	堅固	〃	〃		完
〃		篦	〃	やや軟弱	〃	〃		片
〃		〃	〃	堅固	〃	〃		〃
〃		〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色		〃
〃		〃	〃	やや軟弱	〃	〃		〃
〃		〃	〃	堅固	褐色	〃		〃
〃		〃	〃	〃	灰褐色	褐色		〃
ロクロ横ナデ		回転篦削	〃	〃	〃	〃		〃
〃			〃	〃	褐色	赤褐色	黒色土器	〃
ロクロ横ナデ↘ 篦削	同心円状篦磨	篦	〃	〃	黒色	黒褐色	〃	〃
ロクロ横ナデ→ 篦削	→ 篦磨	回転篦削	〃	〃	暗褐色	黒色	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
ロクロ横ナデ↘ 篦削		全面篦削	〃	〃	褐色	一部黒色 〃 褐色	〃	〃
〃		〃	〃	〃	〃	黒色	〃	完
〃		〃	〃	〃	褐色	一部黒色 〃 褐色	〃	片
〃		篦	〃	〃	黒色	黒褐色	〃	〃
〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
ロクロ横ナデ→ 篦削		全面篦削	〃	〃	〃	褐色	〃	〃
ロクロ横ナデ→ 篦削			赤色スコリア 石英	〃	〃	褐色	〃	〃

表 4

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	整形 口縁	整形 胴
第18図 1	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積したた出土	土師器	杯	122	35	50		㊥
2	〃	〃	〃	〃	140	54	40	尖唇	花弁状篦磨が十文字様に入る
3	〃	〃	〃	〃	140			玉縁外反	花弁状篦磨
4	〃	〃	〃	〃	162	46	60	〃	花弁状篦磨口縁部に→篦磨
5	〃	〃	〃	〃	136	58	50	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	160	53	68	〃	花弁状篦磨(十文字)口縁部に→篦磨
7	〃	〃	〃	〃	156	56	62	〃	花弁状篦磨
8	〃	〃	〃	〃	162	56	62	〃	花弁状篦磨 口縁部に→篦磨
9	〃	〃	〃	〃	184			丸唇	花弁状篦磨
10	〃	〃	〃	〃	184			玉縁外反	〃
第19図 1	〃	〃	〃	〃	152			丸唇	花弁状篦磨(十文字)ら線状篦磨が入る
2	〃	〃	〃	〃	146			玉縁外反	花弁状篦磨，ら線状篦磨，口縁部→篦磨
3	〃	〃	〃	〃	162			丸唇	花弁状篦磨 ら線状篦磨
4	〃	〃	〃	〃	220			〃	花弁状篦磨(十文字)にら線状篦磨
5	〃	〃	〃	鉢	244	93	70	平唇	底部近くに→篦
6	〃	〃	〃	片口	254	107.5	88	〃	〃
第20図 1	〃	〃	〃	杯			70		花弁状篦磨(十文字)にら線状篦磨入る
2	〃	〃	〃				64		〃
3	〃	〃	〃	〃	184	59	84	玉縁	〃
4	〃	〃	〃	〃	186	53	82	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	200	52	98	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃			70		
7	〃	〃	〃	〃			76		
8	〃	〃	〃				84		
第21図 1	〃	〃	〃	杯蓋	166				
2	南部ブロック	積み重ねられて杯形土器直上より出土	〃	小型甕	114	74	78		→櫛状篦
3	北部ブロック	ブロック状の乱雑な堆積した出土	〃	甕	288				〃
4	〃	〃	須恵器	長頸壺	80				ロクロ
5	〃	〃	〃	甕			168		〃
6	〃	〃	〃	壺			106		〃
7	南北ブロックの中間あたり	単独	石器	砥石					
第22図 1	北部ブロック	北部ブロック土師器より混って出土	瓦	平瓦					
2	〃	〃	〃	〃					
3	南部ブロック	杯に混って出土	瓦	平瓦					

方法 部	底	部	胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考	
㊥ロクロ横ナデ↘篦削	㊤	㊥		堅固			黒色土器	〃
〃	円心状篦磨の中に曲線篦磨	回転篦削	赤色スコリア石英	〃	黒色	褐色	〃	〃
ロクロ横ナデ→篦削		〃	〃	〃			〃	〃
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	半完
〃		篦	〃	〃	〃	灰褐色	〃	片
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	完
〃		回転篦削	〃	〃	〃	〃	〃	半完
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	完
〃			〃	〃	〃	〃	〃	片
〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
ロクロ横ナデ↘篦削			〃	〃	〃	〃	〃	〃
ロクロ横ナデ→篦削			〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃			〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{3}$ 〃
〃		回転篦削	〃	〃	〃	〃	〃	$\frac{1}{3}$ 〃
〃	円心状篦磨の中に十文字の篦磨	削出高台		〃		〃	〃	片
〃	〃	〃		〃		赤褐色	〃	〃
〃		〃		〃		灰褐色	〃	半完
〃		〃		〃		〃	〃	片
〃		〃		〃		〃	〃	〃
	円心状篦磨の中に十文字の篦磨	〃(糸切痕を残す)		〃		〃	〃	〃
	放射状篦磨	脚付		〃			〃	線
		〃		〃			〃	〃
				〃				片
↓ 櫛状篦		木の葉底		〃				半完
〃				〃				片
ロクロ				〃				環
〃				〃				片
〃				〃				〃
							粘板岩製	完
				堅固			内面布目外面撚糸目	
				〃			〃	片
				〃			〃	〃

表 5

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	胴部	胴
第22図 4	北部ブロック	北部ブロック内より混って出土	〃	平瓦					
第23図 1	掘削溝中	表採	〃	丸瓦					
2	〃	〃	〃	平瓦					

方法			胎土	焼成	色調		備考
部	衣	部			内	外	
				堅固			外面布目内面撚糸目　片
				〃			〃　〃
				〃			〃　〃

（注）1．矢印（→↘）は篦削の方向を示す。

2．全面篦削、糸切後周囲1～1.5cm篦削とあるは、すべて静止篦削のものであり、前者は全く糸切痕を残さず、後者は糸切痕を残すものである。

3．篦のみ記入するものは篦であるが、回転篦削、静止篦削いずれか判明しないもの。

4．篦磨とあるは、暗文と同語。

（2） 南・北・地点および十郎橋地点

大坪南地点で一括出土したＡ２グリッド土師集積遺構内遺物は、考察で詳細に分析されているので他のグリッド出土の遺物をここであつかう。遺物の量は概して西側のＡグリッドに多く、Ａ２．３．４．５．７．８に積中している。特に４．５．８は多く、一括出土しているが遺構との関連が明確ではなく、一括遺物として捉えられるのかはっきりしないので、土器の整形技法によってこれを分けた。南地点出土遺物は第24図～第28図であり、一部表採品も含まれる。第24図１～３は奈良時代から平安時代に移行する時期のものと考えられ、外面口縁は横ナデ、胴から下はヘラなどで整形される。口縁先端は１は内湾、３は外傾し尖る特徴は真間期のものに近いと考えられる。４～26は外面胴部下半にヘラ削が見られるもので、口唇外反玉縁を呈するものが多く、外傾、外反の程度で分類することができるかもしれない。27.28.29は前述の遺物に先行し、かつ１～３以降に位置する。45.46を標式とする皿は、底部円形ヘラ削が施され、胴部がくの字に屈曲するものである。黒色土器56～64のち最も古いものは56で外面ヘラみがき、内面黒色で口縁部内面が２と共通する。65は縁釉陶器で鳴海窯のものと思われ、胎土黄白色である。これは溝中の出土で溝の掘削年代を決め得る資料であろう。71.73は高杯脚部である。特に注意しなければならないのは73である。県下に於ける出土例はこの遺跡の数例の破片を除いて皆無の状態である。長野県内でも例を知らないが、この脚は畿内に見られる外面をたてに大きくけずって面どりした、高い脚をもつ高盤のそれであろうか。もしそれだとするなら、畿内での盛行時期が８～９世紀であり、これに伴出する遺物の略年代が知れようと思う。

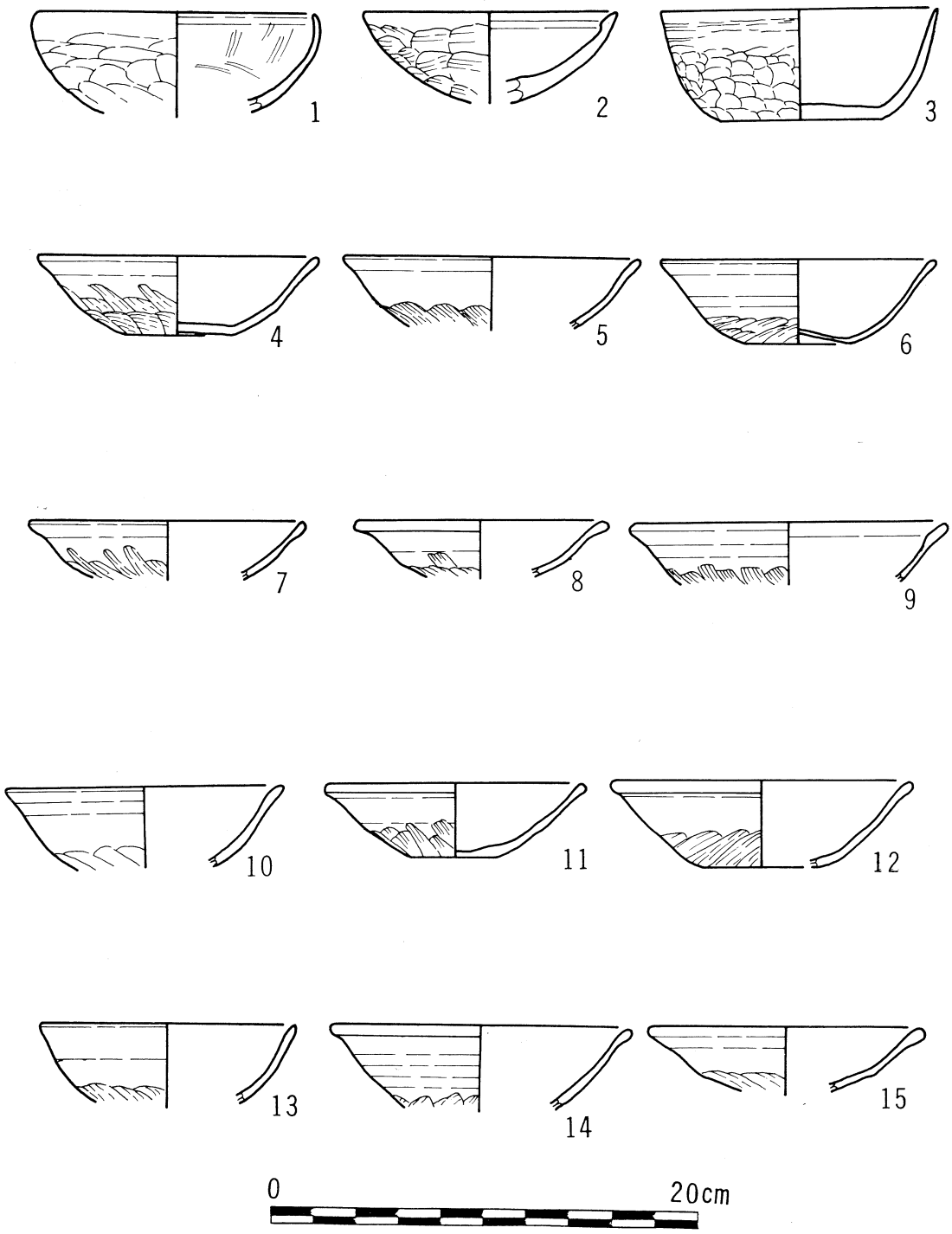
以上南地点の遺物を概観してきたが、暗文手法、高盤等が畿内と近い技法を示す反面、須恵器、灰釉陶器の量の少なさ、内外面黒色土器がほとんど見られない点など逆の現象を示す資料も多い。又畿内との関連を示す黒色暗文土器や高盤は若干時期的な差がある様である。

北地点で出土した遺物の見るべきものは、Ａ４グリッドのものである。焼土を中心に一括出土した遺物は南地点の土師器集積遺構出土遺物とほぼ同一時期か後続するものであろう。又、表採品としてあるが、いづれも工事中に掘り出されたもので、北地区出土品である92は古墳時代のコシキと思われるものである。

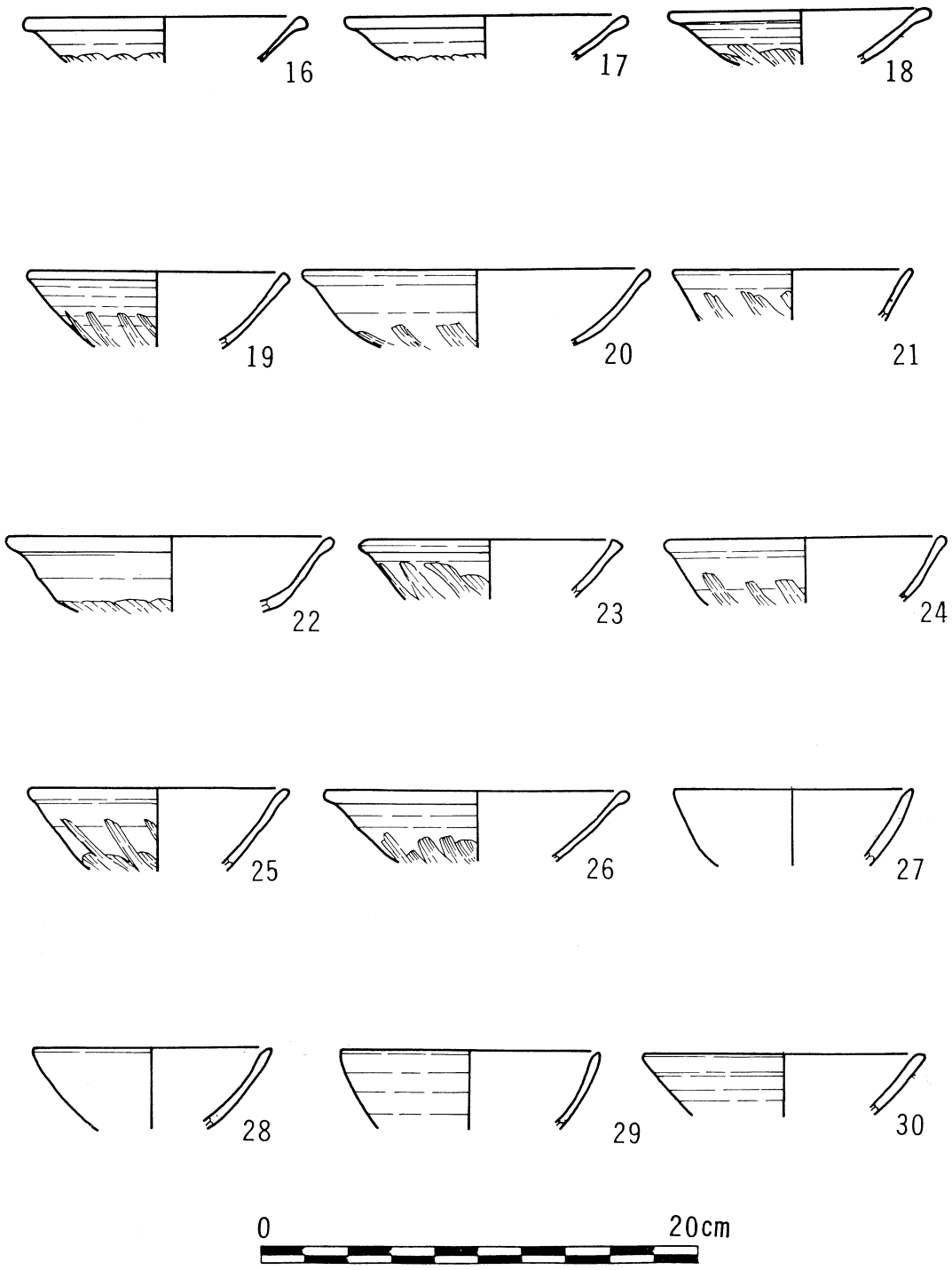
94.95.97.98は布目瓦で、他に表採品として多くの破片があるが、建物址の様な遺構を伴っていない。調査範囲が狭かった為かもしれないが、土師器等の生産地の可能性を考えた場合、むしろ瓦生産も近くで行なわれていたことを想定しても良いかと考える。96は土師質胎土の土器片で表は桃葉の様なレリーフがあり、裏面に刻書で「田」とある。新しい遺物かもしれないが参考の為図示した。

第31図～第34図は十郎橋工事中出土の一括遺物である。破片が多く復元実測が多いが、一括遺物としての傾向を知る為には良好な資料と言える。図示した84個の遺物のうち18個が黒色土器である。全体の約78％が普通の土師器で残る22％が黒色土器ということになる。土師器の杯及び皿は玉縁外反口縁をもち、胴から底部にかけてのヘラ削はあらい。又ヘラ削の無いものも外反玉縁は変らないので、この実測できなかった下部にヘラ削があったものも多いと考えられる。黒色土器のうち１点64のみが暗文が施されるだけで特異な存在である。黒色土器の器径は一般の土師器に比べ大きく、用途の上で分担があったことがうかがわれるであろう。

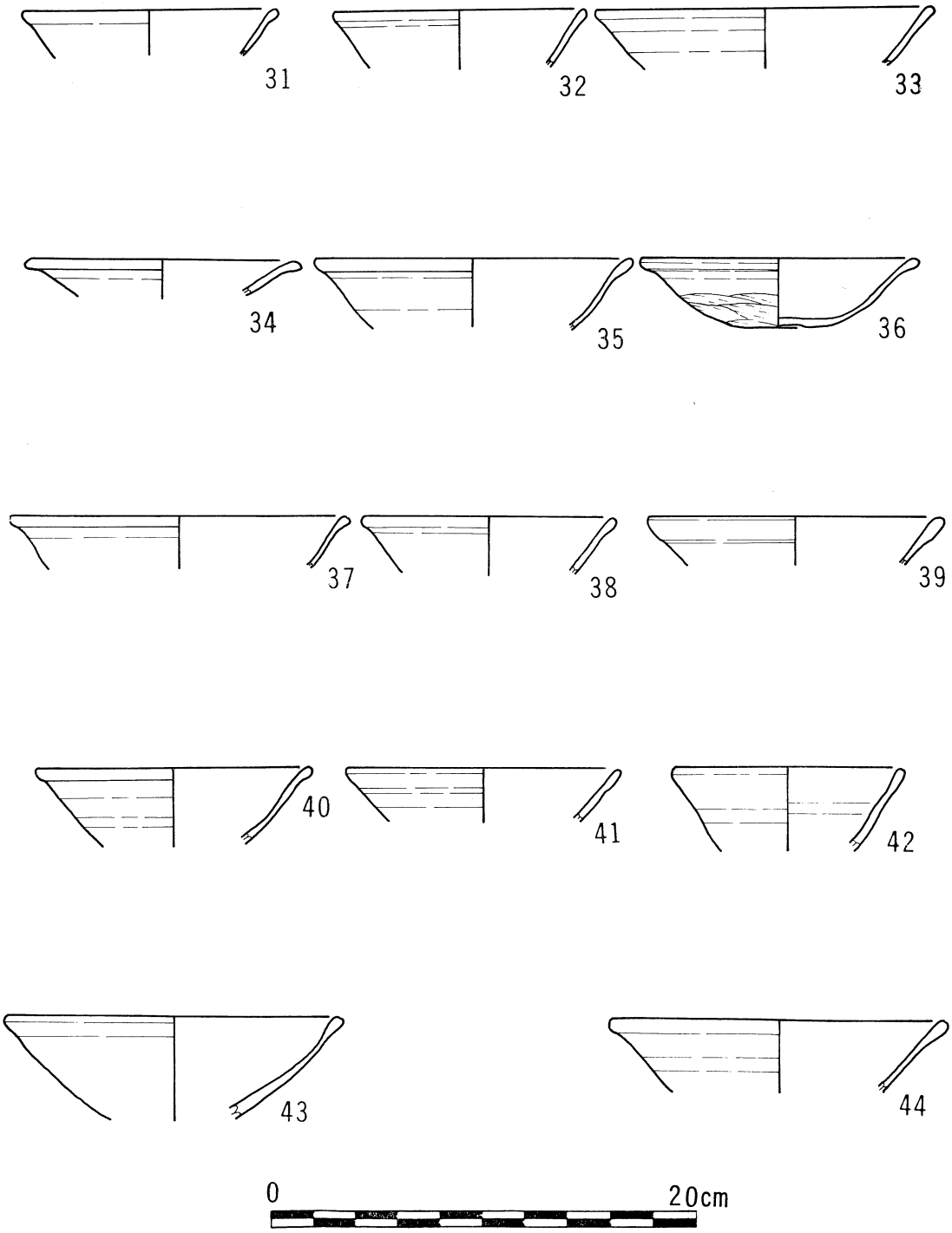
（末木）



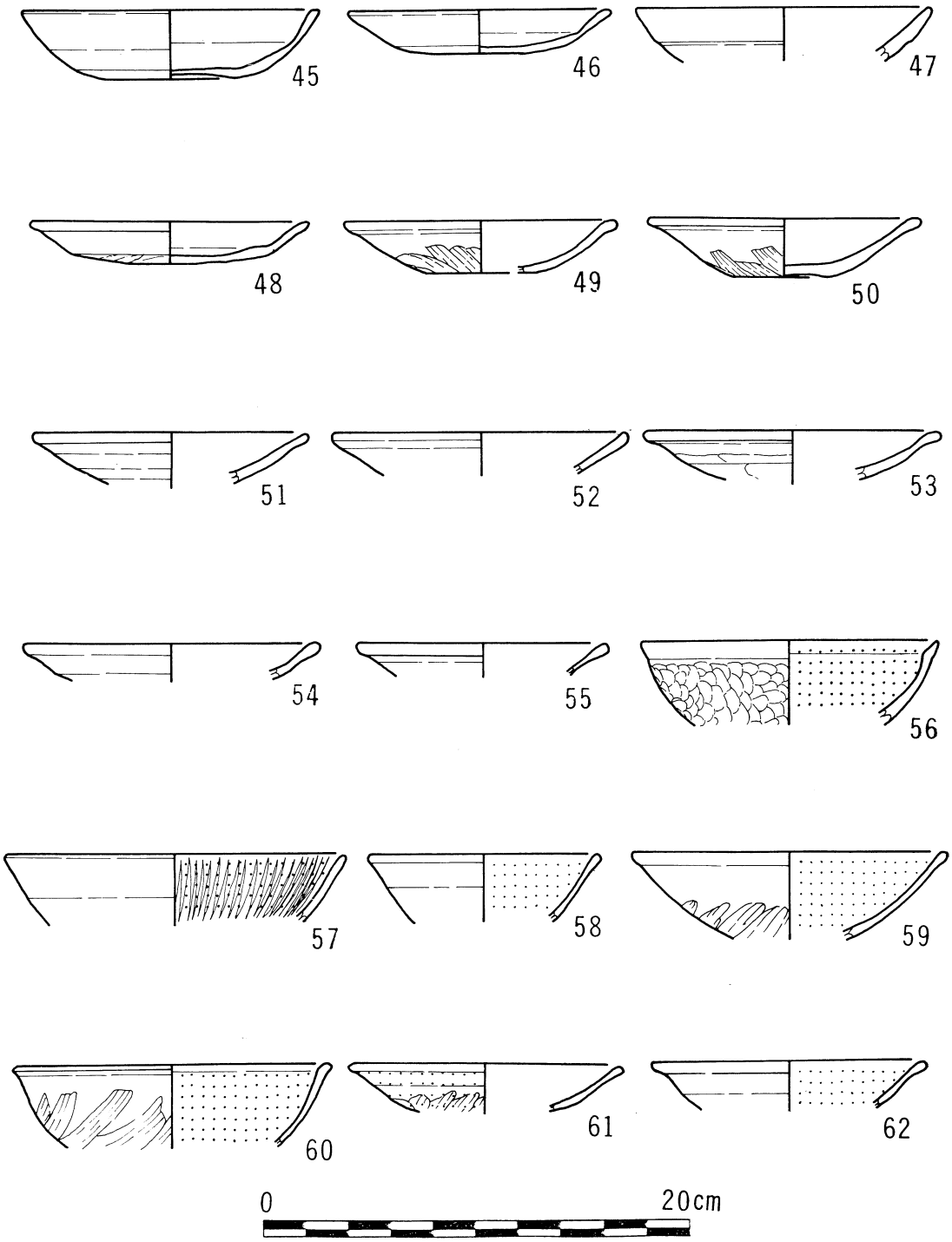
第24図　南地点出土遺物



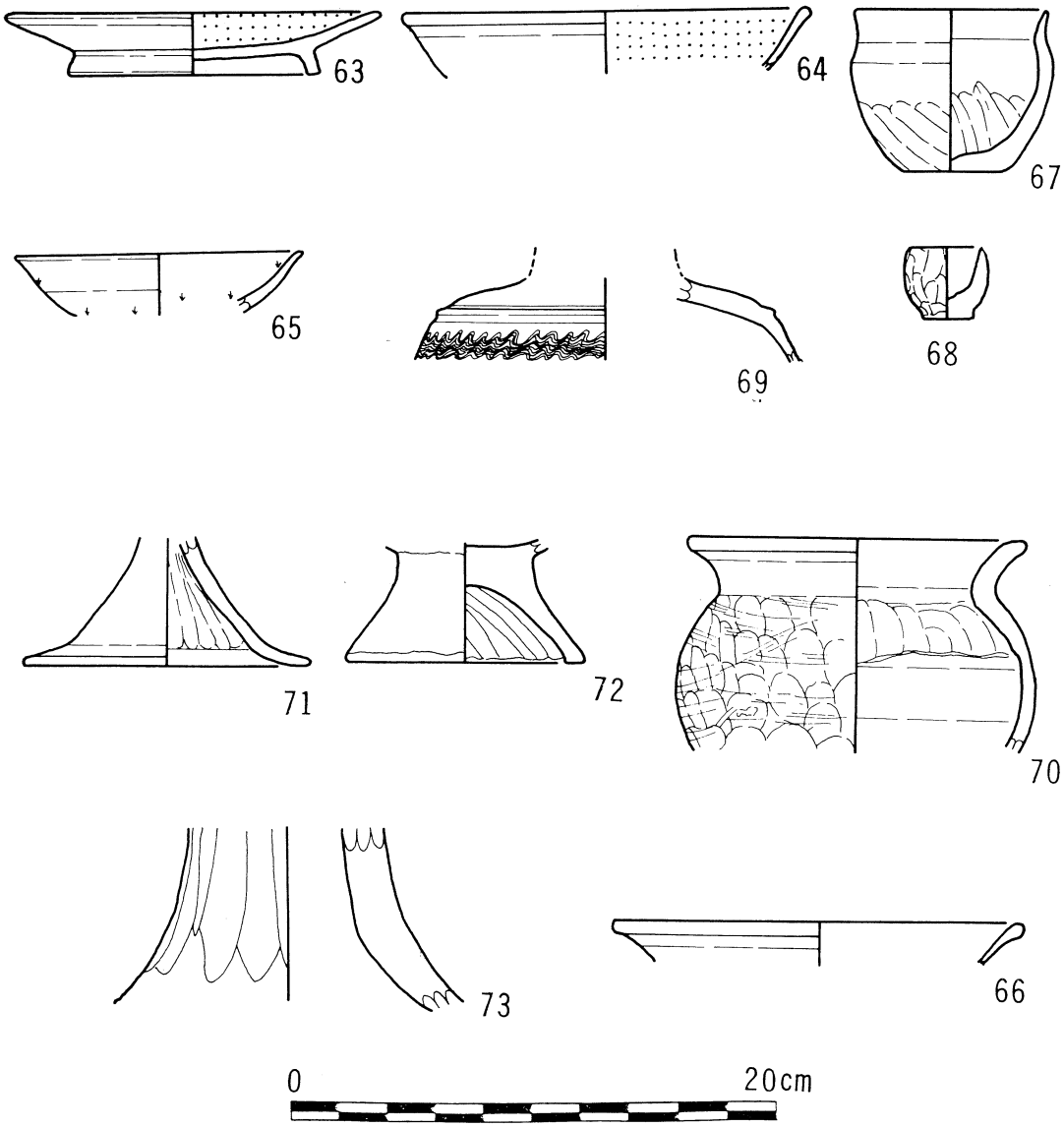
第25図　南地点出土遺物



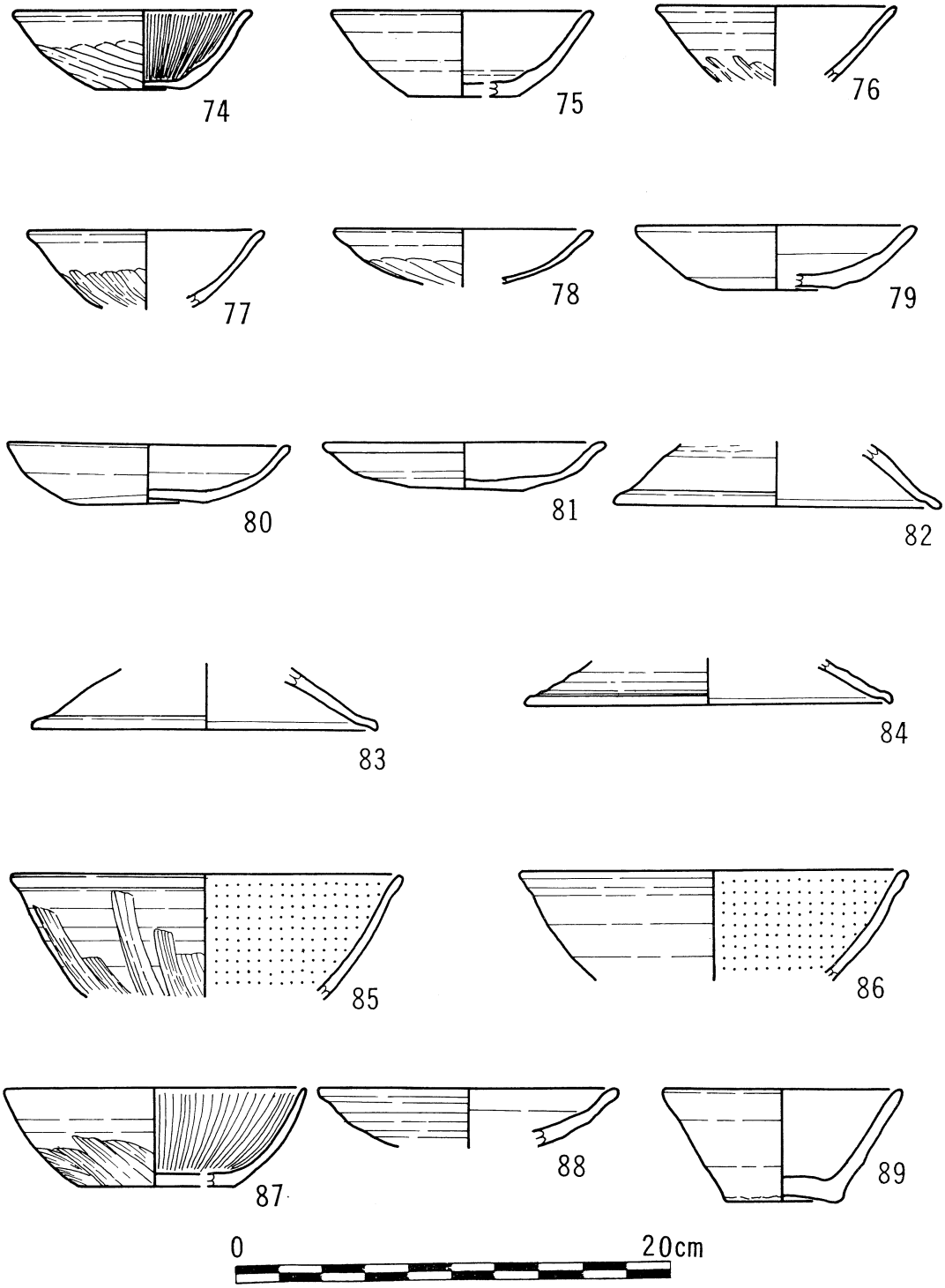
第26図　南地点出土遺物



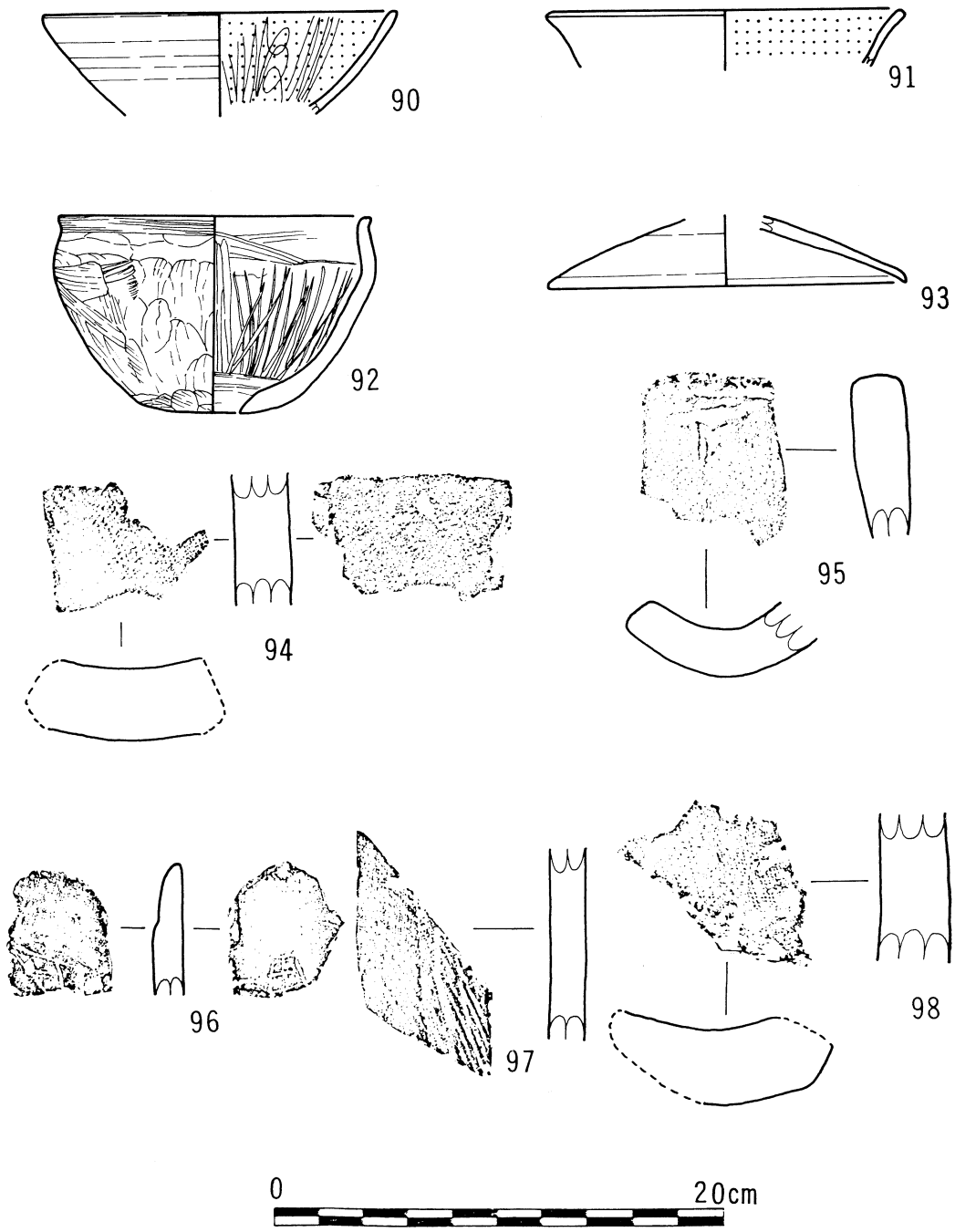
第27図　南地点出土遺物



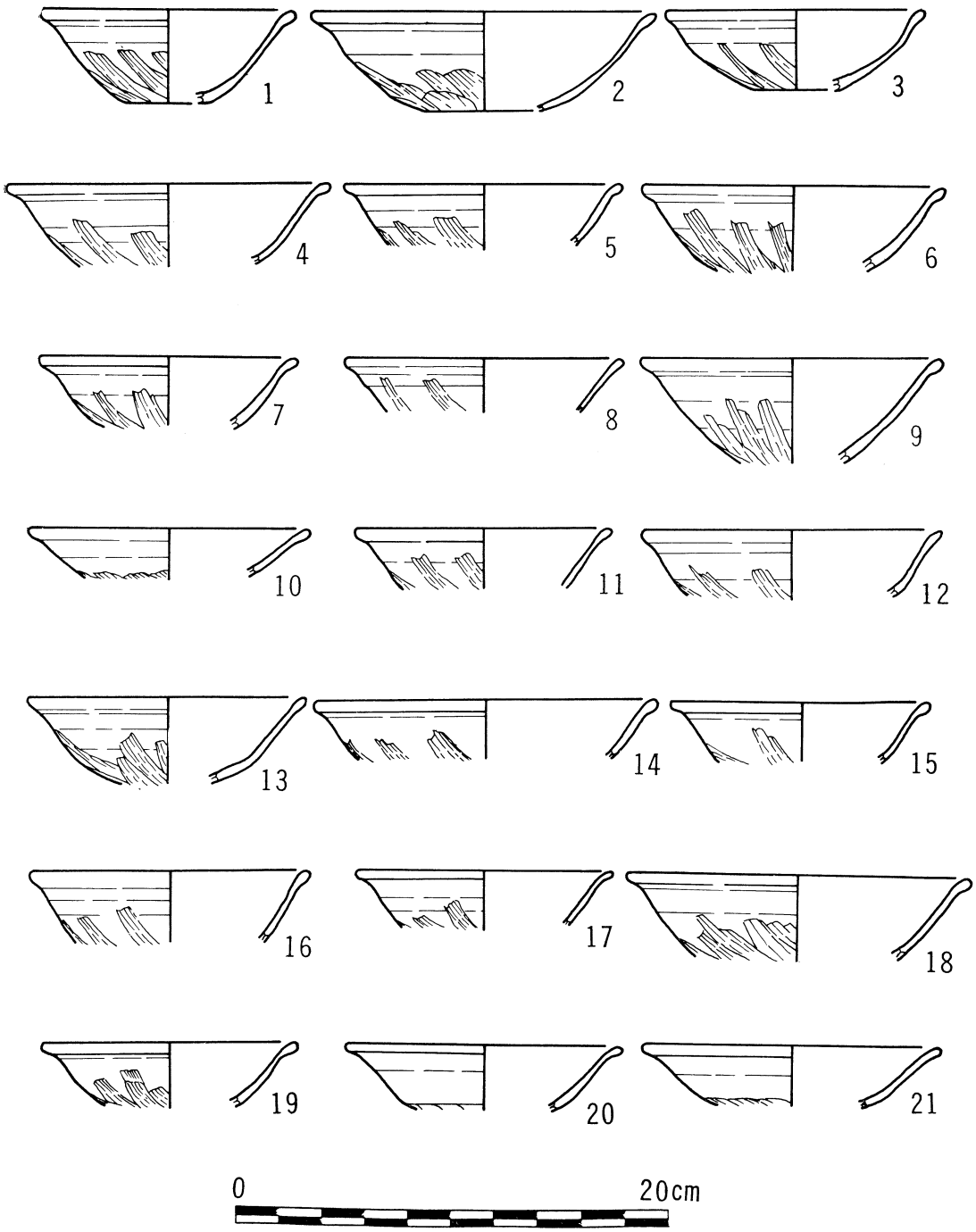
第28図　南地点出土遺物



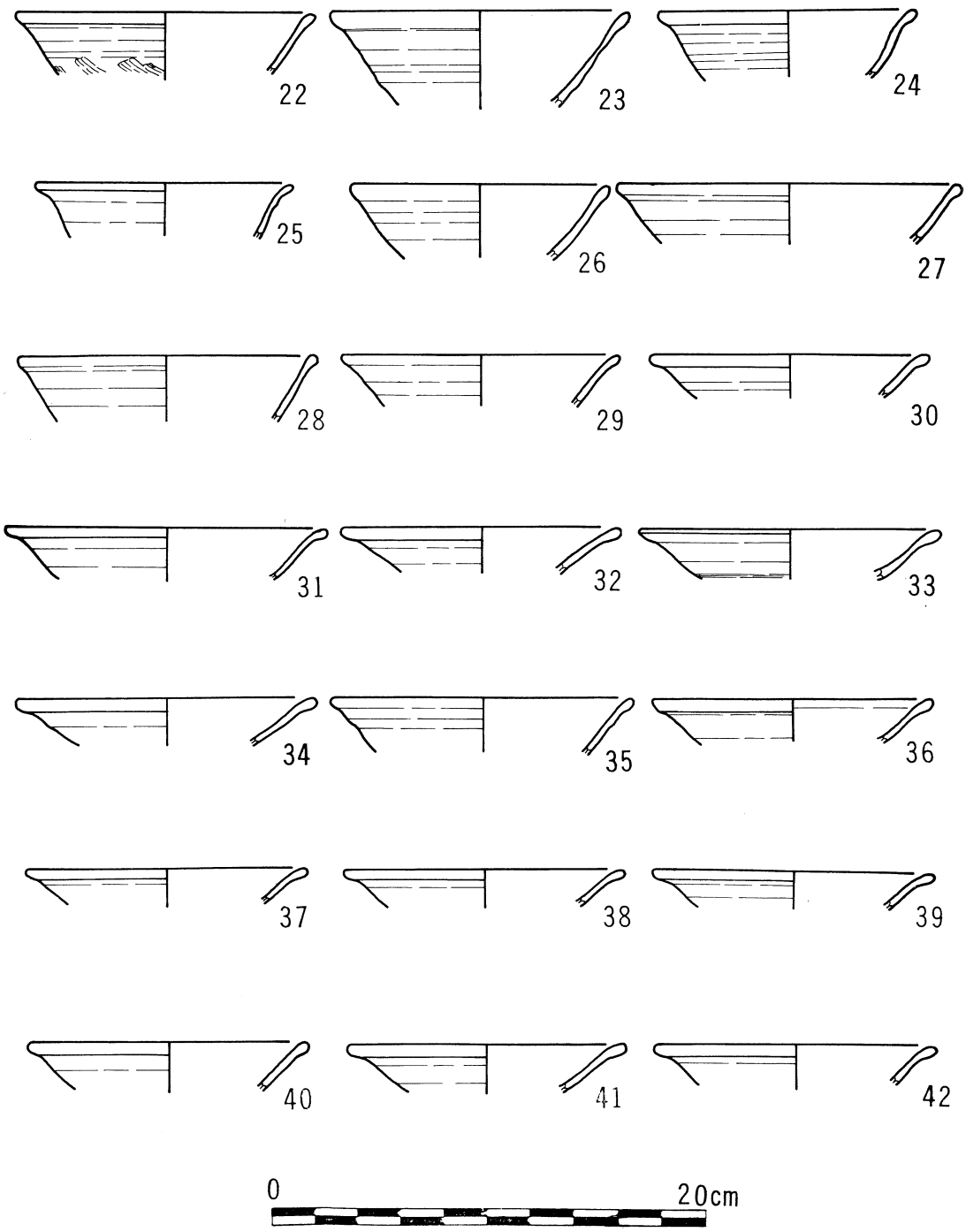
第29図　北地点出土遺物



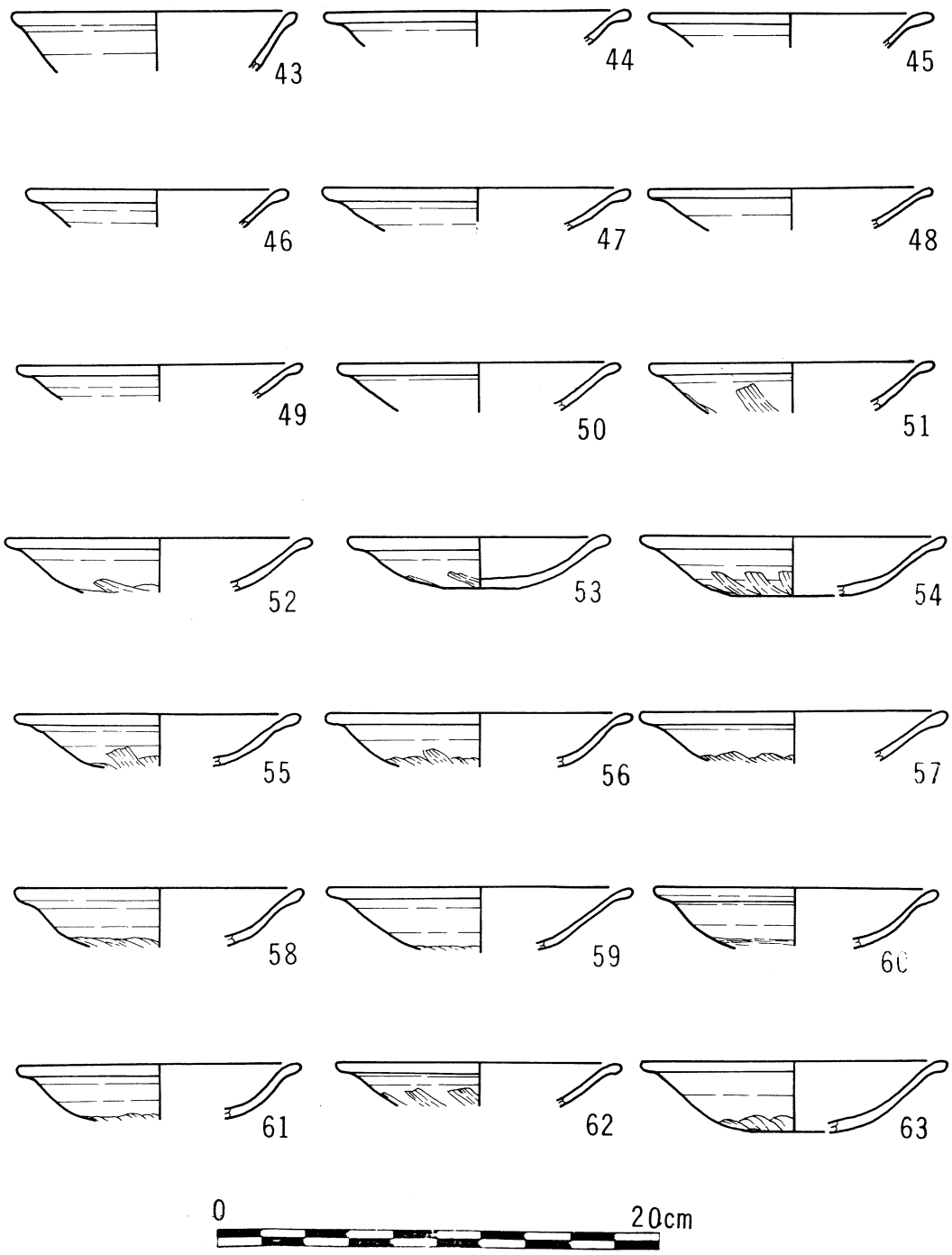
第30図　北地点出土遺物



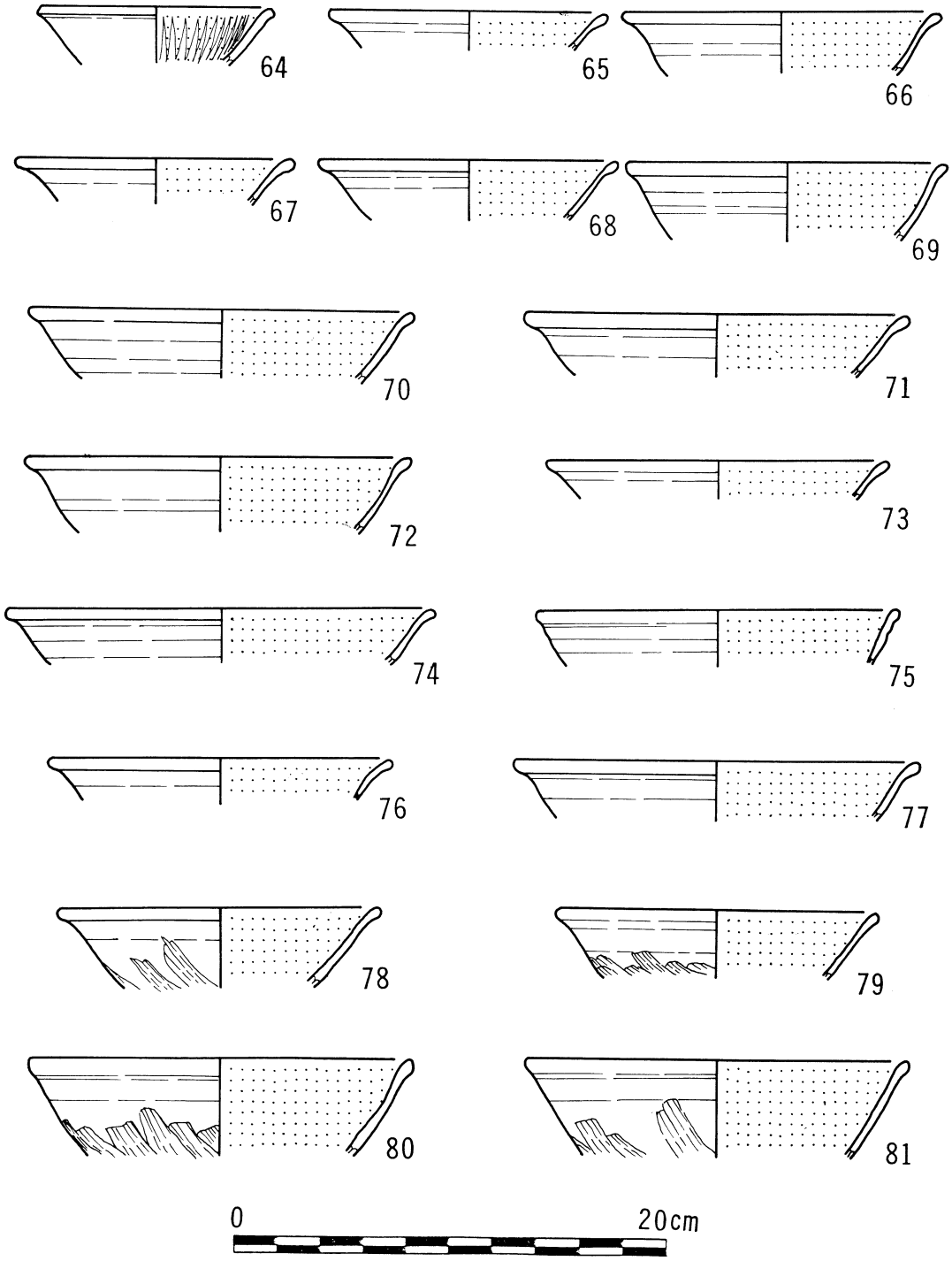
第31図　十郎橋地点出土遺物 (1)



第32図　十郎橋地点出土遺物 (2)



第33図　十郎橋地点出土遺物 (3)



第34図　十郎橋地点出土遺物　(4)

表 6

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量 口径	器高	底径	整形 口縁	胴
第24図1	南 A 2	P 2	土師器		13			内反 横ナデ	㊥ ヘラみがき
2	〃 A 2		〃		12			外 傾	横 ナ デ
3	〃 A 7	P 1	〃	杯	13	5.2	5.5	〃	横 ナ デ
4	〃 A 4		〃	〃	14	3.7	5	外 反	〃
5	〃 A 4	P 7	〃	〃	13.8			〃	〃
8	〃 A 4	P9. 14−1	〃	〃	13	4	5	〃	〃
7	〃 A 5	P 5	〃	〃	12.8			外傾やや玉縁	〃
8	〃 A 4		〃	〃	12			外反 玉縁	〃
9	〃 A 4	〃	〃	〃	14.8			外傾 玉縁	〃
10	〃 〃		〃	〃	13			外傾	〃
11	〃 A 4	P 12	〃	〃	12	3.5	4.2	〃 やや玉縁	〃
12	〃 〃	P14−2	〃	〃	14.4	4	5.2	外反やや玉縁	〃
13	〃 A 5		〃	〃	12			外傾 尖唇	〃
14	〃 B 9	溝	〃	〃	14			外反 玉縁	〃
15	〃 〃	〃	〃	〃	13			〃	〃
第25図16	南 A 8		土師器	杯	12.6			外反 玉縁	〃
17	〃 A 8		〃	〃	13			〃	〃
18	〃 A 8		〃	〃	12			〃	〃
19	〃 A 8		〃	〃	11.6			外傾やや玉縁	〃
20	〃 A 4	P 13	〃	〃	16			〃	〃
21	〃 A 3		〃	〃	11			外 傾	〃
22	〃 A 8		〃	〃	15			外反 玉縁	〃
23	〃 A 8		〃	〃	12			外傾 角縁	〃
24	〃 A 8		〃	〃	13			外傾やや玉縁	〃
25	〃 A 3		〃	〃	12			外 傾	〃
26	〃 A 8		〃	〃	14			外反 玉縁	〃
27	〃 B 5		〃	〃	11			外傾 尖唇	〃
28	〃 B 5		〃	〃	11			〃	〃
29	〃 B 3		〃	〃	12			〃	〃
30	〃 A 8		〃	〃	13			外 傾	〃
第26図31	南 A 4		土師器	杯	12			外反 玉縁	横 ナ デ
32	〃 A 4		〃	〃	12			外 傾	〃
33	〃 A 4		〃	〃	16			〃	〃
34	〃 A 4		〃	皿	13			外 反	〃

方法			胎土	焼成	色調		備考
部	底	部			内	外	
㊥ ヘラケズリ	㊦	㊥	こまかい	やや生焼成	赤褐色	赤褐色	
ヘラケズリ			〃	良　好	黄褐色	黄褐色	
横ヘラナデ		糸切後ヘラ削	〃	〃	赤褐色	赤褐色	底部周囲ヘラ
横ヘラ削		糸一ヘラ削	〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃		〃	〃	やや生焼	黄褐色	黄褐色	
〃			〃	良　好	暗褐色	暗褐色	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			やや荒い	〃	黄色	黄色	
〃			こまかい	〃	赤褐色	赤褐色	
〃		ヘラ削り	〃	やや生	赤色	赤色	
〃		〃	〃	良　好	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	やや生	黄褐色	黄褐色	
〃			〃	良　好	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	黄色	黄色	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			やや荒い	不　良	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	良　好	〃	〃	
〃			こまかい	良　好	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	褐色	褐色	
〃			〃	〃	赤褐色	赤褐色	
横ナデ			〃	やや生	褐色	褐色	
〃			〃	〃	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	〃	黄褐色	黄褐色	
〃			〃	良　好	赤褐色	赤褐色	
横ナデ			〃	やや生	赤褐色	赤褐色	
			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	

表 7

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	口縁	胴
第26図35	南 A 4	P 1	土師器	杯	15			外反玉縁	㊥ 横ナデ
36	〃 A 4	P 10	〃	皿	13.2	3.4	4.5	〃	横ナデ
37	〃 A 4		〃	杯	16			〃	〃
38	〃 A 4	P 8	〃	〃	12			〃	〃
39	〃 A 4	P 4	〃	〃	14			外傾やや玉縁	〃
40	〃 A 8	P 1—Ⅳ	〃	〃	13			外反やや玉縁	〃
41	〃 A 8		〃	〃	13			外傾	〃
42	〃 A 5		〃	〃	11			〃	〃
43	〃 A 8		〃	〃	16			外傾やや玉縁	〃
44	〃 A 8		〃	〃	16			〃	〃
第27図45	南 A 2		土師器	皿	14.2	3.3	6	外傾	横ナデ
46	〃 A 2	P 1—Ⅰ	〃	〃	12.5	2	4	〃	〃
47	〃 A 5	P 1—Ⅱ	〃	〃	14.2			〃	〃
48	〃 A 4	P 6	〃	〃	13.2	2	3	〃	〃
49	〃 A 8	P 2—Ⅰ	〃	〃	13	2.5	5.2	外反玉縁	〃
50	〃 A 8	P 1—Ⅲ	〃	〃	13	2.8	4.6	〃	〃
51	〃 A 8		〃	〃	13			外傾	〃
52	〃 A 8		〃	〃	14			〃	〃
53	〃 A 2	P 5—Ⅱ	〃	〃	14.2			外反玉縁	〃
54	〃 A 4		〃	〃	14			〃	〃
55	〃 A 4		〃	〃	12			〃	〃
56	〃 B 5		〃	杯	14.2			外傾	〃
57	〃 A 2	P 5—Ⅰ	〃	〃	16.2			外反	ロクロ横ヘラ暗文
58	〃 A 4		〃	〃	11			外傾やや玉縁	横ナデ
59	〃 A 4	P 2	〃	〃	15			〃	〃
60	〃 A 4		〃	〃	15			〃	〃
61	〃 A 8		〃	皿	13			〃	〃
62	〃 A 4	P 15	〃	〃	13			〃	〃
第28図63	南 B 5		土師器	皿	15.6	2.7	10.5	外傾	横ナデ
64	〃 A 4		〃	杯	17			〃	〃
65	〃 B 9		緑釉陶器	杯	12			やや外反	釉全面
66	〃 A 8		土師器	〃	17			外反	横ナデ
67	〃 A 2	P 4	〃	小形甕	8	6.8	4	やや外反	横ナデ指ナデ
68	〃 A 2	P 3	〃	手ックネ土器	3	3	2	直立	指ナデ

方法 部	底部		胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考
㊥横ナデ	㊥	㊥	こまかい	やや生	赤褐色	赤褐色	
口横ヘラ削		ヘラ削	〃	〃	〃	〃	
横ナデ			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	黄褐色	黄褐色	
〃			〃	良好	赤褐色	赤褐色	
〃	〃		〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	黄白色	黄白色	
〃			やや荒い	やや生	褐色	褐色	
黄、ヘラ削		ヘラ円削	こまかい	〃	赤褐色	赤褐色	胴下部底部円削
〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃
横ナデ			〃	良好	赤色	赤色	
横、ヘラ削		ヘラ削	〃	〃	暗褐色	暗褐色	底部ヘラ切か
〃		〃	〃	〃	褐色	褐色	
〃		〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
横ナデ			〃	〃	黄白色	黄白色	
〃			〃	〃	赤黄色	赤黄色	
横ヘラ横削			〃	〃	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	やや生	〃	〃	
横ナデ			〃	良好	赤黄色	赤黄色	
ヘラみがき			〃	〃	黒色	暗褐色	口縁外面横ナデ
横ナデ			〃	〃	〃	褐色	
〃			〃	〃	〃	黄褐色	
横、ヘラ削			〃	〃	〃	赤褐色	
〃			〃	〃	〃	〃	
〃			〃	〃	黄色	黒色	
横ナデ			〃	〃	黒色	褐色	
横ナデ		高台	こまかい	良好	黒色	赤色	
〃			〃	〃	〃	〃	
釉全面			黄褐色かたり	〃	濃緑	濃緑	
横ナデ			こまかい	良好	赤色	赤色	
横ナデ、指ナデ		ヘラなで	石英粒を多く含む	やや生	黄白色	黄白色	
指ナデ		〃	こまかい	やや生	暗褐色	暗褐色	

表 8

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	口縁	胴
第28図69	南 A 5		須恵器	𤮊					⌀
70	南表採		土師器	甕	14			横ナデ	横、指圧
71	〃 B 1		〃	高杯脚			12		指ナデ
72	〃 A 5	P 1—1	〃	台			10		〃
73	〃 B 5		〃	高杯脚					ヘラナデ
第29図74	北 A 4	P 2	土師器	杯	11	3.7	4	やや外反	横、ヘラ暗文
75	〃A 4 拡	P 15	〃	〃	12	4	5	外傾	横ナデ
76	〃 A 4		〃	〃	11			〃	〃
77	〃 A 3		〃	〃	11			やや外反	〃
78	〃 A 6		〃	皿	12			外傾	〃
79	〃 A 4		〃	〃	13	3	5.4	〃	〃
80	〃A 4 拡	P 16	〃	〃	13.2	2.8	5.8	〃	〃
81	〃 A 4	P 4	〃	〃	13.2	2.1	5.3	やや外反	〃
82	〃 A 3		〃	杯蓋			15		〃
83	〃A 4 拡		〃	〃			16		〃
84	〃 A 4		〃	〃			17		〃
85	〃 表		〃	杯	18.1			やや外反	〃
86	〃 A 4		〃	〃	18.2			外傾	〃
87	〃 表		〃	〃	14	4.5	7	〃	〃 暗文
88	〃 表		〃	皿	13.7			やや外反	横ナデ
89	〃 表		〃	杯	11	5.1	5.3	外傾	〃
第30図90	北 表		土師器	杯	16			外傾	横、ヘラ暗文
91	〃 〃		〃	〃	16			外反	横ナデ
92	〃 〃		〃	コシキ	14.2	9	4	直口	ヘラ
93	〃 〃		〃	杯蓋	16				横ナデ
94	〃 〃		瓦	瓦(平)					布目
95	〃 〃		〃	〃(丸)					布目
96	〃 〃		土師質	不明					
97	〃 〃		瓦	瓦(平)					布目
98	〃 〃		〃	〃(平)					布目

方法 部	底	部	胎土	焼成	色調 内	色調 外	備考
㊥ 波状櫛目文	㊦	㊥	ややあらい	良好	青灰色	青灰色	
ヘラナデ			〃	〃	黄褐色	黄褐色	
横ナデ			こまかい	やや生	赤褐色	赤褐色	
なでつけ			石英粒でやや荒い	良好	暗褐色	暗褐色	台底部木葉痕上面は刷毛目
ナデ、ヘラ削			こまかい	〃	赤色	赤色	
横、ヘラ削		糸切、ヘラ	こまかい	やや生	赤黄色	赤黄色	放射状暗文
横ナデ		ヘラ削	〃	〃	〃	〃	
横、ヘラ削			〃	良好	赤色	赤色	
〃			〃	やや生	黄白色	黄白色	
〃			〃	〃	赤褐色	赤褐色	
横、ヘラ円削		ヘラ削	〃	良好	〃	〃	
〃		糸切ヘラ円削	〃	やや生	赤黄色	赤黄色	
〃		ヘラ削	〃	良好	赤褐色	赤褐色	
〃			〃	〃	〃	〃	上部ヘラ横削
横ナデ			やや荒い	やや生	赤色	赤色	
〃			こまかい	良好	赤褐色	赤褐色	
横、ヘラ削			〃	〃	黒色	黄褐色	
横ナデ			〃	〃	黒色	赤褐色	
〃			〃	〃	〃	〃	放射状暗文
〃			〃	〃	黄白色	黄白色	
〃		糸切	〃	やや生	赤褐色	赤褐色	
横ナデ			こまかい	良好	黒色	暗褐色	
〃			〃	〃	黒色	〃	
ヘラなで		ヘラ削	〃	〃	赤褐色	赤褐色	口縁横ナデ
横ナデ			〃	〃	〃	〃	外面上部タール付着
板目							
							刻書「田」

5. 考　　察

（1） 土師器集積遺構出土品の分類

出土遺物は土師器、須恵器、瓦、石器等見られるが、順次分類してみよう。

土師器には 皿形土器、杯形土器、鉢形土器、片口形土器、甕形土器等あるが、南部ブロックよりは杯形土器と 皿形土器（1点）、小型甕形土器（1点）が出土したのみで、他の器形（黒色土器を含め）はすべて北部ブロックより出土している。

皿形土器は大別すると次の様になる。

A類　胴部下部に横位の篦削りの見られるもの

B類　胴部下部に斜位（上から下へ）の篦削りの見られるもの

C類　黒色土器

ア、A1類（第10図4・5）

A類中、口縁部が内傾気味に開き、内面に強いくひれ部を有する。胎土は精々され、表面は滑らかな仕上りである。底は回転篦削りである。

イ、A2類（第10図6～15、第11図1～18、第12図1～11）

A類中、口縁部が玉縁で外反するもので、器高によって細分すると、20m/m以下のA2a類（第10図6～12、14）、21m/m～29m/mのA2b類（第10図13、15、第11図1～18、第12図1～8）、30m/m以上のA2c類（第12図9～11）に分類され、底は回転篦削である。なお第12図6～11は凸底を形成する。

ウ、A3類（第10図1～3）

A類中、内面に篦磨を有するもので、口縁部が玉縁外反のA3a類（第10図1・2）と、口唇部が角ばるA3b類（第10図3）に細分される。底は回転篦削である。

エ、A4類（第12図12）

口縁部が内傾気味に開き、口唇部は丸形を呈する。器肉厚く重量感がある。底部は回転篦削である。

オ、B1類（第13図1・2）

B類中、口縁部が内傾気味に開くものである。底は回転篦削である。

カ、B2類（第13図3～8）

B類中、口縁が玉縁外反するものである。底は回転篦削（第13図8）のものと、静止篦削（第13図4・6・7）の2種類がある。

キ、C類（第17図1～3）

b類黒色上器（第17図1）で、器形的にはB類を踏襲するものであるが、内面に花弁状篦磨を有する。底は静止篦削である。

第17図2・3は外面に一部黒色が見られるので、一応黒色として取り扱ったが、A2類に属するものであろう。

杯形土器は大別すると次の様になる。

A類　胴部下部に斜位（上から下）の篦削が見られる。

B類　台付杯

C類　黒色土器

ア、A1類（第14図1～15、第15図1～3）

A類中、口唇部が尖形ないし丸形を呈し、かつ内傾気味の口縁部であり、更に内面に篦磨が施されるものである。整形は入念であり、器形の大きさも斉一性をとる。篦磨の形態で放射状篦磨のA1a類（第14図1～4）と花弁状篦磨のA1b類（第10図5～15、第15図1～3）に細分される。底は回転篦削と静止篦削が見られ、回転篦削の場合は必ず糸切痕を僅かに残す。

イ、A2類（第15図1～4）

A1類の内面に篦磨の見られないものである。底は静止篦削と回転篦削（糸切痕を残す）の2通りがある。

ウ、A3類（第15図4～9）

A類中、口縁部が玉縁で外反し、内面に篦磨を有するものである。整形は入念で、器形に斉一性が見られる。篦磨の形態で放射状篦磨のA3a類（第15図9）の花弁状篦磨のA3b類（第15図4～8）とに細分できる。底は静止篦削（第15図5・7）が判明する他は不明である。

エ、A4類（第16図5～10）

A3類の内面に篦磨が見れないものである。底は篦であるが、静止、回転どちらによるものか判明しない。

オ、B_1類（第15図1）

削り出し高台のものであるが、個数は図示した一例と、破片が1点見られるにすぎない。

カ、B_2類（第15図12）

高台が削り出しによるものでなく、水びき手法によって作られたもので、例は黒色土器を含め13例のみである。

キ、黒　色　土　器

杯形黒色土器は大別すると、次の様になる。

C_1類　胴部下部に斜位（上から下）の篦削を有する。

C_2類　胴部下部に横位の篦削を有する。

C_3　底が高台を有する。

（ア）　C_1a類（第18図1・2）

a類黒色土器であり、口縁部が玉縁外反し、内面に花弁状篦磨を有する。第18図2の篦磨は、胴部内側に四方向（十字）に施され、かつ底内面にら線状篦磨も施されている。底は静止篦削（第18図2が確認され、残りは篦削であるが、静止か回転いずれとも判断できない。

（イ）　C_1b類（第19図2）

C_1a類の内面に花弁状篦磨の外にら線状篦磨を合せて施すものである。

（ウ）　C_1c類（第17図7・8）

a類黒色土器で、器形的にはC_1a類に該当するものであるが、内面に全く篦磨を施してない。底は篦であるが、回転静止いずれによるものか不明である。

（エ）　C_2a類（第18図3～10）

a類黒色土器で、内面に放射状あるいは花弁状の篦磨が施されている。第18図5～8は器形に斉

一性が見られる。この種の口縁部内側に横位の篦磨が見られるものが多い。底はすべて回転篦削によってなされている。

（オ） C_2b類（第19図1・3・4）

a類黒色土器で、内面に花弁状篦磨が四方（十字）に、その間にら線状篦磨を交互に施したものである。底部を全く欠き、整形方法からは、次のC_3類に含まれるものかもしれない。

（カ） C_2c類（第17図9・10）

a類黒色土器で、内面に全く篦削を施してない。底は第8図9が回転篦削で、外は不明である。

（キ） C_3a類（第20図1～6）

a類黒色土器で、内面に花弁状篦磨が四方（十字）に、その間にら線状篦磨が施されるのを通常とする。第20図2・6の場合には底内面にも十字状に篦磨が施されている。底は削り出し高台である。

（ク） C_3b類（第20図7・8）

a類黒色土器で、高台が水びき手法によって作られている。第20図7の底内面には放射状篦磨が施されている。

なお第17図4～6は外面一部に黒色部分が認められるものである。

鉢形土器（第16図11・12・第19図5）

口径が20㎝を超すもので、3点確認されている。3点とも水びき手法による整形で、胴部下部に横位の篦削、底は回転篦削という共通点をもつが、2分類される。

A類　口類口縁部が大きく外反する（第16図11・12）

B類　口縁部は僅かに外反し、口唇部が角形を呈するa類黒色土器である。

片口形土器（第19図6）

a類黒色土器であり、胴部下部に横位篦削、底は回転篦削にて整形されている。図示したのは1点であるが、この外に片口部が1点同地点より出土している。

杯蓋形土器（第21図1）

1点出土が確認されたにすぎない。外部に一部黒色部が認められる。口縁部は簡略化された鳥嘴状を呈する。

甕形土器（第21図3）

口縁部が比較的薄い作りで、外反する。胴部内外に櫛状篦なでが顕著に認められる。

小型甕形土器（第21図2）

短かい口縁部が外反するもので、胴部内外面に櫛状篦なでが認められる。木の葉底。

砥石（第21図7）

粘板岩製のもので、使用面が2面見られる。

須恵器（第21図4・5・6）

須恵器の出土量は極めて小なく、長頸壺（第21図4）、壺形土器（同6）、甕形土器（同5）の器形が見られる。

布目瓦（第22図1～4、第23図1・2）

丸瓦（第23図1）平瓦（第23図2、第22図1～4）の2種類がある。第22図の4例が土師器集積遺構内より、第23図2例は表採品である。

（2） 法 量 と 形 態

本遺構付近は、末木健が述べている様に、甲斐国に於ける一大窯業地域を 形成していたものと考えられている場所であるが、現在に至るまで、その内容について考察できる資料は十分とは 言えないのであり、法量等について検討を加えるのも、あながち無駄ではあるまい。

出土土師器の杯、皿、黒色土器について第1～2表を中心に考察する。

A_1類杯形土器

口径　最小102m/m、最大115m/m、偏差13m/m。平均値は110m/mであり、この前後5m/m（106～115m/m）以内に93%が集中する。

底径　最小44m/m、最大57m/m、偏差13m/m。平均値は49.9m/mであり、この前後2m/m（48～52m/m）以内に80%が集中する。

器高　最小39m/m、最大46.5m/m、偏差7.5m/m。平均値は42.4m/mであり、この前後2.5m/m（40～45m/m）以内に80%が集中する。

A_2b類皿形土器

口径　最小126m/m、最大146m/m、偏差22m/m、平均値は131.6m/mであり、この前後6m/m（125.6m/m～137.6m/m）以内に80%が集中する。

底径　最小38m/m、最大74m/m、偏差36m/m、平均値は49m/mであり、この前後7m/m(42m/m～56m/m）以内に74%が集中する。

器高　最小23m/m、最大29m/m、偏差6m/m。平均値は25.6m/mであり、この前後3m/m(22.6m/m～28.6m/m）以内に96%が集中する。

A_1類杯形土器は口径にあっては、106m/m～115m/m以内に 93%器高にあっては40m/m～45m/m以内に80%と極めて高い割合で集中化が認められ、この範囲に属さないものは僅か3例にすぎないのである。これは器形における法量の規格が存在したであろうことを推定する数的資料となり、型の標準化がなされたことを物語るものであろう。

A_2類　A_3類杯形土器における口径:器高の散布状況はA_1類杯形土器の散布圏内に属するものであることから、やはり標準品の存在が考えられる。

次に底径:口径の散布度はみると、A_1類、A_2類杯形土器とA_3類杯形土器は46m付近を境として散布部分が明瞭に分たれ、A_1類、A_2類杯形土器は底部が口径に近く（底面積が大きく、台形に近い）なるのに対して、A_3類形土器は逆に底径は縮小するものである。三者の比を見れば、

	器高	： 底径	： 口径
A_1類杯形土器	1	1.17	2.5
A_2　〃	1	1.19	2.9
A_3　〃	1	1.0	3

となる。この違いは器形の形態による法量的規格が存在していることを推定させよう。即ちA_1類、A_2類杯形土器の口縁部形態は尖形であるのに、A_3類杯形土器が玉縁で外反を呈する違いが底部縮小化につながせるのであろう。

なお、底径からの規格は表の如く、推定するのは困難である。

A_2b類皿形土器は口径 にあっては、125.6m/m～137.6m/mの間に80%、器高は22.6m/m～28.6

表 9

法量（1）

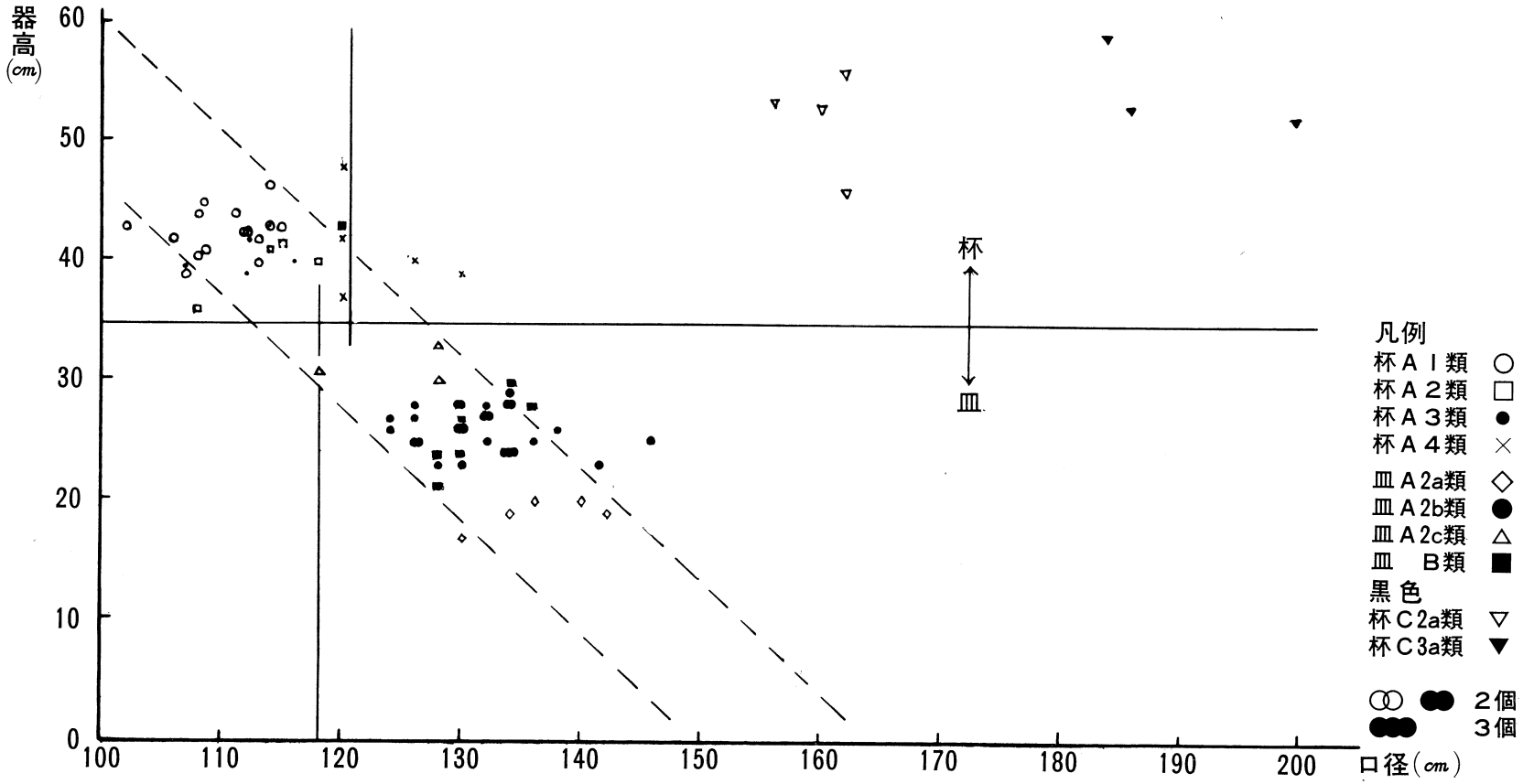
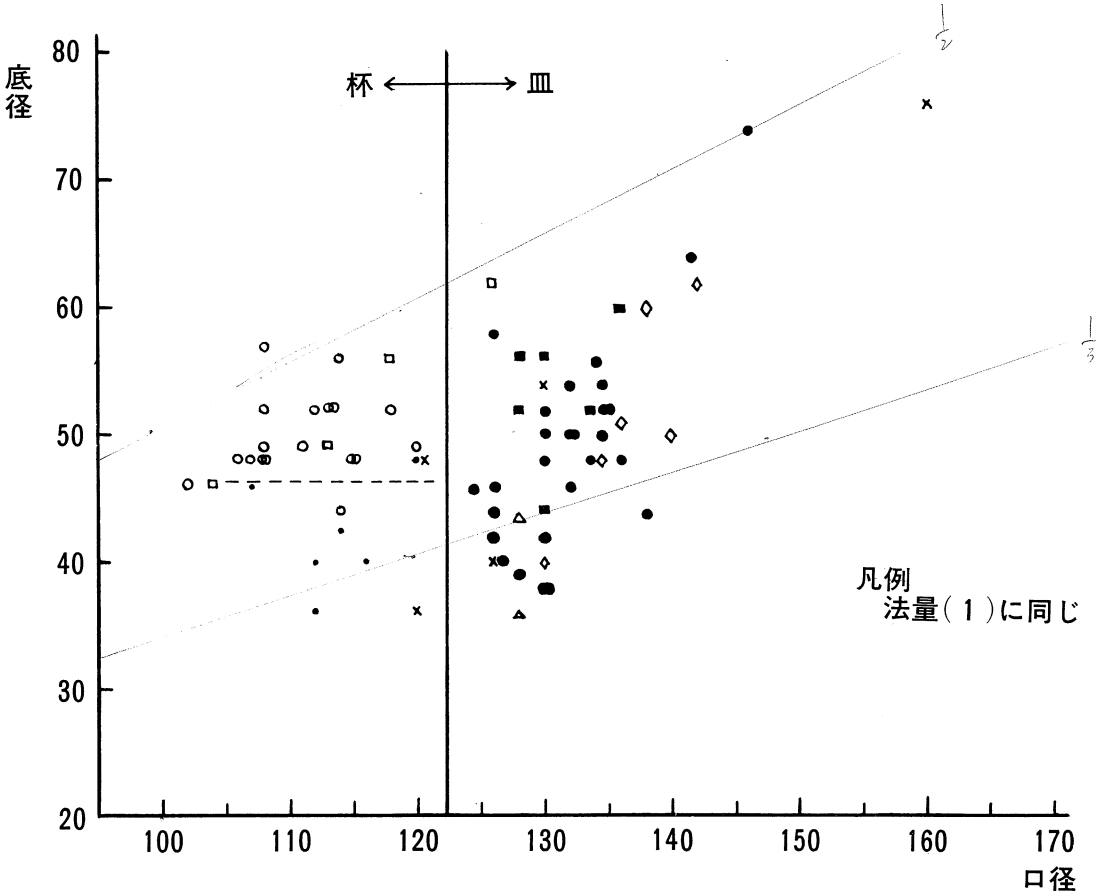

器高
(cm)
60
50
40
30
20
10
0
100
110
120
130
140
150
160
170
180
190
200
口径(cm)
杯
皿
凡例
杯Ａ１類
杯Ａ２類
杯Ａ３類
杯Ａ４類
皿Ａ2a類
皿Ａ2b類
皿Ａ2c類
皿　Ｂ類
黒色
杯Ｃ2a類
杯Ｃ3a類
2個
3個

表 10

法量（2）


底径
80
70
60
50
40
30
20
杯
皿
100
110
120
130
140
150
160
170
口径
凡例
法量（1）に同じ

m/mの高に96%と極めて高い集中を見せ、杯形土器同様に器形の規格化が推定できるのである。

A_2a類、A_2c類皿形土器は法量的には散布具合よりして、A_2b類杯形土器の両端に位置するものであり、現在の資料からは製作当初より、A_2a類、A_2c類皿形土器の規格があったものとは考えられずむしろA_2b類皿形土器製作過程に於いて偶然に生じたものと考えた方がよさそうである。

参考に3者の比を記すと、次の様になる。

	器高	： 底径	： 口径
A_2a 類皿形土器	1	2.5	6
A_2b 類　〃	1	2	5
A_2c 類　〃	1	1.3	4

B類皿形土器は法量的にはA_2b類皿形土器の散布圏内に分布する。

なお、杯形土器同様、底径から規格は、表の如くで推定困難である。

黒色土器の法量的位置は第9表の如くで、概して大形品にのみ製作されることが明確に看取される。

杯、皿形土器について法量を見てきたが、次の様に整理される。

1．標準化は口径と器高に対して 第1次的に規制を加えて行なわれる。底径に対しては、それ程明確な規制は存在しないと考えられる。

2．時期については晩期Ⅱ－2式～3式と特定できないが、杯・皿形土器は$\frac{1}{10}$勾配線（器高対口径）を中心に一定の比率で 製作される（各時期に於いて検討してないので、外の時期に存在するか、その勾配角度の状況は現在は不明である）。

（3） 整形方法等について

本遺跡出土製品は甕形土器を除き、小型の杯形土器より 大型の鉢形土器に至るまで、全て轆轤の回転力（本遺跡の場合右回転）による「水挽き成形」技法によって 製品化されたものである。しかし、全て「水挽き成形」技法を基本に置くものであるが、その製作過程は器種により 多少の違いが見られる。

皿形土器は

A類　「水挽き成形」→内外面の調整（内面篦磨きを含む）→切離し（糸切り）→底の 回転篦削り・胴部下部横位回転篦削り

B類　「水挽き成形」→内外面の調整（内面篦磨を含む）←切離し（糸切り）→底の静止篦削り・胴部斜位篦削り

の2通りの製作手順が見られる。A類は胴部下部を横位回転篦削した場合には、底も 必ず回転篦削がなされる整形上の規制が見られる。この場合、糸切り痕は 全く削り取るのを通常とするが、糸切り痕を残存するものが、1例であるが認められる。

一方、B類についても A類同様整形上の規制が存在する。胴部に斜位（口縁部から底部方向の）篦削を施した場合、底は必ず 静止篦削りによる整形方法が取られるのである。静止篦削りの場合にも、完全に糸切り痕を削り取ってしまう例と、底の周囲1㎝～1.5㎝を篦削りし、糸切痕を残存させている例とがあり、B類にあっては、その比率は$\frac{1}{2}$となっている。

杯形土器は

A類　「水挽き成形」→内外面の調整（内面篦磨きを含む）→切離し（糸切り）→底の 静止篦削り・胴部斜位篦削り

B類

ア　「水挽き成形」→内外面の調整（内面篦磨きを含む）→切離し（糸切り）→底部 回転篦削り→高台削り出し

イ　「水挽き成形」→内外面の調整(内面篦磨きを含む)→底部回転篦削り→高台「水挽き成形」

の3通りの製作手順が見られる。A類においては 皿形土器A類、B類同様、整形上の規制が存在する。胴部に斜位篦削りを施した場合、底は必ず静止篦削りが施されるのである。これは皿形土器B類に認められる規制と全く同じであり、杯形土器には黒色土器に於ける杯形土器を除いては、皿形土器A類の様な胴部下部に横位回転篦削りを施す例は 存在しない。静止篦削りを施した場合にも、完全に糸切り痕を削り取ってしまうものと、底の周囲の1㎝～1.5㎝を篦削りして糸切り痕を残の存させているものとがあり、その比率は皿形土器B類同様$\frac{1}{2}$である。

杯形土器にはB類として 区分した底が高台を形成するものが、あるが、これも最終段階において2通りの作り方が見られる。それは底部を 横位回転篦削りした後、同部に篦削りを加え高台を形作る所謂「削り出し高台」のものと、底部、底を回転篦削りした後、同部に粘土紐等を貼り付け、「水挽き成形」によって「高台を引き出して形作るものとである。しかし高台を形成するものは 量的には微々たるものである。

黒色土器（皿・杯・鉢・片口形土器）に於ける整形順序は 皿形土器にあっては、前述皿形土器B類、杯形土器にあっては、前述杯形土器A類、B類ア・イの外に

「水挽き成形」→内外面の調整（内面篦磨きを含む）→切離し（糸切り）→底の 回転篦削り・胴部下部横位回転篦削り

のものも認められ、鉢・片口形土器にあって 今述べた様な底の回転篦削り・胴部下部横位回転篦削りを施すものであり、この後、最終段階として黒色発現のための「いぶし」が行なわれるのである。

本遺跡に於いては、以上述べた様に轆轤「水挽き成形」により 製品が作り出されるのであるが、切離しに於いて全て「糸切り」による方法であって、「篦切り」「篦起し」は全然存在しないという大きな特徴が見られるのである。

胎土について略記すると 粘土に石英粒、赤色スコリア粒、細石粒、金雲母等が1㎡あたり7～8粒（表面上肉眼観察による）が混入されているにすぎず精々粘土であり、胎土は引き締っている。焼成は大旨良好であり、胎土断面に層を形成（2～3層）して熱が胎土にかかったことを 大半のものから観察できる。

（4）　編年上に占める位置

本遺構の遺物出土状況は 前述の如くであり、南部と北部のブロック状に集積された2群を中心として、その周囲から出土したものである。南部ブロックからはA_1、A_2類杯形土器、A_4類皿形土器、小型甕形土器の出土を 見ただけであった。特にA_1類、A_2類、杯形土器が、南部ブロック、出土品の95％を占める状況(註1)である。A_1類、A_2類杯形土器は 筆者編年試論の晩期Ⅱ－2式～3式に置かれるものであるが、A_1類、A_2類とも口縁部が内傾気味に開くことから、それ程 新しく時期の

下降を必要としないと考えられる。A_4類皿形土器は晩期Ⅱ－2式に特徴的に存在するものであり、杯、皿からすれば南部ブロック出土品は晩期Ⅱ－2式に 置かれるものであるが、同ブロック直上より小型甕形土器が出土した点に留意する必要があろう。即ち、該小型甕形土器は 晩期Ⅱ－3式あたりに伴出する器形に類似することであり、杯・皿類と小型甕形土器の出土層位は明確に別れない等、合せ考察する必要があろう。

一方、北部ブロックからは、南部ブロックに比べ多種類の器形が出土している。このうち 皿形土器が全出土量の略半数以上を占める。北部ブロックで量的に多いのはA_2類、皿形土器、A_3類、A_4類、杯形土器、黒色土器等である。A_2類皿形土器は晩期Ⅱ－3式のメルクマールに比定されているものである。A_3類杯形土器は南部ブロックのA_1類、A_2類杯形土器に比べ、口縁部が玉縁化しており、胴部下部に見られる斜位の篦削りは古いもの程入念に 規則正しく行なわれるのに、粗雑な仕上げである点、A_1類杯形土器よりも 後出のものといえよう。又、A_3類杯形土器の内面に 見られる篦磨は、遅くとも晩期Ⅱ－4式までに消滅するので、A_3類杯形土器は晩期Ⅱ－3式～4式に置かれる。又、A_4類杯形土器の初現は現在のところ晩期Ⅱ－3式と把えている。甕形土器は晩期Ⅱ－3式に見られる器形であり、これらからすると、北部ブロックの出土品は 晩期Ⅱ－3式に設定するのが妥当であろう。これはA_2類土器に伴って出土する器形である。

B類皿形土器の伴出比率が晩期Ⅱ－3式の伴出比率に合致する点からも納得できるのである。

北部ブロック出土品は晩期Ⅱ－3式に比定され、南部ブロックの出土品は 小型甕形土器の編年的形態がまた把えきれていない現状から、一応晩期Ⅱ－2式～3式に比定しておきたい。

今回の調査により晩期Ⅱ－3式に於ける様式的把握が、これまでより 明確になった。特に黒色土器に於ける様相は、その最たるものと言えよう。

なお、土師器集積遺構出土遺物は編年上晩期Ⅱ－2式～3式であるが、これは 南関東編年の国分式土器に該当するものである。

（5） 大坪遺跡の性格

南地点からは、2カ所の遺構が確認されたが、溝状遺構について、その性格が 何であるかは手懸りとなる資料を欠くのである。一方、土師器集積遺構については、夥しい土師器が 出土していることから、廃棄場所かあるいは 保管場所のいずれかの性質を持った遺構と考えられよう。出土土師器のうちの皿形土器、杯形土器等の法量について検討を加えて見ると、そこには 器形上の法量的規格の存在を推定させるだけの特定範囲内に極めて高率の集中化が認められる（標準品）のである。更に出土状況を見ると、南部ブロックと北部ブロックとの間に僅かであるが 相違が見られる。北部ブロックの土師器類は乱雑な堆積であり、無秩序に飛げ込まれたと 表現するのが最も適している様な状態であったし、出土土師器を観察すると、器壁の剝落したものや、亀裂の入ったものが 南部ブロックより多く認められたのも事実である。南ブロックからも 今述べた様に杯形土器の器壁に剝落したものや、亀裂の入ったものが若干であるが見られる。これらから推定して 該土師器集積遺構を不良品の廃棄場所と考えて 見てもよさそうであるが、南部ブロックの出土状況には更に、杯形土器が何個か積重ねられたものが何列かに並べられて置かれた様な節も 同時に観察されているので、南北ブロックを同時に廃棄場所と見なすことには、若干疑問が持たれるが、北部ブロックに限れば 廃棄場所と見なしてもさしつかえないと考える。

土師器集積遺構出土の土師器類が廃棄品か非ざるかは別として、標準品化された 土師器の夥しい出土と、出土した土師器類に当然この時期の住居址であれば 伴出が見られる墨書を施した例を全く欠く事実からすれば、今回の出土品は今だ末端の消費者の手に渡ってはいない品と 考えてもよろしかろう。

結論的に言えば、該遺構は窯で生産されたもののうち販売ルートにのせられない 不良品を廃棄した場所と言えよう。更に南北ブロックの周辺から 全く焼土を発見できなかったので、該遺構が窯の本体でないことも明らかとなった。南ブロックの出土品も廃棄品か、商品として 保管された完全品のいずれかであろうと推定される。

南地点は土師器集積遺構の出土品の外に、各グリッドよりも 遺物が検出されており、特に第24図1～3、第27図56などは末木が指摘している様に 南関東編年の真間式土器に比定されるものであろうが、特に第24図3の杯形土器は 真間式土器と国分式土器の接触点あたりに位置づけられるものであり、県内の該時期における編年上の資料として興味あるものといえよう（註2）。

北地点においては、特に十郎橋近くより ブロック状で出土したものは、晩期Ⅱ－4式～5式に比定できる一括資料として重要である。

大坪遺跡付近一帯は、今回の南・北両地点の調査によって、

1．夥しい土師器の出土

2．器形の形態が酷似する

3．墨書の遺存例が見られない

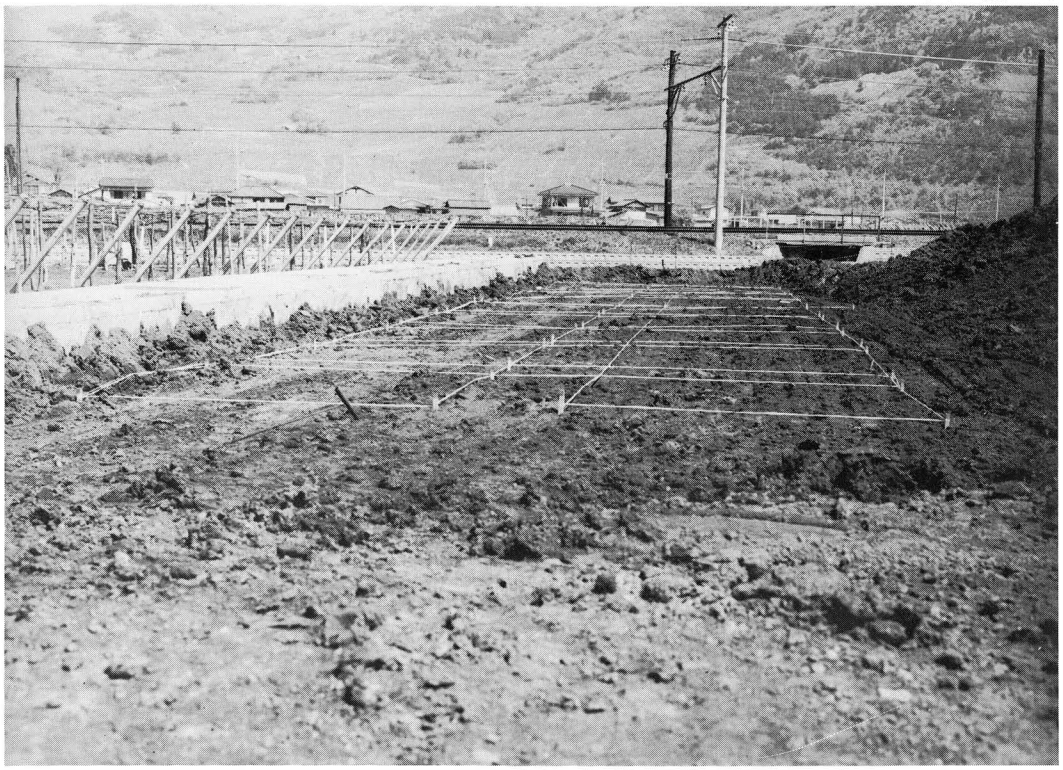
4．真間式～国分式に渡る遺物である

の諸点が明らかになり、一大窯業地であったことを今まで 以上に妥当性を高めた訳であり、かつ長時間に渡って営まれていたことも推定できるのである。また県内に出土する 土師器等の最大の供給地であることも合せ考察できるところとなった。（註3）　（菊島）

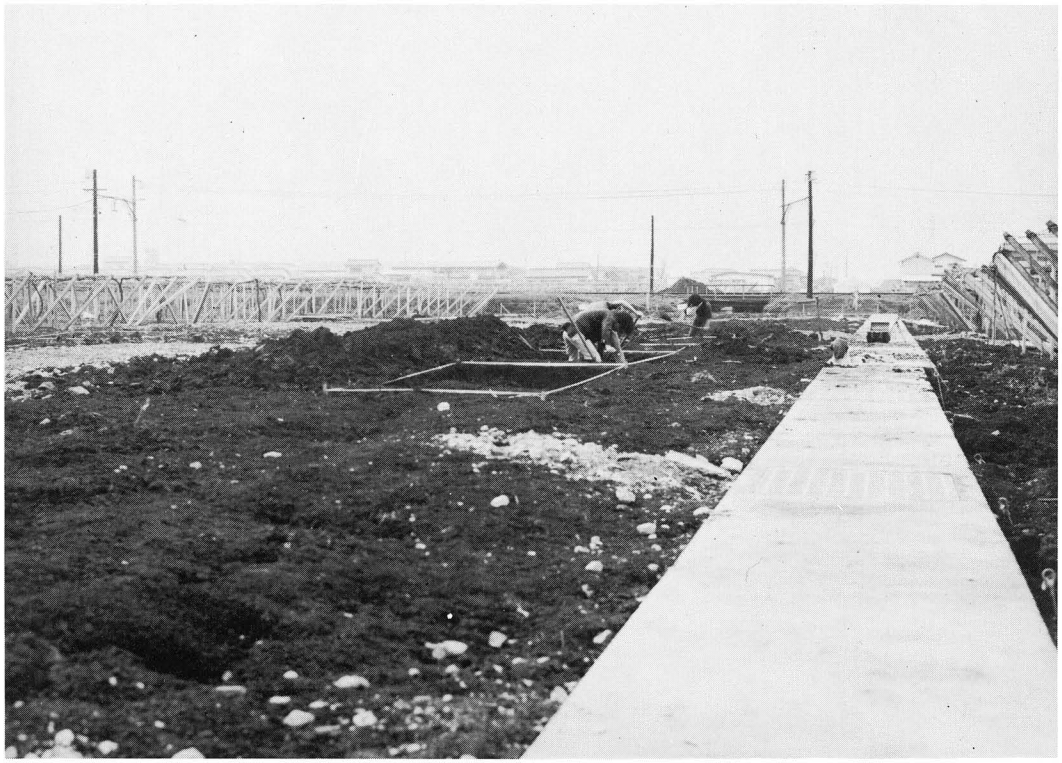
（註1） 拙稿 「山梨県に於る晩期土師式土器の編年試論」『甲斐考古』12の2

2　第25図3の杯形土器の胴部に見られる篦削は通常見られるところの斜位のものでなく、横位に細かく削る手法のものであり、県内の晩期Ⅱ以前に見られる手法である。

3　南関東編年の真間式以前に該当すると考えられる遺物（第28図69・70・71）も出土しているので、更に古い時期に土師器の生産が開始されていたことも考えられる。



1、南地点全景（南より）

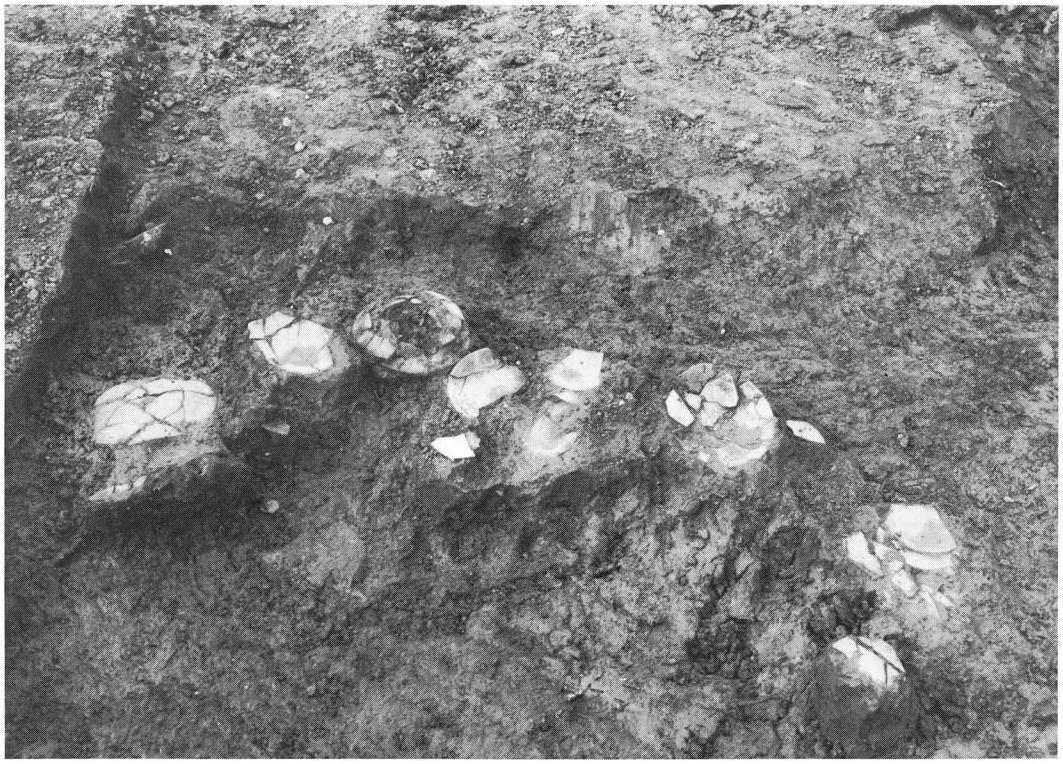


2．北地点発掘風景

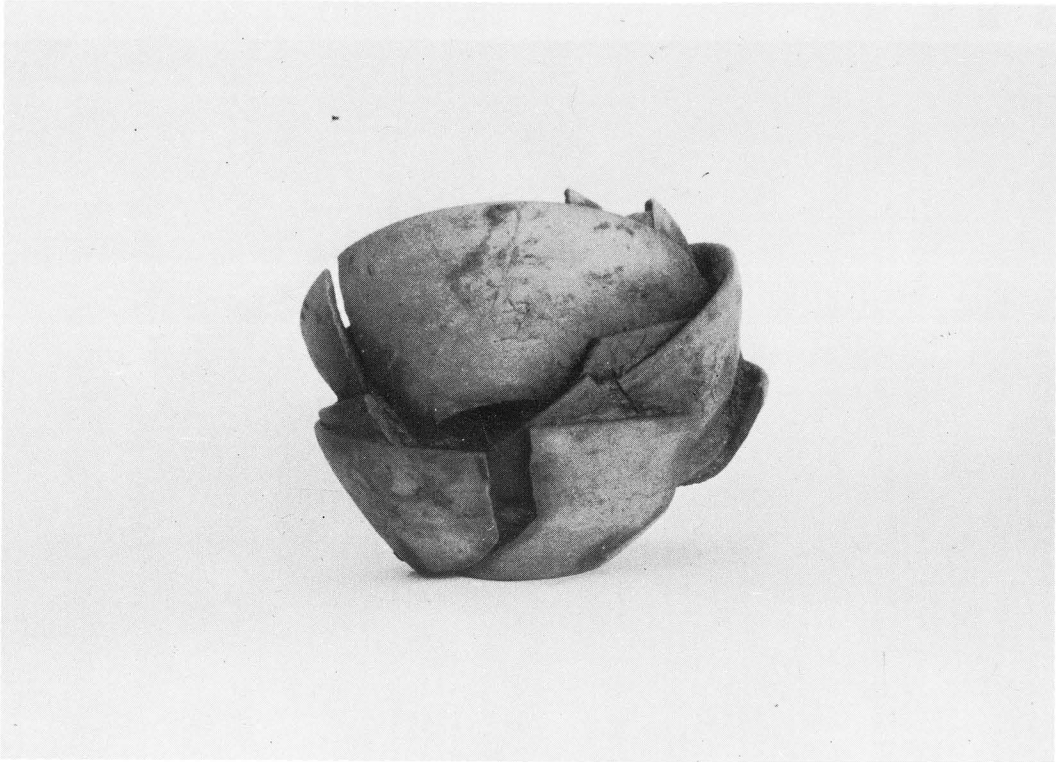
3．南Ａ２グリッド土師器集積遺構

4．同　上（南ブロック）

5．同　前（北グロック）



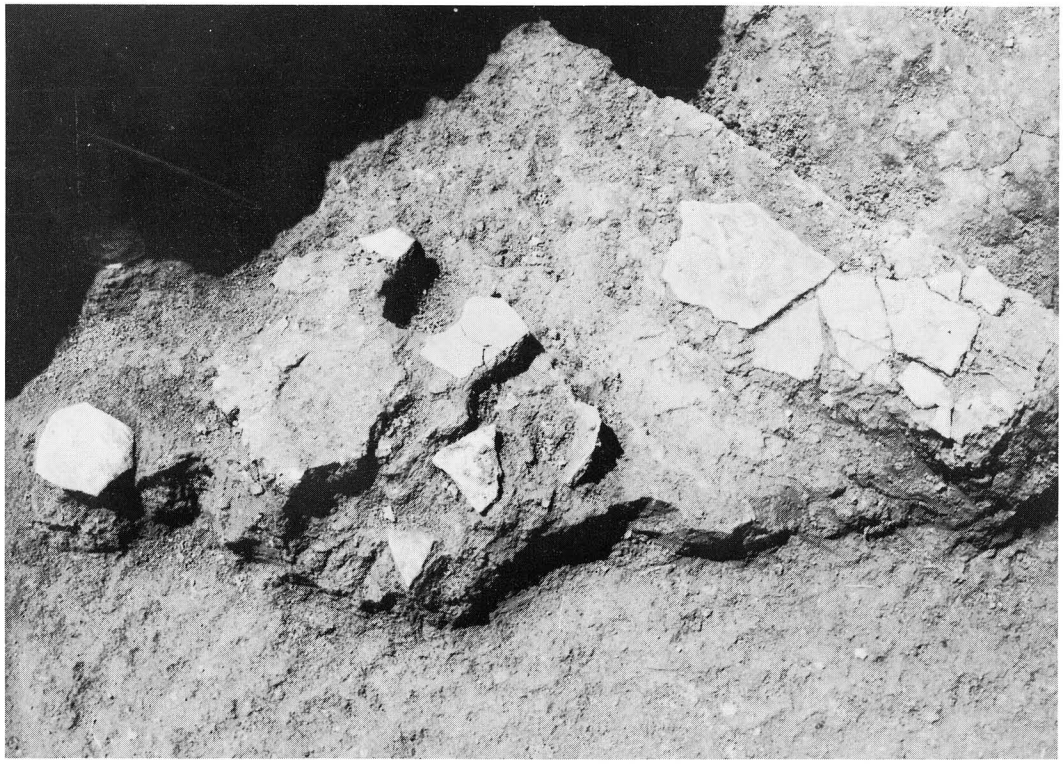
6．南A４グリッド



7．土師集積出土遺物

8．南A２グリッド

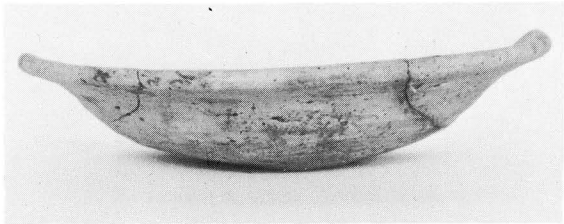
9．南A５グリッド



10．北A４グリッド

南A２P４

南A４P９

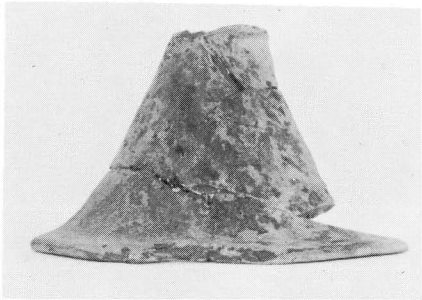


南A４P10

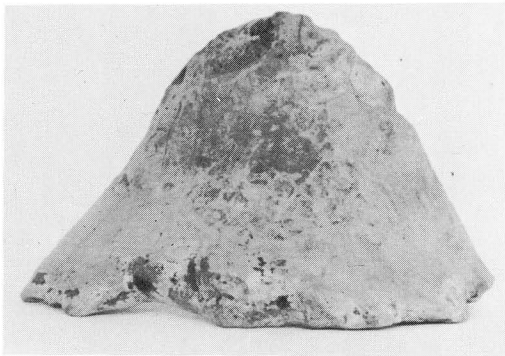
南A４P14

南A７P１

南A５P１

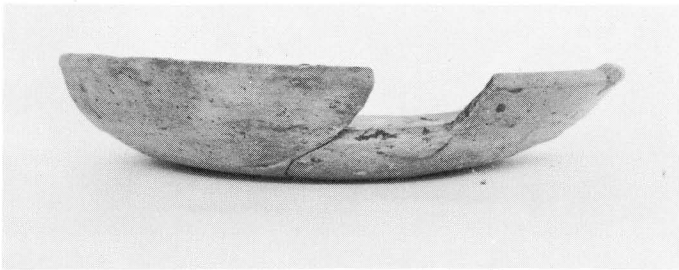


南B１

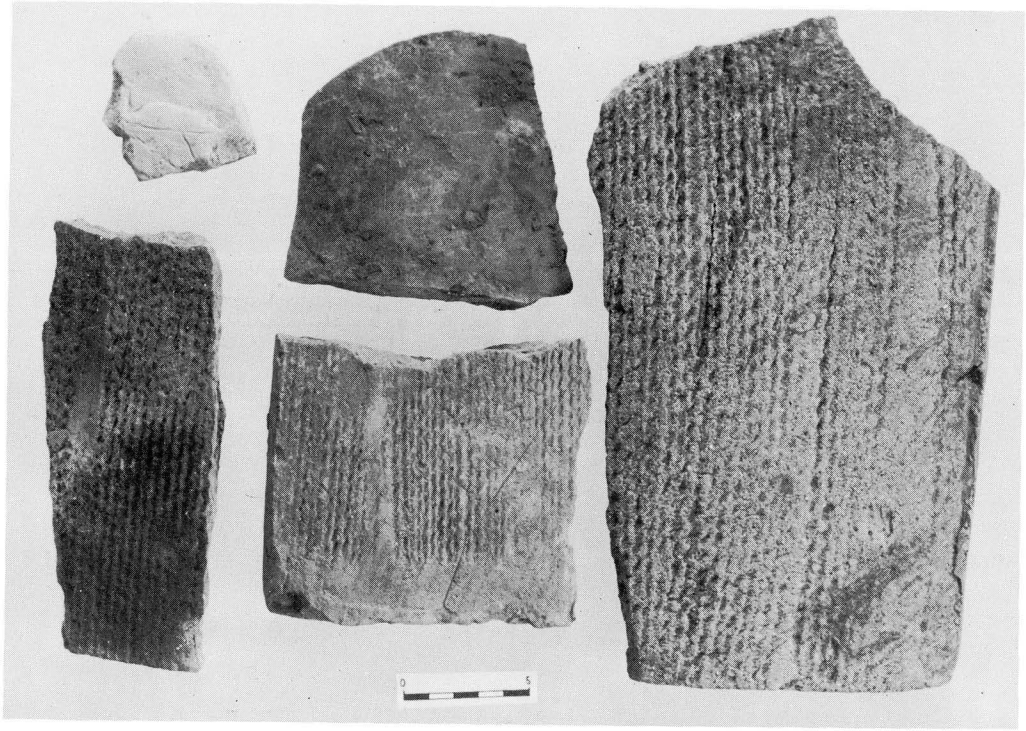


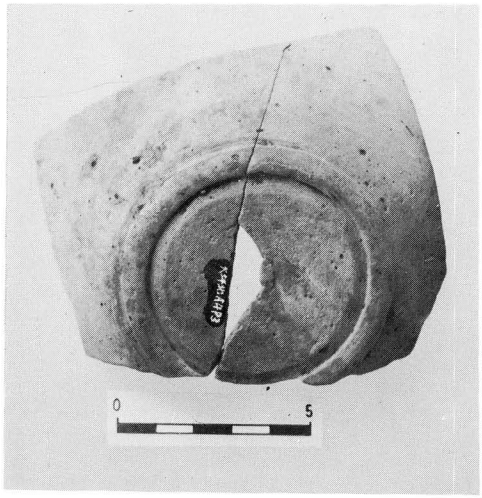
南B５

北A４P２

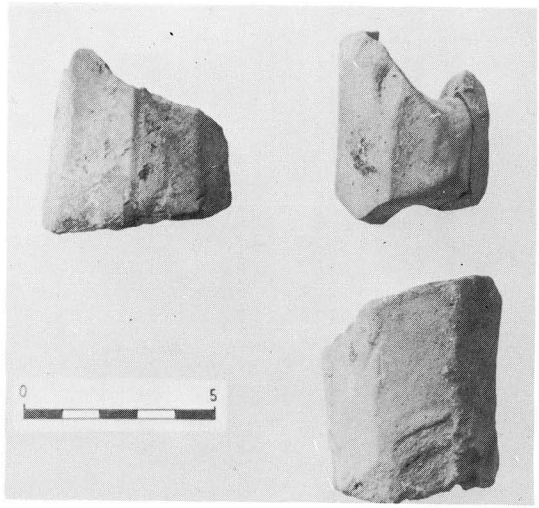


北A４P16



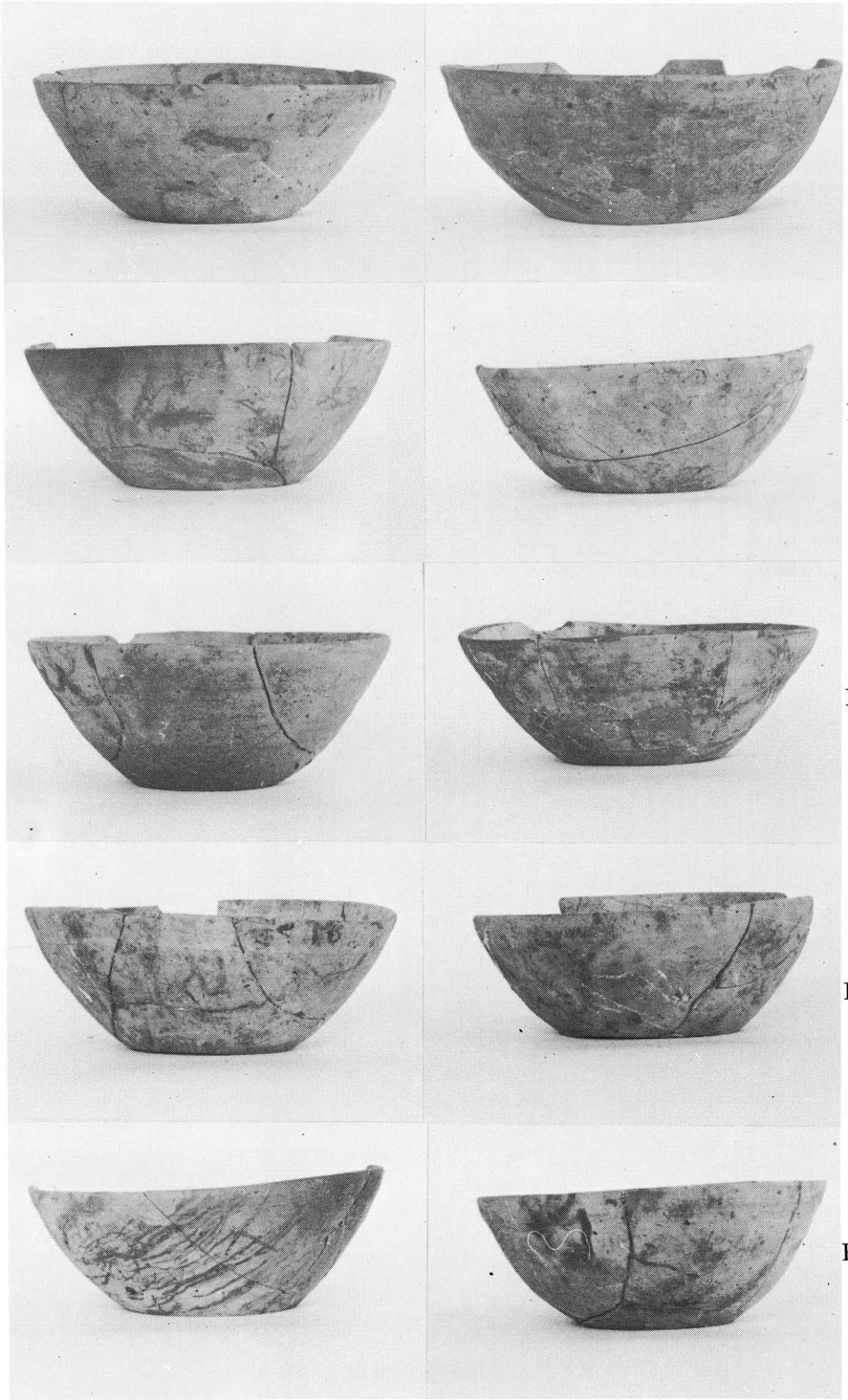


南Ａ４Ｐ３　削出高台

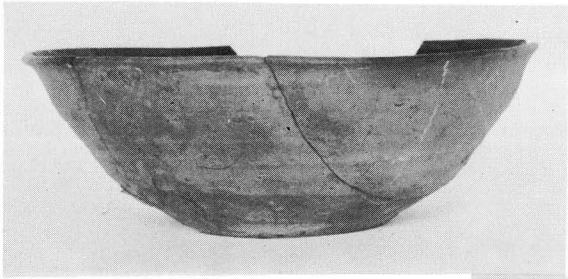


北表

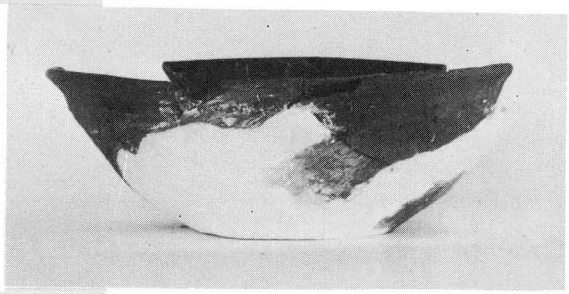
南Ａ５Ｐ２　表



A 2　土師集積遺構出土遺物(1)

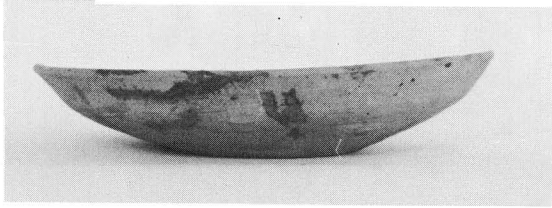


A 21 H



②

A 2 ベルト

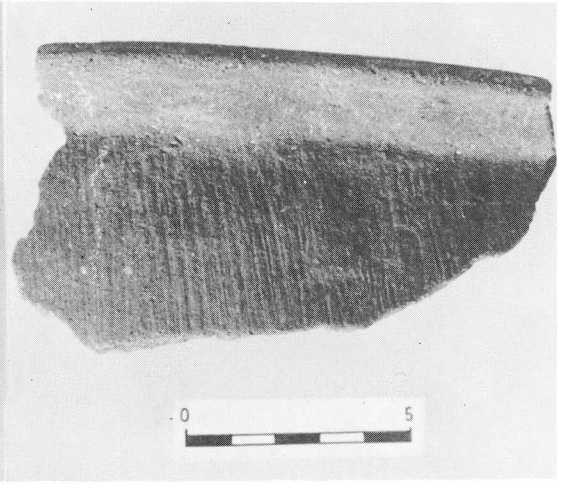


A 21 H

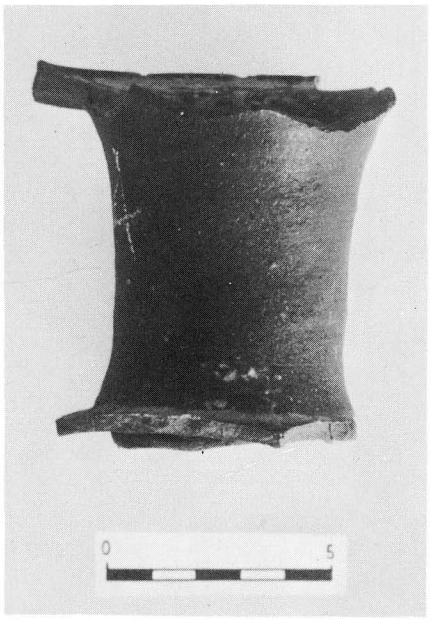
A 21 H

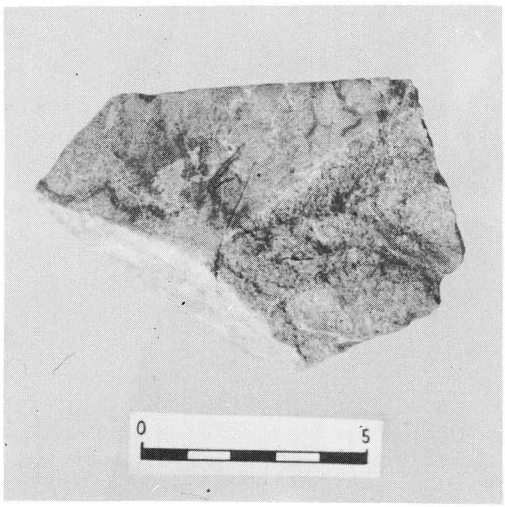
A 2　土師集積遺構出土遺物(2)

P 10



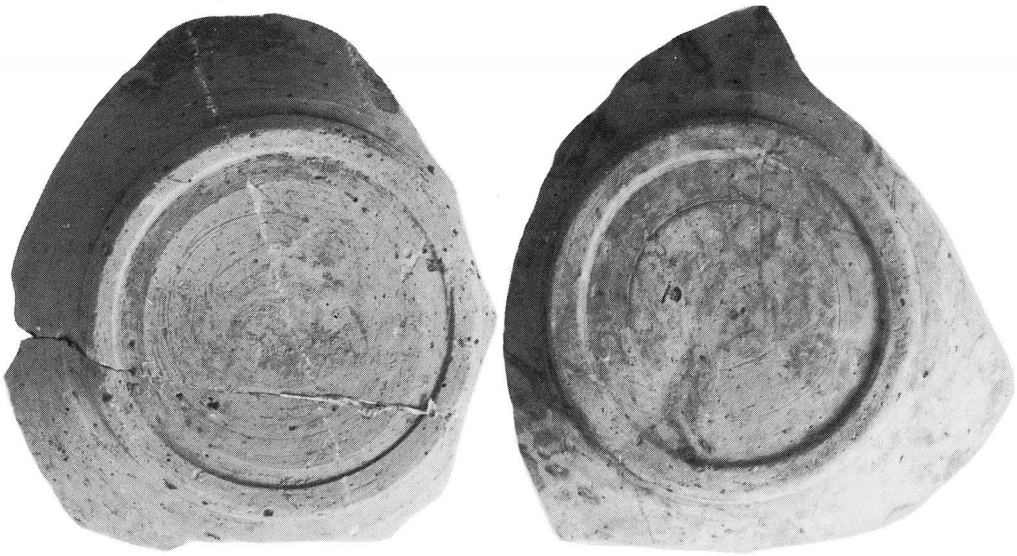
P 7





ト石

A 2　土師集積遺構出土遺物



ヘラ削出高台

黒色土器内面暗文

A 2　土師器集積遺跡出土遺物

昭和51年３月25日印刷
昭和51年３月31日発行

大　坪　―甲府市横根町反田
大坪遺跡発掘調査報告書―

発行所　甲府市丸の内１の６の１ 県文化課内
山梨県遺跡調査団
印刷所　温故堂印刷株式会社